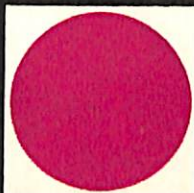
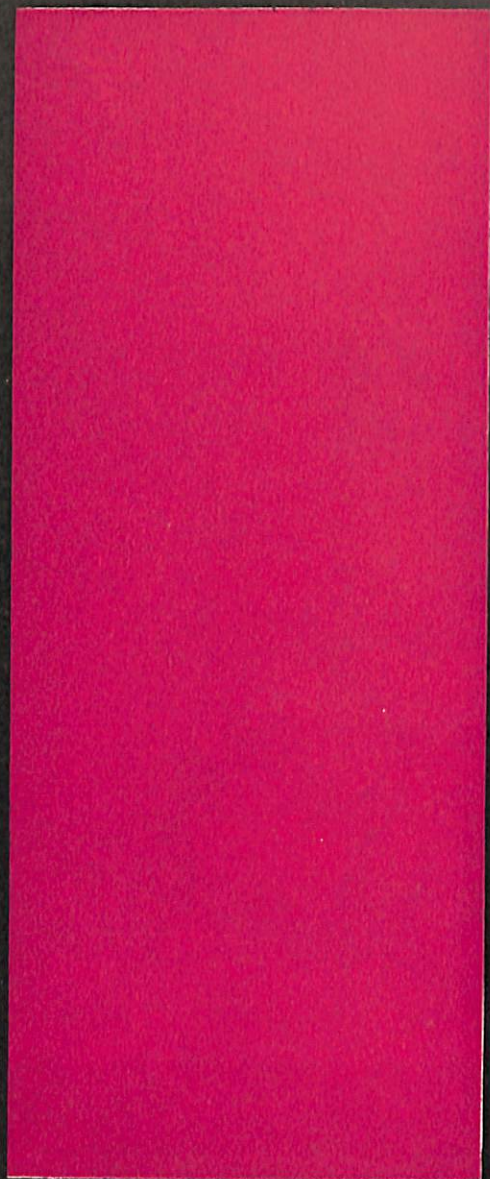


保 存 用

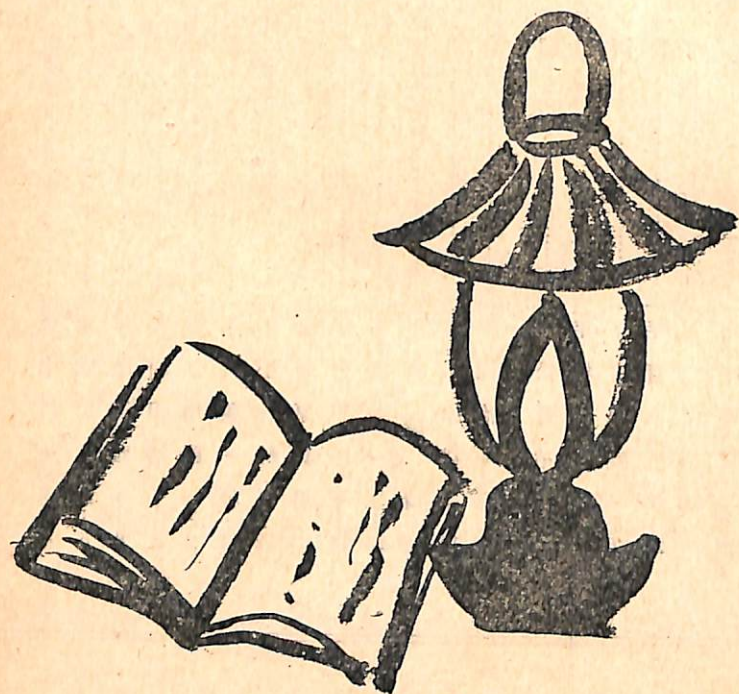
る・くーる

東京都立松原高等学校



9

る、くーる



東京都立松原高等学校生徒会

目次

卒業生諸君におくる	校長 中村 一勇	4
詩 故郷	教頭 成田 武雄	5
風	一年 渡辺 雅子	8
"	一年 村田 浩子	8
"	三年 加川 康子	9
無題	一年 斉藤 一枝	11
十月のある日に	三年 小林 純江	12
混迷	教諭 菅原 真静	13
悲しみ	二年 吉田 洋子	14
自然の仕打ち	二年 高井 一枝	15
少年のむしばまれたそれ	三年 斉藤 清	16
思い出し	二年 船水 洋子	17
はめ絵の中の日々	一年 佐治 隆彦	20
随想 随想二題	二年 松野 祐三	24
遙なる青空と白い雲	二年 堀内 勝夫	24
五十の手習	一年 吉川 暁子	26
貴重な経験	一年 青木 竹節	26
家の犬	一年 二川 淳	27
暦をみては思う事	一年 平野 邦子	27
懐しのバリ	一年 玉木 ゆかり	28
等々力溪谷	一年 谷口 全代	29

或る顔	二年 小名 やす江	30
死と人生	一年 河田 正人	31
父母そして僕	一年 大坪 忠雄	33
T先生	一年 原武 二郎	34
九州周遊	一年 後藤 展志	35
今日——この頃	一年 金原 みゆき	39
生きることゝ死ぬこと	三年 中村 一光	40
曇露	三年 中山 民子	41
たわごと	二年 橘田 洋之	44
ママへ——大晦日の車中にて	三年 小林 純江	46
弟のこと	二年 佐野 李影子	51
卒業を真近にひかえて	三年 鈴木 玲子	53
やってみて知る	二年 植田 祐子	54
母校をもつということ	三年 高井 宏子	56
今に想う	三年 角田 肇	57
友へのたより	二年 高井 一枝	60
制欲	二年 佐々木 幸	60
醜男の記録	二年 甘木 貞子	62
子供と大人の話	三年 清水 珠美	66
る・くーるによせて		75
クラブ紹介		87
編集後記		96



巻頭言

る、くーるに寄せて

学校長 中村 一 勇

単なる文芸誌にすぎなかった本誌が、新年に当って第九号を発刊するまでに至ったことはおめでたい限りである。当初は生徒有志の文芸作品の発表を目的として、生徒等の自発的発意によったもので全く、自主的なもので生徒は全く自由の立場に於いて、各自の胸にわだかまる心情を文として、歌として発表して来たわけである。然し号を重ねる毎に、民主主義の思想の普及とマスコミの発達によって、其の内容は深さと広さを増してきたといえるであろう。全員のよろこび、悲しみ、迷い、考え、判断想像、推理等少なくとも本校に籍をおく全員の問題までも取扱うようになったといえないであろうか、文芸作品は勿論、創作、詩歌、論説、紀行、政治経済、宗教、教育文化等あらゆる面

を包含するようになった。尤も純粹に夫々の項面に応じた同志の同好誌は、多々益々弁すべきで何等差支えないばかりでなく是非共必要である。元来がその同好誌の筈であった「る・くーる」は余りに発展し過ぎて総合誌的な役割りを果さねばならなくなった。学校としてもこのような発表機関は是非とも必要なのである。「る・くーる」は時代の要求によって文芸誌の他に他の内容までも清濁合わせ包んで貰い度いのである。水産会社が農産加工をやったり、農家が牧畜、農産加工まで延びて来たように、「る・くーる」もこのような立体的に拡充することが時代の流れともいえるのであろう。生徒職員の不平不満、悩み、判断、希望要求までも自由な発表が許されるべきであらう。

「る・くーる」が余りに発展し過ぎて本来の文芸誌の域を逸脱することは創刊の趣旨に照して、重大な問題ではあるが全生徒職員が時代の要請によって成長していくのだとの理由を了とするならば、決して体面にこだわる必要はないのではあるまいか。「る・くーる」を全校生徒職員に解放して、あらゆる視野に立った記事を埋めて一目して生徒の志気意向学校全体を知る唯一の総合誌とすることを念願してやまないものである。文化の事は人間精神を知識、感情意志の三面に便宜上分けても、夫等のものが独立して働くことは一つもないからである。

卒業生諸君におくる

成田 武雄

新しい年を迎えると共に、何か慌しい気持ちに襲われるのは、私一人だけでなく、学校関係者全部が経験するところであらうと思う。これは三月が学年の切換えという学校全体の総決算期にあるということばかりでなく、又、新しい卒業生を送り出し、新入学生を迎えねばならぬという。古いものへの愛着と言うか、卒業したあと心配なくやってい

けるかどうかという心配というか、新入生に対する期待と希望などが混がらって、こうした気持ちになるのではないかと思う。本年は、三〇三名の卒業予定で、そのうち九七名が就職希望あとの二〇〇名程が大学進学希望であって、就職希望者は、それぞれ立派な会社、銀行に就職が決定している。就職先の決定している生徒は、卒業後のあり方について、それぞれ大きな夢と希望を抱いて、将来の生活プランを設計していることと思う。私も皆の胸中を察して誠に嬉しい気持ちで一杯であるが、今時に次の事を送別の言葉として送りたい。まず第一に、夢と希望を持つことは、若人の特技であり、これなくしては若人と言われないけれども、夢と現実はずしも一致するものでなく、むしろ一致しないのが普通であるから、この時決して落胆などしてはならない。現実を少しでも夢に近づける努力をすべきであると思う。次にどの職場にあってもそうであるが、その職場の必要な人になること、つまり居ても居なくてもよいような人になってはいけない。そのためには、自分に与えられた仕事をどのように能率をあげてゆくかを常に研究していることと、骨おしみをしないことである。

最近は一一般に身体的勤労をさげすむ風潮があるが、若い時には、必要に応じて進んで身体を動かすようにしなければならぬ。

第三に学校を離れても、読書することを忘れないように。

日進月歩の世の中にあつて不断の勉強をしないと、時勢に遅れ、取り残されてしまうから。自分の仕事外のことでも、教養として身につけるようにしたいものである。其の他いわゆる老婆心というか、いろいろ述べたいことがあるけれども、読書によって広い社会を洞察し、自分の考え方を反省してゆく時は、職場にあつては頼母しく好ましい人となり、社会にあつては、立派な社会人として楽しく過してゆけるのではあるまいか。

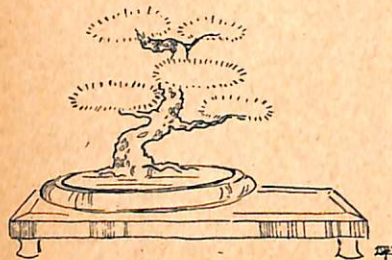
次に二百名の進学希望者に対してであるが、恐らく現在皆さんの気持は、不安と焦燥で居ても立っても居られないような心境にあるのではないかと思われる。多くの競争者の中から合格の榮養を荷うことは、私も青年時代の経験を

回顧して考える時、並大抵でないことを想像し皆の気持は充分わかるつもりである。

しかし入試も人生における生存競争の一つであることを思い、強い意志と努力によって断じてひるんではならない私は、三年のあるクラスで話したことであるが、中国では古来成功への道として、運・根・鈍の三つをあげている。

運は普通にいう運が良いとか悪いとかの運であり、試験の結果は其の人の実力に待つことは勿論であるが、しかしそののみでなく、相当な実力を持ちながら落ちることもあつて、運の良悪が相当関係することがある。根は根気即ち意志が強く、一定のプランによって、うまずたゆまずの根気の強いことは、何事でも成功させずには置かないものである。鈍は鋭の反対で、少し鈍いことであるが鋭い人即ち秀才必ずしも合格することが、又は社会において成功することは限らず、時にその反対の事例も多いものである。秀才は自己の頭悩、しかも親から譲りうけて少しも自分の誇りともならない頭悩のみに頼って、根を忘れ運をさげすむためであらう。

私の教職中の経験においても、秀才をもって自他共に許していた生徒が、非常な努力家であつた例があり、自分は秀才でないから大いに努力すべきであるという考え方こそ、成功への近道というべきであらう。くれぐれも健康に留意の上、努力されて、自己の志望を達成されることを心から御祈りする次第である。



詩

故郷

一年 渡辺雅子

ミルク色の霧を押しわけて
夏の日射がさし始め
蜜蜂の小屋を照らします。
キラ／＼輝く朝露を
そっと指先ではじいたら
遠く槍ヶ岳を写しだし
はかなく消えてゆきました。
黄金の波をゆるがして
真夏の日射がひるがえり
農夫の汗に吸いこまれた。
ツヤ／＼輝く桑の実を
そっと口に含んだら
幼い日々を写しだし
唇を紅く染めました。

風

うすゞみ色のたそがれが
千曲の流れを深く沈め
窓辺をそっと包みます。
ふと唇をもれた詩の
底にたゞよううれいが
無数に輝く星空に
涙と共に吸いこまれました

一年 村田浩子

庭の片隅で、
落葉が輪を書いた。
幾重にも、

枝も、落葉も、
そして人でさえも
舞い踊らせる風は、
鉢植の草にも襲いかかる。
押す力もなく、
回る事もできないで、
ただ走る風を追って行く。
ちょうど、
弱い人間のように！

ヒュー
薄暗い幕で
おおわれた町に、
その音だけが、
長く響く。
恐ろしいもののように！
強いもののように！

ヒュー
風がふく、
恐ろしい音を
まきちらして。
人々は、
頭をたれた人々は
力いっぱい風を押す。
ザー
枝が鳴る

三年 加川康子

君はいつも云っていたね
"山はいゝなあ"って
"山の頂へ立つと
まるで世界を征服したような
気持になるよ"って
"山はいゝ！
実にいゝ！"って

君は山から帰ってくると
いつも真先に話してくれたね。
おどけた調子で……こんな風に、
"茂倉の頂上で
大きな声で
カアサーンって
叫んだんだ、
誰もいないと思ってね、
そしたら
君の兄貴に聞かれてね……"
これは君が

上越国境を縦走した時に……

“四日目だったかな？”

フィックス地点を過ぎてから
新たにラッセルを続ける

あの時ね、

温度が上昇しちゃって

振りかかる雪が

ヤッケを濡らす程だったよ……”

これは君が

兄貴達と槍ヶ岳へいった時、

そう／＼その時、

“こんな話もしていたね、

“仔熊がじつと我々を見下して

いたんだ、

誰かがビッケルを振り上げた

途端

へへへへ——

何をしたと思う？”

“……………”

“その仔熊

クルリツと向きを変えると、

猛烈なラッセルを始めた。

そこで一同

大笑いさ！”

“仔熊でよかったね”

“……………”

又

あれはマチガ沢の大滝の附近

だっけって覚えていたね、

“クレバスに

ビッケルを落して……”

あの時は

本当にこまったね

なにしろオヤジのだらう……”

“それで

ビッケルは？”

“もちろんそのまゝさ、

あのビッケルも

あそこで

永遠の眠りについたんだ、

きつと

本望だらうね”

君はこんな話を

たくさんしてくれたね！

でも、

もう、君の話も聞けないね、

たゞ、

君が残してくれた

たった一つの

ハーケンに聞くほかは

君はいつも云っていたね、

“山はいゝ！

実にいゝ！

あんなところで死ぬ奴は

バカだ”って

“神聖なところを

汚がす

大バカ者だ！”って

無 題

一年 斎藤 一枝

夕陽が西の端に沈む頃

今日も一日が暮れようとしている

裏山に登り遠い海を眺めると

水平な海にゆら／＼とゆれる

小さないさり火

暮れゆく日を惜しむかのように

三つ四つ五つ六つと

今日も一日が暮れようとしている

人々は明日に希望をもって

朝日がきら／＼と

東に上るのを待ちながら

大自然に朝が来た

人々は朝日の輝きに笑えみ

希望と期待をもって動き出す

まぶしい太陽のもとで

子供はすく／＼と成長し

老人は

余生を心ゆくまで楽しむだろう

いつの間にか

昨日の様な夕暮れ時

裏山に登り遠い海を眺めながら

三つ四つ五つ六つと

今日も一日暮れたことを知る

大自然がくる／＼と

回転する中で

私は亡くなった母を思い出し

お母さんと呼んでみた
お母さんどこだまが。

十月のある日に

三年 小林 純江

どうしてなのかしら

ミナにはわからないのです。

貴方が旅立って半年

もう忘れねばならないのに、

私にはそれが出来ないのです。

あの時からずっと同じ気持、

そうなんです。

二年半も前のあの時からね

どうしてこんな気持になったのか

ミナには

未だにわからないんです。

とにかく……上品で美しい人……

そう感じたのでした、あの時に

お会して

わずか四・五日でした。

あの日からずっと今まで、

本当にわからないんです。

ミナ自身の気持がです。
そして貴方の気持も

私にはわからないんです。

お別れには決心していました。

悲しいけれど

我まんしようって。

でもだめでした。

後でワーワー泣きました。

やっぱり恋しかったんです。

あの美しく輝いた瞳が

やっぱりなつかしかったんです。

たった一言ささやいた声が

思い出となりました、今はもう

しきだめなんです

忘れられないんですミナには

今も心に浮んできますあのことが

やさしく笑ったあの日の事が

抱かれましたあなたの胸に

言っていたきたいんです。

「君が好きさ」と

待っています その時を

いつまでも、いつまでも……

混 迷

菅 原 真 静

回想は反転して現実と混濁する

若人は経験を嫌悪して

自我に感溺し、

老人は経験の中に沈潜して

厚着の冬を脱ごうともしない、

断想は撃突して

赤い血をにじませて行く、

ここには三段論法は通用しない

弁証法は生の展開を指して

新しい世紀を作ろうとするのに

しかし しかし

なんとこの世には驚馬の多いことよ。

しかもこの驚馬は貪欲に満ちて

ここでは三段論法すら駆使しよ

うともせず

新しい断層は亀裂に喘いでいる

若人たちよ

君たちは何を欲し 何をしよう

とするのか。

世紀の断層は

いつも寂知と行動によって脈打

つのに

彼は彼が狂人であることを知ら

ない。

新しい断層の模様は錯雑して

彷徨の誘惑が触手をのばして

狂いに狂った狂人が今日も街を

行く。

街は陋巷にビルをはだからせて

回想に生きようとす私をさえ遮

えぎろうとする。

(教諭)



悲しみ

二年 吉田 洋子

クロよ

暗闇で光るお前の瞳は
異様ではないか
聞かしておくれ
お前の悲しみを

“私の悲しみを”

あなたは分ってくれるでしょう
そして人間への憎しみもね

昨日私は母となりました

三匹の母とね

子供達は私に似て

黒く、目が大きく

そしてかわいかったのです

私の胸の三匹は

無心に眠っていたのです

私は幸福でした、とてもね
しかし

今は違うのです

母の役目は一日限りでした

子供は私を離れました

私は

悲しみと憎しみに変わりました

子供が離れた悲しさと

子供を奪れた憎しみに

あの時

御主人は

子供達を抱き上げて

“クロよ、苦しかったかい”と

嘆ぐさめてくれました

私は

“御主人様

かわいい子供でしょう”

得意になって言いました

御主人に抱かれた三匹は

泣いて私を求めました

そして

これが最後でした

子供は帰って来ませんでした

“奪われた”

自然の仕打ち

二年 高井 一枝

返して下さい”

私の泣き声は

一日中続いているのです

薄暗い屋根裏で

人間を憎む心は

異様な光になりました

そして

悲しいのです

“力”が無い事にね

人間に向かう“力”も

自分の子助ける

“力”も無い事を

クロよ

泣くのはおやめ

一日だけの母親

それは人間界にもある事だよ

憎んではいけない 人間を

これが

母親の悲しみ

そして

女の悲しみだよ！

己を知り

始めてそれは人間といえる

すべて生物がそれを望み

悶えるが

それは人間の本能であり

自然である。

己を知る喜びは人

人生に踏み出し

始めて生きた価値がある

己を知って

すべてを知りつくす

けれども……

私は己を見つめるのに

苦しみ、喘いでいる

随けば、随くほど己が分からず

暗い海底に突き落された様に

浮き沈みする泡の中で

苦しみ、喘ぐ。

この叫びが聞えるか

地底の叫びが……

己を知ろうとし、
知る事が出来ぬ時
始めて自然に打ち勝てず
己は自然の前に屈す。
それが己を
知る事の出来なかった
己に対する罰であり
人間の運命である
自然は始めて
そこに仕打ちを与える。
人、自然の仕打を受けた時、
始めて己を知った時である。

少年のむしばまれたそれ

三年 斎藤 清

灰色の雲が夜にかわると
叫びつつ
ふと、疲れを覚えるのだ
粗々しさを肯定した私の貧しさが寂寥とした孤独の中に
放り出される時分

何をか知り求めた私は

へ心のわだかまりに
たまりかねて立ち止まる。
今年の冬もかわりなかった
ほの暗き街灯のもとで
やがてめぐりくる春に
おれの心はかわりなかった
虚無と疑惑が共鳴し
凍てつく空には星が出て居る
すべての物事は
それでいいのだ……
意外に早く疲れて仕舞った私の心が
傷つきやすい現実
あまりに
年をとり過ぎて居たのに気がついた
私は
もう以前の様に
そんなに夜が素晴らしくとも
二度と子供の
あの純な気持ちで
歩くことは出来ぬだろうししないだろう
仮りに
フーガの音が私を誘い出そうともあの窓からこぼれるあかりは
他愛ないこの足音に

決まって程遠いからだ
何故なら

孤独の中に放り出された私の心で嘆がれた一つの意志が
滅んで行って仕舞っていたからだだった
それは

はかない観念に
異常なまでのさかいらいを呼び起こさせる
それがいつしか

一人の少年のむしばまれたものとなり
その少年自身の瞳が見出し出した
虚偽と偽満に対する悲哀——にしわがれて死に絶えて行った
のだ

今は最早

とぎすまされた憩をもつてしても
このはるかなる思いに、形象よ
だまpping
身をまかせることは出来ないのだ
それ故

何事もが正しいのだと
私の心はあきらめる

——うつろなものよ

私のいしづえであった

あの日の

かのせまき風景画の中に

美しいものと共に

死に絶えて行け！

そしてからして

私は以前よりも尚強固に

つき進む為

虚偽と偽満に対する悲哀——に

私はここで

あらたに失意をいだき

怒りと憎しみを学びとらねばならぬ

思い出

1、浅間山

浅間山は青かった

浅間山は煙をはいていた

真青な空

真白な煙

そして、無数の赤とんぼ

二年 船水 洋子

丘の上から浅間が見える
松林の中からも
分校の庭からも
りんどうの咲く野原からも

浅間は落着いている。
驚くほど、どっしりとかまえて
それは母の落着きでしょう
浅間牧場に
家の子馬はいつている
きつと、かわいがっててくれる
浅間はやさしい母だから……

わきにすわった子浅間は
いつも私の友達だった
お母さんに叱られた時
子浅間は
私をなぐさめてくれた
生まれて間もなく他界した
弟のお墓へ行く時も
浅間はジッと見ていてくれた
きれいに咲いた野の花を
弟のお墓にそえる時も

先生とお友達と写生に行った
広くて、花が沢山咲いていた
松の木が点々とはえて
その向こうに
浅間がでんとかまえている
よくそれをかいたつけ

浅間は怒るとこわい
真赤になって怒る
夜空にはえてきれいだけれど
なか／＼怒るのをやめない
私が悪いことをしたから
怒っているのかな

でも
やっぱ浅間は好きだ
富士山よりも千倍も好きだ

2、雪
いつの間にか
赤トンボがいなくなると
山から小僧がやってくる
小枯小僧は容赦なく

浅間はいつも、うなづいてくれた
森の中でまよった時も
いじめっ子にやられた時も
浅間はいつもやさしかった

みごとにうれた桃の実を
一つお礼にあげたかったが
浅間はだまって返事をしない
お腹はちつとも、すかないのかしら

“水車の中にはおバケがいるよ”
いたずらっこに言われた時も
浅間がいるからこわくはなかった
ガタンゴットン無気味な音も
ちつとも、こわくなんかないや

林の中のおバケ屋敷
大木がしげって暗くって
浅間の山も見えなかった
後からおバケが追いかけてきそうで
とってもこわかったんだ
でも本当は
癪の人が住んでたんだって

わたしのホッペを真赤にした
“どろんこ道で遊んでいると
白いものが降ってきた
大きな長靴をはいて
赤いちゃんちゃんこの私は
一日中外をはねまわった

雪が降りつもと
もう外では遊べない
あったかいおこたつで
よく母さんとおハジキをした
そして時々ガラス窓から
つもりぐあいを調べたの

兄さんは
サツと外にとび出して
丘の上から
さも得意そうにすべってる
あたりは一面銀世界
私もスキーがやりたいな
“洋子はソリに乗りなさい
仕方ないから

家の隣のチャコちゃんも
一緒にソリですべったの
でも、あんまりスリルがないわ
ツマンナイ
私は、もう五ツなのよ

雪はサラ／＼してきれいです
その上を
ころげまわるのが好きだった

雪踏みは

とても大変です

長靴に雪が入ると

泣きたくなるほど

つめたくなるの

もう、あたしいやだワ

吹雪の日は

全然戸外に出られない

こたつの中で

だまって口をつぐんでる

だって、風の音がこわいんだもの

夜もなか／＼、ねつかれないの

甘き風 我が心よぶ

冷気道とさし

四海 雪 おおへども

イロリはなげる光の輪

絵美しく 家族笑む

(一) 帯広の空のこと

私が見た空は

真っ青でなかったように思います

いつも白っぽくて

でも

かなりきれいな色でした。

きつと

南十字の空や

コバルト色の海で 死んでいった

若い兵隊さんのながした涙と

お母さんがながした涙とでもって

あせてしまったのでしょうか。

その時は

だまって見上げていましたし

今は

雪は、きれいだから
雪は、すべれるから好きだけど
冷たくて、こわいからきらい
雪は、あたたかかったらいいのに

はめ絵の中の日々

一年 佐治隆彦

(一) 四季

かげろう 景色ゆれ

景色 緑濃く

陽と空と童話 我が目とじ

あたりに音もなし

夕陽 稲穂やき

稲穂 地にあえぎ

なわとびの声遠く

姉の手の我れを抱く

柏木 野にみだれ

野の草 あかければ

おおう空 なお高く

そう

思っています。

(二) はめ絵のゆめ

防空壕

ほりのこされてタンポポ咲く丘

子供一人そこに立ち

じつと立ち 声なく

なお 一人

よく晴れ

わた雲散って

陽はおどり

青空 映え

したるほどに

木の緑 草香る

動くものなく

たゞのうのと

聞えるは朝の余韻のみ

あげひばりさえ なかず

天の一角に はり絵にもにて

つつむ空気のぬくみにあまえ

子供一人
聞かず 言わず
石にほられ
花の立つ

はじまった昼
夏をすぎて 秋の香
陽はかわき
風にかすませ

十勝原野
音のとまった アルカディア
鉄砲をになつて
雲間にきえてゆく
わずかきのうの兵隊さんの
浅く淡いまぼろしを
昼間の空にうつし
いまだ たえずむ
壕の上

行く風
三色堇のためいきの
飛ぶ雲
丹鶴のトウキビ畑へ行く

銀髪とほゝえみの
母がよぶ声

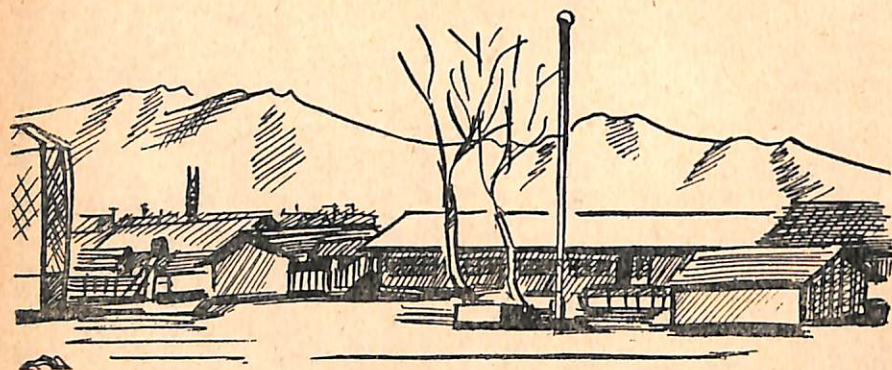
地平に
帯 あかくひろがり
人 黒く
道を行く

子供ふりかえり
目をもどして
帰る人の姿をさがす
丘をおり とくとくと
たちどまり
また とくとくと
母のかいなをもとめて
露ひかる時から
露おりの時まで
風と立って 陽にうまれ
わすれさられた壕の夢

わた毛とび 今 舞い
子供まだ立ち
雲にうき 青味にとけ
じつと見る
野の続く 柏林のむこう
アンデルセンの汽車
落下傘
タンポポ部隊の
枯れ野に詩の市

長白山のそのふもと
虎が たばこをすうところ
子供たちがうたい
陽もながれ

柵のボブラ 二本
こずえに火の冠
トウキビの茎
子供の心に そめ絵の紅
会社の煙突 黒くうきでゝ
壕の上にも影法師
煙たつて小さな家
母のよぶ



隨想

遺書

二年松野祐三

高校生の私が遺書を書いたなどと言ったら何だか笑われそうだ。別に自殺しようなど、めっそも無い考えが出たわけではないが……。そんな度胸が自分にあつたら……と思っている位だ。毎年元旦に遺書を書き替える人が多い。こんな老人くさい事をしたいとは思わない。しかし突発的に遺書創作欲にかられて、しかしこう書くといかにも高尚にみえるが、書く位の事はあつても良いだろう。二年前私が大病した時、書いた遺書が引き出しの隅から出てきた。なつかしく思つて封を破つた。

なになに『お母さん、気を落さず、ガールフレンド、ピクニック、体操の先生、なぐられた、父上様、葬式』読んでいてよくまあ書いたものだと思う。こんな部分が目に入った『私は六尺になりました』。棺桶は特別に大きいのにして下さい。窮屈なのはいいやです』と……。

しい。そこに近づくと、流石に大きく淡々たる物だ、石段を登り境内の後方の、これ又貴やかそうで潑潑とした威容の神社が現われた。沢山の鳩が屋根とか境内をにぎやかにしている。

この町は、この神社を中心に栄えてきたらしく、店と言う店は、神社の通りの両側に列をなしている。たくさん土産物が店頭に並べられ、他の土地の人達を相手取っている。

年寄りとか着飾った親子連れが大部分である。境内に入つて、何の気なしに本殿に向つて目を伏せてそれからオミタジを引いた。二十四番が出たので、何か意味ありげな番号だと思つて、一片の紙を渡されたら、光明皇后の御歌「意りて、磨かざりせば光りある玉も瓦に同じからまし」が記されてあつた。何となくその意味が分るような気がして、胸に迫るものが感ぜられた。言葉で言い表わすことが出来ない様な複雑な気がしながら、そこを後に、一路小高い丘への曲りくねつた道を急いだ。早春の山は、まだ寂しい冷やかなものに想う。霜溶けのぬかり道を行くと。ウグイスがあつちの林、こつちのやぶ中と、方々で鳴いている。木の芽が、ほの／＼しい香を立ててあたりに漂わせている。冬の木枯しを耐え続けた尊い生命力とも言うか。やがて丘の頂上に達したらしく、少し開けた場所へ出た。下の平地を見下した。先程の町が広い武蔵野の一角に位置をなしている。赤い鳥居も伺えた。たゞ小さく見えた。あとはただ、広い田園風景のみだ。緑一色に塗りつぶされた様だった。

その中央を、雪溶けのせゝらぎを打つ川が走っている。鉄橋を今、北国帰りの汽車が通過した。黒い長い列をなした車体が、まるで芋虫の様に田園を縫っている。遠く汽笛が耳に届いた。快い音に

正直な話、私は遺書なんて書くがらではないと思いますよ。

サボテン

高円寺でサボテンを買ったのは五ヶ月前だった。値段も安かったし何より気に入ったのはトゲが鋭く痛そうだったからだ。ペランダに置いて、毎日ながめていた。それも、三日坊主だったが。最近はずもやらなかった。冬眠態を全然覚えず。眠い朝だった。雨戸の外でサボテンが枯れそうだよ。

「とさぎやく声。本当だ。昨日まで緑だった表面に黄色の斑点が見える。可哀そうに翌日すっかり枯れてしまった。無理に縮小されたようなサボテンが生命を失なった。枯れたサボテン。トゲだけは一人前に痛い。三日程してハチゴと裏のゴミ穴に捨てた。日記帳に書いた女の子のような文を消しゴムで消した。一生懸命になって。その後でゆったりした気分で六畳の部屋に寝ころがった。それから「それから」を読み出した。足だけが寒い思いをしながら。」

遙かなる青空と白い雲

二年堀内勝夫

都會の雑踏を遠く離れて、軒まばらな小じんまりとした町にやつて来た。その町の唯一の目貫通りともいふべき、白い砥粉を敷きつめたような、小砂利の道を歩んで行つた。

暫らく行くと右手前方に黒緑色の木立のそびえが見えた。それら
に対して、陽春のやわらかい淡い色に照し出された赤い鳥居がまぶ

思えた。

富士とその連山がほやけた遠方に見えた。雪がまだ溶けきらずに頂に、その白さを余計に日に映えさせている。「おゝ故郷ふるさとの山だ／＼」と思わず感嘆の一声。

暫らくして、スギナの草原に身を横たえる。なめらかな傾斜をなしている。空を仰ぎながら目をして何やらわけの分らぬ事を思っているうちに折からの日差しに快い眠気を催おしてきた……。

眼前がぼんやりとして明るみを増してきた。己の周囲には、恐しく鋭い目付きの野郎達が、おっかない顔をして居た。沢山いた。それらと一緒に自然に建物に吸い込まれて行った。何やら印刷された紙が配られ己の所にも達した。たゞ時間が来るまで、必死になってペンを走らせた。それは何の咎めも無い物の様に、スムーズに感ぜられた。しかも完全だった様に思われた。何かに動かされるまゝに、暫く間を置いて次の不思議な場面がくり広げられた。先程の建物の方角から多勢の人々がさまゝの表情でやって来た。首をションボリと下げて、何とも言えないと言った者、親子連れの、喜びを隠しきらないと言った者が、僅かばかりいたが印象に残った。

引かれるまゝに、その建物の掲示板の前に立っていた。X○番、たゞ夢中になってこの番号をその中に見い出そうとしていた。心臓は大なる鼓動を高らめた。汗がにじみ出しているようだった。己の視線が他のものを除けて、一点に凝視した。ウッ、あった！合格した！大学！合格、大学たゞもう頭中その言葉だけがあわただしく巡っていた。

ガバツと発作的に起された。あたりの木のざわめきに、我に返

った、己がこゝに來た理由が初めて分った様な気がして來た。あの神社のオミクジが妙に脳裏にこびりついて、離れなかった。

青い清らかな空を再び仰ぎ見た。そこには言い表わせない、頼りになる様なものが潜んでいるかの様に思えた。限りなく、果てのない永遠なものが、白い雲が流れて行く。遠い／＼遙かなる彼方にただある目標を目指しているかの様に流れて行く。

五十の手習

一年 吉川 咲子

朝六時、ラジオから流れて来る英会話の音が私の夢を破る。これが私の、父の、又、家中の一日の始まりなのだ。

二年前渡米してからすっかり英語に傾むいてしまった父は、ずっと勉強をつづけている。夜は津田へ会話を習いにせつせと通い、映画がらゐが勉強のためにと洋画を見に行く。父の帰宅はこんな風でいつも遅い。くたびれた足をひきづって、冷たいセメントの階段を踏みしめて上って来る父の手には、いつも愛用のトランジスターが握られている。私はトランジスターから声高に会話が聞こえて来ると、眠い目を無理に見開いて態勢を整える。つまり勉強のまねごとをするのである。「ハハハ」うさぎみたいな赤い目の父を、私はあてられてきつとうまく答えられたのにちがいないと想像している。そんな父に対する母の思いやりも深い。原稿の単語を引く手伝いや、早朝からのラジオの騒音に不平も言わず、頭が下がる思いである。

バイトは予想以上につらいものだった。晦日も正月もない。毎日毎日寒風の中を、自転車車のベタルを踏んだ。あまりの寒さに郵便物を放り出して帰らなくなった時もあった。明日からもうやめちまえと思った時もあった。しかし、無事に十五日間の日数の勤務を終えた。

コタツに入って横になりながら考えた。今年の冬休み中バイトの十五日間はまったく貴重な経験であった。自分の精神、すなわち意志と体力に自信が出てきた。自分でもできる。何でもやってみればできるのである。貴重な十五日間であった。

家の犬

一年 二川 淳

家の犬は名をトムという。よく散歩に連れて行く。もう大分年をとっているが、仲々元気である。よくかけまわったり遊んだりする。母からよく動物をかわいがろうといわれるが、本当にそうしなくてはならないと思う。またかわいいで……今日もトムを連れて出かける。いつも少さくちこまて寝てるか何かしてるが、僕の姿を見るなり急に尾を振ってくる。すぐ鎖をもつと急いで出かける。走りだすと元気がなく、僕の後からいやな顔をしてついてくる。それでも僕は、ずんずん引っぱって進んでいく。間もなく、トムは何か見つけた。真剣な表情をして鎖を引っ張る。その間に外の景色を見ていると、何んだか清らかな気持ちになる。空気は澄んでい

弟も父の良きアシスタントである。二人で練習している会話は、たとえへたでもきれいな発音に思えてくるのだ。しばしば二人の間に交される議論も英語のこととなるといつそう激しい。又単語帳の買い入れ役も弟なのだ。その度ごとに弟は利益を得、又父は「高いノートだ。」とほやく。白髪のめだつ五十才の父の努力は、一日々々とむくいられている。そして又これからもずっと、平凡な父の熱情が英語に傾けられるのだと思っている。

貴重な経験

一年 青木 明節

私は今年の冬、郵便配達のアルバイトをした。友人達の「冬休み中は二学期の復習をする。」という話を聞いて、他人の言うことをすぐ気にする私は、自分もやらねば、と思った。私は夏休みにもそう思いついた。バイトもやらなかった。しかし勉強の方は、全然はかどらなかった。そこで冬休みも、(意志の弱い自分は)、またその繰返しをするにすぎないだろうと思った。そこでこの寒い冬休み中に、学習よりも精神と体をきたえようと思い、一番現実的な「アルバイト」をやってみよう。そうすれば毎日の寒さに耐えて毎日やっていけるかどうか、自分の意志は強いのか弱いのか、具体的にハッキリとわかる。そうやってみようと、いうことになって、日頃決断力の弱い自分としては、長思案はしたが案外キツバリとすることに決めた。

それからだいたい走って帰る。トムは口で息をハアハアしている。これで一回の散歩が終りで僕ははれくさいようだけ散歩が大好きだ。普通の友達なら皆、自分自身の友達がいるけど、僕はいないのでせめて犬位大切にしたい。これはじょうだんだけだ。

夜寝ている時ワンワン泣きだすのはいやだ。風邪をひかないように着こんで外に連れて行く。散歩中よその犬に吠えられて、よその家に迷惑をかける時も同じである。急いでその場を立ち去る。よその人が連れてくる犬に吠えられる時もある。特に一回大きな犬にワンワン吠えられて、非常に驚ろいたことがある。かわいなのは僕が学校から帰ってきた時、尾を振ってワンワン吠えながら、ニコニコする時である。その時は頭をなでてやる。面白いことに頭をなでてやると人間と同じように、他の所をなでるよりも嬉しそうになる。また家中で一番かわいがっているのは僕だと思う。今住み込みに行っている芳ちゃんがいた時は「トムをかわいがってね。」と言った程、愛していたが……。何にしても、これからもどんどんかわいがっていこう。

暦を見ては思う事

一年 平野 邦子

今年の運勢は真黒だ。「運命の青春」の年だそうだ。そう言えばこの学校に入學して以来自分にはあの様な良い事、楽しい事があった。などと言う事が心に残っていない。試験には良い点数が取れ

ず、いつも先生にこれとあれが悪いぞ！ 今度はこれがあぶない！ などと言われ、学校においてはいつ当てられるかな、あと何人で自分の番が巡って来るかなどと思い、どきどきしている。我が家は暦については何も信じたり、興味を持っていたわけでもない。ふとした事から買い始めて今年で二さつ目だ。今年は私の入学試験、来春は姉の大学入試、この様な暦はどの様にしておいたのか？ 本當の事が書いてありそれを信じて良いものか？ 宗教の様な物なのか？ …でも私のこの年は…。自分でも楽しい年だとは思えない。暦を見ていると来年は自分の運がどの位良いか、などと興味がいってくる。運が良ければ今年の試験が良いかな…。何か買ってももらえかな？ などと有頂点になる。又手相のページを開き、自分の手を広げて見ては、自分は出世しない手に出来ている。何と不幸な人間だ！ 私は人間である。努力すれば、人間性が出来て進歩する。進歩しても私の手相は出世しない手相なのか？ と疑問がわいて来る。だがこんな暦を見向きもしなければ、自分で決めた未来の職業に胸をふくらませそれに突進してゆけば良い。そして職業に達しなければ自らの努力が足りなかったのだ、と思えば何でも無い。この様な暦の為に人生をあまつた人がいるかもしれない。この話はオーパーかもしれないが悲観した人はいらぬであらう。手相、手相、手相は母親からももらった物なのか、父親からももらったのか、又は天の神様か、地の神様か、手相だけではない人相もそうだ。ともすれば人の道を変えてしまうかもしれない。逆に言えば人生を正しく歩くために作られたのかもしれないが、でも私にはこの暦に書いてある様に毎月がうまくゆくものではないと思う。実際にそうである。私に

懐しのパリ

一年 玉 木 ゆかり

私は四、五才の頃から本が大好きだった。今でも絵本の絵をはっきり思い浮べる事が出来る。六、七才の頃、父は私が眠る前によく物語をしてくれた。今から考えると随分難しい内容のものだった。それは「高瀬舟」、「壮子春」、「羅生門」等である。また父の話っぷりぎうまかったので、壮子春の地獄での両親との対面の所等はほんとうに恐しかった。

私は何回も同じ話をせがんだ。しかし父も私の熱心さにつられてか前より一層真に迫って話してくれたものだった。

こんな機会もあって、私は本にますます魅力を感じて来た。誰にも邪魔されない、自分なりの世界を持つ事が出来たのである。

パリに行った事のある日本人がよく、『パリは私の第二のふるさとです。』と言う。私は勿論パリへ行つた事はないが、映画、写真、本、あるいはシャンソン等でパリをほんのちよつとのぞく事が出来る。

そんな時、妙な事には自分でも解釈出来ない。ある懐しさが、いきなり、ぶつかって来る。機械的な仕事をした後のあのほつとした。自分自身への懐しきの気持と良く似ている。一体何処からの感情が来るのだろうか。

単に一般的に言われている。日本人とフランス人の感情の似ている所のものであるのか。しかしよく考えてみると、それは、私が小さい時から外国の文学が好きだった事から、その時受けた感覚が写真や映画を見た時、知らない内にあの妙な懐しさとなって出て来るからであらう。勿論フランス人には例へば絵画や極く大衆的なシャンソンに至るまで、言葉は判らなくとも何か人の心に訴える万国共通なもの、言い換えれば高い芸術性がある、と言えはそれまでだが。

私はE・ブロンテの『嵐ヶ丘』が小さい時からたまたまなく好きだ。それで、私の恋愛のイメージときたら、いつもこの『嵐ヶ丘』に落ち着いてしまう。それは、断片的、まるで一つの完成された詩の様に頭に浮んで来る。しかも、その情景は、小さい時思い浮べたものと全んど変わっていない。ただ私の少しばかりの知識が、それを含めたりはつきりした形にただけである。

又、受け取り方は変わったにしろ、最初に受けた、あの感激を未だに持ち続けている。

私達は大人になっても、小さい時に受けた、新鮮な感覚を何らの形によって自分達に影響させているものではないだろうか。

等々力溪谷

一年 谷 口 全 代

東急大井町線の等々力駅から歩いて約十分、電車を降りて、坂道

を登りきるともう、そこから、武蔵野の裾を残している等々力不動堂の銀杏やこんもりとした、他の種々の大樹が見えてくる。一歩足を踏み入れると、深閑とした静寂さが、じかに身体にしみこんでくる。私はなぜかいいようなない冷たい気持が、胸の中に流れるのを感じた。

石畳を踏んで行くと、古めかしい中にも威厳を備えた御堂があった。その御堂のそばで道は二つに分かれており、左へ行くと、桜の木で囲まれた公園がある。のどかな午後の日差しを身体一杯に浴びて、子供達の群が『我等が世界』とばかりに、遊びふけている。

休憩所からは、遙かに多摩の流れが見わたせる。日あしの短い冬の午後を楽しんでる釣人の姿が、あちこちと見える。あの流れに沿った土手の上を自転車に乗って思いきり走らせたらどんなにスカッとした気持になるかしらと思いつながら、そつとそこを去った。影法師だけが黙って私のあとについてきた。

等々力溪谷へ行くには右の道を行く。幅が半間位の石段を下りて行くと、冷たい空気が身体をこわばらせる。二つの滝の口からあふれ落ちる音は、あたりの山にこだましてすごい音を出す。滝の口の横に、可憐な花が、ひそかに息をしていた。大きな石に囲まれた間を水はソソクと潜り抜け、ドブ川へと加わった。あの清浄な水は、衰れにもひどい汚れの中に交って、もとの水は、泡粒となって消えてしまった。

夏には、白い衣をまとった老若男女が、滝のはき出した水に打たれている光景が折々みられる。さすがに今はその人影はみあたらない。溪谷沿いに細道を行くと、周辺はすっぽりと灰色の木立に包ま

れている。溪流の泡だつて落ちる音の中に折々、小鳥の音が聞こえてくる。それもすぐ消されてしまう。じつとたたずんでいると、自分が消えてしまふような気がした。ふつと我にかえると、右手は石垣で左手は二メートル下に泥で底の知れない溪流がある。

石垣づたいにスリルを味わいながら、はって歩くのもまた、楽しい。その喜びも、真上に吊橋のある所で終りである。木のですりにつかまりながらよじ登ると、駅の近くの道に出る、今までの静寂さとうって変った町の騒音が耳をつく。きまつて私は戻りたくなる気持をそのたびに、おさえつけるのだった。

或る顔

二年 小名 やす江

或る顔、私は今でもそれを忘れることができない。去年の十月のある日曜日のこと。渋谷から明大前へ来ようと井之頭線に乗って暫くたつてからのことだった。日曜日の夜のことで車内は比較的空いており穏やかな空気が辺一面漂い、電車の、ゴーガタンという一定の音で眠気を催して来そうな気配だった。と、突然「馬鹿野郎」という怒声が辺りの穏やかな空気を吹き飛ばした。私もびっくりして、その方へ顔を向けた。それから「馬鹿野郎」と怒鳴った御本人とその相手との間にいざこざが始った。怒声を発した人は相変わらず大きな声で怒鳴りまくっていた。その相手は口でこそ何も云わなかったが、その顔には「馬鹿野郎」氏に対する軽蔑の念が有々と浮か

その時の私にはそうとしか思えなかった。そして今の私もきつとそうであつたに違ひないと思つてゐる。だからこそ私にはその顔が忘れられない。

その騒ぎも駅員がやってきて静まり、まもなく明大前についたので私もそこでおり、どちらかそこで降りてケリがついた。京王線に乗り換えてからも私は今までの事を思い出し、自分も決して職業にハンディキャップをつけてはいけない、又決して自分の職業に劣等感を持つてはいけないと思つたそして何よりも、サラリーマン風の人がとつたその場の態度をとつてはいけないし、絶対に、そのような態度をとる人間になつてはいけないのだとつくづく思つた。

死と人生

一年 河田 正人

「人間は何の為に生まれて来たのであろうか」これが私のたつた一つ書けることである。

このわかりきつてゐる実に愚劣な真実についてこれから書くのが私の仕事である。私が母胎からこの浮世に押し出されて来た時、始めて脳裡に拡がったのは「死への焦り」である。現在の私もその「死への焦り」に一生懸命である。それは一流大学の理工科へ現役で入学し、一流会社へストレートで入社し、婚期平均年齢男子二十七才六ヶ月にして青春時代の理想と憧れであつた美しく、朗らかで、頭が良くて、金持ちの近代的センスを持ったノーマルな女性を最大

んでいた。私はその時生憎くひとりだったので、直接その場を見てゐるのがこわくなった。幸いに？ 入口のそばに立っていたのでドアーのガラスにうつる二人の様子をじつと観察することが出来た。まず二人の外見からいうと「馬鹿野郎」氏はバツピを着て作業ズボンを着き、手に大工さん等がよく持つてゐるズツクの袋を下げていた。それでその人は大工さんか何か、建築業に関係あつたらしい。年は四十代ぐらいか。その相手の人は隆とした背広を着た一見神経質そうなサラリーマン風の人の人。

そう、年はかなり若そうに見えた。そしてあらまはこうだった。その職人風の人のズツクの袋が何か、神経質そうなサラリーマン風の人の隆とした背広のどこかに触れたらしい。そうしたらその御仁それが触れた所を手で払つたらしい。そこで職人風の人の怒声をあげる結果とつたのである。まことに他愛ない、まるで大どろしの喧嘩みたいだ。ところが私は犬どうしの喧嘩とは全く異なる。ある根本原因がそこにあるのを感じた。劣等感対軽蔑の感情がそこで争つてゐる。私は職人風の人の顔を凝視した。下唇をつき出し、日焼けした平たい顔を前へ出し、しきりとサラリーマン風の人をなじつていた。「俺は何々建設会社の者だ。ちゃあんとこの袋に書いてあらあ、なんだ、ちつとぐらい、いゝ背広を着たと思つて威張るな。そんな安っぽい物着あがつてどうしたっていうんだ、俺は何々建設株式会社に勤めてゐるんだ。この袋にちゃあんと書いてあらあ、怒鳴つてゐる男の顔には、以前から、そして現在も恐らくこの後もそうだろうと思われる、自分の職業に対する劣等感にじみ出てゐた。あるいはこれは私の誤解かもしれない。しかし少くとも

限度に縮少した日本女性四百万人のうちの一人と結婚して、結婚生活も飽き味も色気もなくなり、子供だけは半ダース位に増えた頃、私もはや当世はやりの言葉をつかえば「悲しき六十才」とかで定年退職する。その後には私に残されたものは皺くちや婆さんの皺を数えながら私の生来の目的の時期を待つだけの身となり、悪ければ養老院や老人ホームへおしこめられて監獄同様の生活をするのである。運が良くてもいづれは交通事故で死ぬのがおちである。そして最後の目的達成の難関は病院生活である。「ガン」ならば医者にだまされて腹水をためて、やせこけて、ヒコヒコしながらだれを滴して死ぬだけ。心臓病・合併症ならば発作を出して三十秒もたたぬうちにどこからかクレゾール石鹼の香りがしたのである。いたつて簡単に私の一生をつくつて見たのだが、右の様に平均寿命六十七才まで生きぬくのは百万円の宝クジを当てるくらいに奇蹟に近いことである。何故ならば、車の氾濫、汽車の正面衝突、飛行機の墜落、等々一々気を付けていたら精神病になるこの浮世である。だから私に云わせれば現在精神病患者でない全ての日本人は神経鈍感症なのに違ひない。ここでもう一度人間誕生の本来の目的についてもっと深く考えて見ることにする。

「死」という文字ほど私の興味をひくものはないが私が昨日、今日、明日と一日、二十四時間やることなすこと皆、間接的に死につながるものである。人間はその本来の目的を達成する。即ち他界する寸前によく自分の一生を省みるものである。

その時の死に方でその人の人生の難易がわかる。人間の九十九％は、死の寸前に「あれをしたかった、これもしたかった」と残念が

るものである。それはどうしてかといえは、目的に到着するのに近道を回ったからである。だから人間にとって一番大切なのは目的を達成すること。即ち死ぬことであり、死なない人はいつ迄たつても目的に着くことができない。これほどみじめな者はない。クリストさへ目的にいつ迄たつても到着出来ぬ虚脱感におそわれて耐え切れずに焦つて目的を達成してしまつたのであるから、ところが最も大事なのはこれからである。即ち、目的に達する迄の手段の選び方なのである。

簡単に大学受験に例をとつて説明すれば、大学に入学するという目的よりもそこに到着する迄の期間すなわち、受験勉強すること自体に最大の意義があるのである。

今日の日本の教育は、オートメーション化した工場で同一規格の製品を数秒間に数百ヶ作り出すといった方式である。だから個性のない大学生が毎年、数万人もが社会へ送り出されているのである。この悪循環のおかげで現在は全く私には希望がなくなつてしまつた。ところが中国では、青年達は地平線の彼方までつづく広野でトラクターの生々しい開発の音をひびかせながら、ハンドルをにぎつて母国の大地を自分達の手で耕しているのだ。そして新しい自分達の中国を作っているのだ。そして、ある合作社などでは十代の青年が社長に立ち、国会には二十代の青年男女が国の為働いているそうである。それにくらべて日本の教育制度では少なくとも高校生の最大の希望は統計的にみても一流大学へ入学できることにある。これは一体何んということなのだ。中国のそれと較べると十年先の日本があんじられる。と私の尊敬する大内兵衛先生もいわれている。

ら劣るのだろうか。すると大人はただ自分の青年時代を思い出し、そして、自己の前科を思い出し、自分の弱さを恐れてこういうのである。私は大人に対してレジスタンスしているのではない。もっと明かるい、美しい、清潔な日本を作ることが出来なかつた大人に対しての軽蔑である。

私達青年は、自分達の子供にこの様な教育の味を二度と味わせないように、日本の政治、経済、教育を施したいものだ。これが中国の広大な土地と中国青年のトラクターへかける夢にかわるものだ。

一九六〇年一月一日

父母、そして僕

一年 大坪 忠雄

僕は、父を短気な人と意識している。父は、お酒、タバコがダメなせいか、他に興味は余りなく、子供の事にかけては母より気を使うように思える。妹達を連れて映画や郊外に出かけたり、学校の父兄会にもよく出かける。そのような父であるから僕に対して、多くの意見があるようだ。父は、割合に気軽にそのような意見を持ちかけて相談しに来る。そして双者の間で意見が異なると、時には言い争いをする。しかし、僕はいつも父にやりこめられて、退散の形になってしまふ。そして、僕は机に向うが早い「父さんのわからずや。」と泣き声でどなる事が多い。どちらが、わからずやなのかは、判らないが？ そのうち母が来て、「父さんに謝つたら」と云

すこし話題がそれてしまつたが、結局私のいいたいことは自分の将来について深く考えなければならぬのだからその時間と場所を欲しいというのである。最近減つたが「自殺」といった死に方がある。死についての憧れは私も少なからずもっている。それは、こうである。人間は青年時代において人生観を形成するものである。人生観とは「人生の価値、目的などについての見方」と辞書に書いてあるが、自分の人生観を通そうとするところにその時代によって摩擦や弊害がおこるのは常である。その時に私は思う。自分の人生観が絶対的に裏切られた時に自己を最後まで信じて自分で当然とるべき責任を取つて死ぬ。そこで濁流にのまれてずるくなって渡世的な気分になつてしまふのに比べて一体どれだけ劣るというのだろうか。大人に云わせれば「高校生くらいのあさはかな人生観なんて世間を知らないくせに、それが破れたから死んで死んだのか馬鹿だ」なんて笑うだろう。きつと、又「人生観なんて年をとっていくうちにだん／＼と出来るものだ」というだろう。しかし、大人のよく口に出す武器、「世間を知らない」「社会はそんな甘いものではない」これほど私の反感を買うものはない。それは、その世間、社会自体である。私はそのものに最大な軽蔑を抱いているからである。だから、その濁流に流れこまぬ明るい、美しい、清潔なうちに、人生感を深く考へ、その固い信念によつて濁流の中でも自己の個性と光をもつて生涯を送れるのである。ところが裏切られたものは、その矛盾に対し、真剣に考へ、自己の存在価値と信念とを考へて、そして自分でそれを決めて、自然の中に自己を高校時代に永久に汚さずに保存するのである。浮世をずるがしこく渡る若者と比べて一体いく

う。何故か、母がそう云う時は、僕がわからずやに決っているから不思議である。それでも僕は、くやしいのか謝るのが恥かしいのか判らないが、きつと「父さんは、短気だよ」と言う。自分の悪いのを認めた時に限つて他の言葉が出てこないものである。すると母は、僕の態度を少しでも悟ると、「蛙の子は蛙、やはりあなたも短気です」と、明るい語調を残して去っていく。それから一・二時間もすると「忠雄、散歩はどうだ」と、父がやって来る。そうすると僕も気軽に「アム」と答えて、寂しく吹きすさぶ秋風の中を夜の町へと出かけるのである。こうだから僕と父は、互に相手の性質を知つてはいるのだが、ただ一つ問題は、相手を認めずつて走つてしまふ事が時々どちらかにあるという事だ。これは、僕の悪い方が多いと思つてはいる。特に近頃は何かにつけて反抗心があるせいか誰に対しても反抗したくなる事が応々に有る。つまり自分の意志がはつきりしないのだと思つてはいるが、学生時代の年頃とは、なか／＼おかしい時間のようだ。そのような反抗心でも、優しすぎるといつていい程の母にだけは、全然鋒先が向かないのは、このみにくい闘争、世界の汚れの中においては、清い何物かの働きによるのである。このような間にある母とは、よく話もするし、又、何やかやと頼りにもしている。それに対し、何故か父には、そんなこまごまとした事はいいづらい。だから、自然母には甘え、父からは離れ易い。

だが時々する口喧嘩、又、二人で出かけた時などの、云い合ひ、話し合ひ、それから得る僕の父に対する感じには仲々良いところが多い。僕と父との間には、母との間にはないような気の似かよつた点があるような感じ、何か、近ずき易い母よりも、近ずき難い父のは

うが、好ましく感じる事があるのである。どうも矛盾を感じさせるようではあるが？

今日の複雑きわまりないこの人間社会では、観察、理解、妥協の根本的三原則が、どうも人間相互の親しみを生むうに、最大地位を占めているようである。

T 先生

一年 原 武二郎

親馬鹿子馬鹿の現代の波に乗っての職業である学校外教師、つまり塾の教師である彼は貸室である二階の三畳に住んでいる一風変わった人物である。

先生はもういゝ年をしているのにまだ結婚していない。先生に言わせると「嫁をもらうと、嫁には食わせにやあならん。そうなる」と僕の好きな本が買えなくなる。勿論女に興味が無いわけではない。だから一番いゝのは嫁は嫁で金を取って来て、自分で食えばいいんだ。君、そんな重宝な女はおらんものかねえ。」と。

しかし現代の女性を思うと、先生の言う「理想の女性」はなかなか現れない。

しかし、先生の勉強、書物に対する愛着は、女以上であることは狭い三畳を書物や新聞記事でなお狭くしている事からもわかるのである。

先生の部屋は三畳という狭い室だが、実に色々な物が置いてあ

る。が、現代は仲々難しい世の中である為に、僕独自の考え方を強調しようとは思わない。」と勢いこんで語っている先生の赤い鼻の頭には汗が光っていた。

九州周遊

一年 後 藤 展 志

昨年の春つまり中学卒業後、島君と俺はかねてから計画していた九州周遊をやることになった。三月二十二日その日は忙しい日だった。卒業式を終えた後、島と俺は松高の入学手続きをすましてその足で東京駅へ走った。この旅行は中学在学中計画したもので、俺の家は大分県だから帰郷の途中に一周しようと思ったのである。

かくて夕暮せまる東京駅のホームを特急「あさかぜ」は静かに離れたのである。そもそも特急列車というような俺達に不似合な列車に乗った理由は、俺達は九州周遊券を買っていたので後四百円で特急に乗れるからでありそれに一度ぐらいいは、デラックスな列車に乗ってみたかったからである。「あさかぜ」はデラックス特急だけあって振動や雑音はほとんどなくシートは自由に動き、乗り心地が良かった。(俺みたいにいづもボロ急行で九州下りをやっている奴には少しもったいなかったけどね。)列車は西へ西へと東海道をひた走り下って行った。

(東海道・山陽は長くなるので省略する。)

三月二十三日、目をさました時は、左に海右に山を見ながら列車は

る。自分の机と椅子、親馬鹿の命令の為、仕様がなしに来る生徒の長い縁台の様な机。すき間のある畳には、今問題になっている中央公論等の雑誌。百科事(辞)典数種で計二・三十冊となるもの。生徒に教える為の数冊の教科書。参考書。それに New York Times の山。机の上には、夏目漱石全集、時計、原書の聖書。それに神田の本屋からの手紙、葉書の山。壁には時代遅れの背広、ズボンがかり、又「〇〇君×大必入」というものが赤インクで書いてある。そんな為には先生も生徒も、この書物にはさまって勉強するといった珍風景が、朝の十時から夜の十時まで見られるのである。

しかし先生は、こんな生活に満足しているようだ。「どうしてでもその生徒の理想の学校に入れてやりたい。」という意志「又は社会性に富ませ、現代にマッチした物の考え方、仕方等を教える。」という所からも、これはわかるのである。

そして先生の確信している一番大切な考えを彼はこう説明する。「僕は毎日／＼が楽しくてならない。それは毎日／＼に進歩があるからだ。僕は、昨日の僕より今日の僕の方がずっと偉くなったような気がする。又実際そうだ。それは英語の単語等は忘れたものもある。しかしそれ以上に、人間的に成長していることを忘れてはならない。そして学校で勉強する学問は、直接に社会的関係にあるものでなければならぬ。現に、一流大学を出たからといって、必ずいい地位に着くとは限らないではないか。だからといって、勉強を怠たていいとは言わぬ。つまり僕は今、将来の細い道を乗り越える為にはあらゆることを吸収せねばならない。よく此頃勉強だけをすべてと考えている人が多いが、このことからこれは間違いであ

さらに西下していた。八時半過ぎ列車は下関を出て関門トンネルを通り九州にはいった。俺はいよいよ九州だと思おうれいような反面不安な気持ちが出てきた。十時過ぎ「あさかぜ」は博多駅についた。ここまでは何事も起らず良かったが、博多駅でちょっとしたトラブルが起きた。というのは俺と島は、旅行の記念に切符を手に入れたように思っている。俺は半券を切り取り、他の半券をカミソリで切った。博多駅を出たのである。俺はうまく出たが運が悪いことに島が駅員に見つかってしまった。しょうがないので駅員に、「半券は門司で渡したよ」といったら、これが悪かった。というのはこの切符の半券は、九州で最初の下車駅で渡さなければならぬのである。駅員に「今、着いたのは特急だけだそんなはずはない、特急券はお持ちですか」といわれたからたまらない、島と俺は観念して半券と特急券を出した。「どうしてこんなことをするんだ」と言っただけで、「記念にとっておきたいからです」と答えたら、「待ってろ」と言っただけで駅長室の方へ行ってしまった。島と俺はどうなることやらと心配しつつと待っていたら、まもなく駅員が引返して来て俺達に切符を渡しながら「もうこんなことはするんじゃないよ、気をつけて楽しい旅をしないさい」と言った。渡る世間に鬼はないとはこのことだな。かくて親切な駅員のおかげで切符は手にはいったのである。それから博多をブラブラして昼過ぎ太宰府へ行った。もう梅はほとんど散ってしまったあちこちにちらほら咲いているだけであった。二時過ぎ太宰府を出て佐賀の方へ向った。これからが本番だ。俺達は、あらかじめ決めたコース博多！佐世保！長崎！熊本！鹿児島！宮崎！大分の順に旅行するのである。俺達の頼りになるのは時刻表だ。何

しる特急以外の列車は何でも乗っていいのである。佐賀に五時頃着いた。市内見物したがあまりたいしたことはなかった。それから再び汽車に乗った。佐世保に着いたのは夜の九時過ぎだった。佐世保は港町だけあって水兵さんなんか沢山いた。市内見物をしながら宿を捜した。宿に到着したのは十時頃だった。

三月二十四日朝一番のバスで西海橋に行った。西海橋は全長三百米余なのに橋げたが一本もなく、その近代性と周囲と周囲の景色が良くマッチしてとても美しい。又驚いたことにはまんなか辺はいつも揺れているので、俺もこれには少々気味が悪かった。西海橋で写真を取り終って休んでいたら丁度長崎行のバスが来た。発車しようとするのを「オーイ待ってくれ」と呼びながらようやく飛び乗った。本当は佐世保まで引返して汽車で長崎まで行くはずだったが、バスのお陰で半日得をした。バスは海岸づたいに走り海には大小さまざまな無数の島が、散在していた。これが九十九島だ。三時間ばかりバスに揺られると長崎に着いた。長崎は時間の都合で観光バスに乗った。オランダ屋敷跡やグラバー邸（お蝶夫人ゆかりの庭）などは外国情緒が良く出ていた。又原爆の跡形は、そんなに残っていないが、長崎国際文化会館の被爆当時の写真・資料などは、当時のすさまじさを表わしていた。戦争はもうやってもらいたくないと感じた。俺達是被爆者の冥福を祈って長崎を離れた。十時過ぎ俺達はつかれた足をひきずりながら島原の駅へ降り、駅前の旅館へ泊った。

三月二十五日朝から小雨が降っていた。俺達は雲仙へ行くかうとうしようか迷ったがたいした雨でないので行くことにした。八時過

ぎ雲仙に着いたが、霧のため雲仙岳は見えなかったが、すそ野は広く長く海へ続いているようだった。雲仙は地面のいたる所から湯気が出ていた。九時半過ぎ俺達は山を降り、島原港から船で大牟田港へ渡った。この海有明海は、大小さまざまな島があり美しかった。有明海は、干拓でも有名だ。大牟田港から西鉄バスで駅まで行ったが、その途中で三池炭坑の前を通った。入口では二・三〇人の人が赤旗を立てていた。駅の近くで三時間余遊びそれから汽車に乗った。俺達は、今日少し強行軍だったのでバテ気味だ。五時過ぎ熊本へ着くとすぐ市内見物に出た。俺達は、今日中に熊本見物をして、夜行で鹿児島へ行くことにした。市電で熊本城へ行った。熊本城は天主閣を建設中だった。城からの市内展望は美しく、又雄大だった。七時過ぎ熊本城を降りて水前寺公園行の電車に乗った。俺は小学校の修学旅行で熊本には来たので、少しは市内がわかった。水前寺公園は、古風で落着いていつ来ても気持ちがとてもよかった。公園のわきに大きな体育館があった。今年は、熊本で国体があるので造られたんだろう。公園を出たのは、八時過ぎだった。鹿児島行きの汽車は、深夜の一時三十七分だ。俺達は時間つぶしに映画館へはいった。旅行中、映画を見るとは思わなかった。十一時半過ぎ映画館を出て駅へ行った。駅前で腹ごしらえをして汽車を待った。

三月二十六日俺達は眠い目をこすりながら一時三十七分発の鹿児島行の列車に乗った。乗ってすぐに眠った。目をさました時は汽車は山間を走っていた。七時近く列車は鹿児島駅へ着いた。俺達は、市内をちょっとぶらぶらしてから公園のある小高い丘へ登った。ここからのながめは、ちょっと爽快だった。市内と桜島が良く調和して

きれいだった。二人でブランコに乗っていたらおばさんが来て、俺達に「どこから来たの」「どこへ行くの」と言ってさかんに話しかけてきた。東京の話をしたら喜んで「一度行ってみたいな」と言った。俺達は、おばさんに別れ桜島へ渡った。桜島では観光バスへ乗った。というのは国鉄バスだから周遊券でただで乗れたのである。桜島大根は大きかった。大きいのは十貫以上あるそうだ。又桜島の溶岩はすごかった。ごっこつしてすさまじい。その反面人や犬やたぬきなどの形をしたものもありバラエティに富んで面白いね。十一時過ぎ桜島を後にして一路霧島へと向った。霧島神宮に二時前に着きそれからバスで霧島山へ登った。霧島からの桜島展望は、雄大で大パノラマだ。霧島へ泊る予定だったが土曜日だったので、あいている宿がなかった。仕方がないので最終のバスで霧島神宮まで降り、しぶしぶ志布志まで行くことにした。汽車は都城を通り闇の中をつっ走っている。俺達はしばらく外を見ていたがすぐに眠ってしまった。駅員に起されて気がついた時は、志布志駅に着いていてもう乗客はなかった。俺達は、駅を出て宿を捜したが十一時を過ぎていたので、もうほとんど開いてなかった。しかたがないので駅の待合所に寝たが、寒くて眠れなかった。そこで警察へ行き一晩とめて下さいとたのんだが断られた。しかたがないので思いついて寝ている旅館をたたき起こし三百円の所を二百円に負けさせて泊った。まったくついてなかった日である。

三月二十七日六時起床。眠い目をこすりながら早朝の列車に乗り油津まで行った。油津からバスで先づ鶴戸神宮へ参拝した。ここは岩ばかりの海辺のほら穴にお宮があるのである。また荒波がしびき

を上げて岩にくだけるのは壮快だった。ここで昼食を食べたが、おかずの「さしみ」はうまかった。再びバスで日南海岸を通りサボテン園へ行った。この山は、見渡す限りサボテンである。俺達が写真を書いていたら宮崎のにちゃん達が写真を取ってくれといったので写してやった。（後で送ることにした）俺と島はここでサボテンを一つずつ失敬することにした。先づ小さいのを捜した。小さいといってもポケットにははいらない。その上とげがでているので隠すのに苦労した。それに人に見つからずにバッグの中に入れるのは、又一苦労である。そこで俺は考えた結果一つの名案が浮かんだ。というのはトイレの中でやれば見つかる心配はない。俺と島は、トイレの中でサボテンをバッグの中へしまこんだ。（この時ばかりはアンモニアの臭いはしなかった）というわけで俺達は、今度は青島へと向った。この間の海岸は美しく雄大だね。青い空青い海定規で線を引いたようにきちんと段々と並んだ岩、その岩にくだける白い波、それに加えてピロウの木など南国情緒豊かだ。それにこのバスの乗り心地のいいのと定期バスなのに案内してくれる車掌さんのサービスは今までで一番だね。三時過ぎ俺達は、青島へ着きここでゆっくり遊んだ。青島は、全島がピロウやその他亜熱帯植物でおおわれたきれいな島で、又周囲は日南特有の波形岩でおおわれその調和が美しかった。青島には丁度鴨みたいなの渡鳥が数百羽来ていた。写真を写して五時過ぎ俺達は、宮崎駅へと向った。途中市内でバスを降りて目抜き通りを散歩した。八時前宮崎駅に行き構内で三時間余待って十一時過ぎ夜行列車に乗った。

三月二十八日、今は列車の中、まだ夜は明けてない。四時半大分を

過ぎ五時前に別府に着いたが、俺の家から日帰りができるので耶馬溪へ先へ行くことにした。別府から横の席にちょっときれいな女の人に乗って来た。話がいろいろはずんだ。女の人は、俺達がまだ朝食にありついてないことを知ると弁当を買ってくれた。これが旅は道づれ世は情だね。中津には七時十八分に着いた。中津からすぐバスで耶馬溪へ行った。ここは秋がもみじできれいだけど今日は新緑できれいだ。ここには榊海和尚で有名な青の洞門がある。現在は県道の大きなトンネルになり自動車が行き止まっているがすぐ横に人がよく通れるくらいのトンネルが面影を残していた。俺達は、この川で一時間ばかりボートに乗って遊んだ。昼過ぎ中津に引返し市内にある民主主義者「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」学問の進め「で有名な福沢諭吉の生家へ行った。この付近には、昔の武士の家らしい物が残っていた。諭吉の家はあまり大きくなかった。又そのすぐ横に諭吉が勉強したといわれている土蔵があった。それから、俺達は再び大分に引返しした。大分市内で俺の小学校の友達に会って一緒に汽車で俺の家まで帰った。俺の町は、三方を山で囲まれた静かな谷間の温泉である。俺は一年振りに我家に帰ったのでうれしかった。俺達は、すぐに湯にはいり一週間の旅の疲れをいやした。夜、小学校の時の友達と一緒にゲームをやった遊んだ。

三月三十日、六時に起床一番のバスで家を出て大分まで行きそれから、準備で阿蘇登山口坊中まで行きそこから、バスで山へ登った。今日は、天気が良かったので遠く九重山から外輪山まで良く見えた。その規模の雄大さには、感嘆させられた。山頂の第一噴火口は、無気味な噴煙を上げていた。火口の周囲の熔岩は赤茶色で草一本は、

ある。今度の旅行は、少しトラブルもあったがとても楽しかった。

今日この頃

一年 金原 みゆき

「ゴニウガク オメデトウ」松原高校指定〇〇洋服店——実にくまじき商魂——と書かれた電報を受け取ったのはいつの事か。まだ若々しい春の季節十ヶ月前のことである。そしてもうすぐ春。わたしはこの十ヶ月あまりをどう送って来たのだろうか。入学以前は、勉強をモリモリ(っ)と、本をモリモリと読む事をお友達と約束して別々の高校へと緊張感を持ちつつ張り切って入学したのであったが、時の経過の早さを感じつつ時に追いかけれながら、ただ漫然と情性的に過して来たように感じる。(時よ、わたしを追いかけないでくれ、その内わたしはお前を追い越すから)勉強にモリモリは実現されているが、それは、ただガツガツとやって来たのではありはしないか。試験の為に勉強をやったのではないのか。勉強した事が自分の身についているのだろうか。そしてそんな不安な心を持ったまま明日へと向い、向っていったのではないか。(そう、貴女はただガツガツとやって行ったようですね。なぜなら貴女は、試験が終ればもう忘れていきますものね。試験の為に勉強もあるかもしれないが、やはり、自分の物として自分に植えていかなくでは)そしてこれが環境に慣れてしまうと言う事かもしれない。環境に慣れるという事は良い意味でも悪い意味でもあると思うが、そ

えてなかった。また火口の下の内輪山草千里には沼があり、その沼に放牧の牛が群をなしているのはちょっと壮快だった。又内輪山のいたる所には牛が放牧されているが面白いことには、牛の尻の所に所有者の印が押されていることである。俺達は、二時過ぎに山を降り、家に帰り着いたのは七時半だった。俺達は疲れたので温泉にはいりすぐに寝た。

三月三十一日、七時過ぎ起床兄の運転する自動車で城島高原から別府回りで親類に行った。由布岳からの別府展望は、美しかった。五時過ぎ親類の家に着き俺達は親類の家に泊ることにした。兄は家の用事があるからその日のうちに帰った。

四月一日、七時過ぎおじさんの家を出て別府の地獄巡りに出かけた。海地獄や血のように真赤な血の池地獄やポコポコと地獄の土が上る坊主地獄などを見た。今日は面白かったよ。家に帰って夜、自動車の運転練習をした。

四月二日、俺の町にある池へ行ってボートに乗って遊びそれから友達としばらく遊んだ。ここの池は神秘的で美しかった。又この池のすぐそばにある山では、冬にはスキーもできる所がある。五時過ぎ俺達は家に帰った。

四月三日・四日、家で休養。

四月五日、東京へ行く日だ。朝俺達は兄の自動車で大分まで送ってもらった。夕方兄に見送られて東京行「高千穂号」に乗った。かくて六時五十七分「高千穂号」は駅を静かに離れた。明日の夕方は東京だ。

俺達はこうして変化に富んだ九州旅行を終えようとしているので

の中で、ただ自分を見失ってしまわない様に努力していかなくてはと思うのである。

わたしが、物足らなく感ずる事は、一番楽しい筈のH・R。H・Rの時間の不活発さという事である。H・Rの時間は、お互いの考を知る為にも、自分の意見を発表する場、練習する場としても大切な、必要な時間だと思うが、H・Rの時はお通夜の様に皆黙りこくって無言の行の時間である。あの休み時間の賑かさはどこへ行ってしまったのだろうかと思う程、なぜ皆は自分の意見を発表しないのだろうか。はずかしいのかしら。休み時間の賑かさはどこへ置き忘れてしまったのかしら。皆が意見をもっと発表して、楽しいH・Rの時間を作り上げていたら良いのに。話し合うという事は楽しい事なのに、どこのクラスどこの学校でも同じなのだろうか。中学校ではそうではなかったが。

思い出される事、それは二学期の富士方面への遠足の時のこと。わたしは見たのです。富士の裾野の木々の間から見えた美しく紅葉しているツタの葉やその他の葉を。それは、本当に可愛いらしく美しかった。自然の美、色、不思議さ、人工の配合では表わされないものだと思った。それからの葉の色は情熱的な深紅の色の中にも葉でさえも思索していると思われる程美しい色であった。ちょっとした間ではあったが厳肅な気持ちに打たれたようであった。

わたしは青春という一つ事に情熱を持ち、打ち込むことの出来る若々しい時期に毎日毎日が同じように続いていくのであっても、今日は昨日と違う明日である筈だし、又作り上げられていなくてはいけないのだと思う。草木に寿命があるけれど、それは毎年毎年衰え

ながらも若い時期が巡って来る。わたし達に、若いというみずみずしく美しい時代は二度とやっては来ないのだ。それ相応に若い時代を過して行かなくては、さあ、わたしは現実という壁に向かって突進して行こう。

生きること、死ぬこと、

三年 中村 一光

私は、テレビで、フランスのある短編映画を見ました。

刑務所の看守が、死刑執行を翌朝に迎えた囚人の心を慰さめようとして色々話しかけるのですが囚人の気持は穏やかになりそうもありません。ところが終りに、看守は、過去に死刑執行の際、看守が買収され(たぶん電気椅子でしょう)機械に細工をして助かった例があったことを話します。これを聞いた囚人は、自分もそれをやろうとして、盗んだ金があるから……と看守に誘いかけます。看守は結局買収され、死刑囚は悠々と死刑台に……という訳なのですが、実はこの看守は、盗んだ金はないことを知っていたし、又、過去に助かった例も無かったのですが、囚人の死に対する恐怖を無くしてやるう、とそのような話をしてだまし、又自分はだまされていくふりをしていたのでした。

勉強のあいまいに、お茶でも飲んでちょいと一ぶくと茶の間に座ったらやっていた番組です。

死に対する恐怖、それは人間誰しもがもつものでしょう。ただ私

達は日常、他に考えることが多すぎるか、あるいは忘れていくかで、死に対する恐怖のない人、又は死を楽しいことと考える人はいないと思います。たとえ自殺する人でも恐怖は必ず抱いているはずです。

「死」とはこの世に生きている人々誰もくぐったことのない門であり、又誰も歩んだことのない門であり、又誰も歩んだことのない道です。人間だけでも、何十万年も前から何億、何兆という数の魂がその門をくぐったのですが、帰って来た人はありません。死ぬ時の気持はどんなだろうか。それは誰も知りません。死が何故恐ろしいか。それはどのようなものかわからないこと、そして一度経験したら最後であることによるのではないのでしょうか。

この恐怖を逃れるために(勿論他の理由もあるでしょう)ある人は宗教に自分と身心をゆだねます。そして宗教は、死とは人間の完成であり、死後の楽園があることを説きます。しかし、だからといって死をのがれることはできません。この世の中に生活している人全部が、人のみならず生物全てが必ず死ぬのです。誰が先に死ぬか、何時死ぬか、其他これから先のことは、一分一秒後たりともわかりませんが、生あるもの全部が死の宣告を受けねばならぬことは、予言して必ず当ることなのです。

よく「この世の中に生を受けたありがたさをよくかみしめ……」と言われますが、成程「有り難い」ことかもしれないが、生をうけることは死をうけることを意味し、楽あれば苦あり、プラスマイナス零だと言えはそれまでですが、必ずしもありがたいとは言えないと思います。第一、この世の中の人々は「生をうけた有難さ」を

感じているでしょうか。毎日の新聞にのりやな事件の多いこと。無意味な死に方をする人の多いこと。人によってはそれはそれなりに意味があると言い、又ある人は前世の報いだと言うでしょう。しかし、では何の為に生きているのでしょうか!! 「死ぬため」ですか。

私は思います。「生きるため」だと。昔は随分死が尊ばれ、あるいは死を強制された時代もありましたが、これからはちがいます。

「この世の中で一番大切なもの」それは人間の生命です。「誰その死を無駄にせず」と言ったところで、死ぬことはもう大きな無駄をしたことなのです。(少くとも年老いて寿命で死ぬ以外は)自分か相手かどちらかが必ず死ななければならない等ということはそうめったにあるものではありません。できるだけ死なないようにしましょう。かと言ってこうしたら、ああしたらとやたら死ぬ恐怖を抱いて杞憂になる必要はありませんが、最低、殺したり殺されたりすること、過失致死等という言葉は無くしたいものです。

この世に生をうけたからには、死んだ後で「ああ私は有意義な人生を送った」と思えるように。

「暴露」

三年 中山 民子

久しぶりの晴天。今日は金環食だ。中学入学当時に比べると、この学校には何といつまでもなじめないのかしら。クラブのことと、授業科目に対する不安、この二つのために毎日毎日、不安不安そしてただ不安なのだ。

友人については、田丸さんのような友の発見に期待をかけるがこれは不可能なことらしい。

義務教育であるか否かのちがいで何と中学と高校の差の大なることよ。中学時代の勉強内容は今から考えれば、何となくまっちょろきことよ。思えば中学時代が、その頃の友、田丸さん飲野さんがなつかしい。又と現れないあの様な人間。人が言えない、人がはずかしいと思う事を平気で言える人間。どうして過去といひものはこうも楽しく、又美しい思い出ばかり残るものか。自分は又いつの日か彼女らに再会できると思うか。本当に過去はなつかしい。ただただ。

四月二十五日(金)うす曇

毎朝の電車の混乱に、嫌気がする。

今朝、下高井戸の駅でもたして居るうちに次の電車が着いてしまった。

やはり女である以上、やたらに人を押すわけにもいかぬ。

夜遅く、あるいは登校前に不安不安、不安の雲を胸にいだく時の自分は実にいやである。又、あわれである。

四月十九日(土)晴

【一年】

六月二十五日(水)晴

現在のところ日本の一部は水不足で、つゆの雨足も弱く毎日の何と暑いことよ。

あまりの暑さに学校の帰り、駅附近の水屋にて、お節ちゃんと鎌田さんとわれと、三人で氷ミルクを飲む。お節ちゃんにおごらせる。彼女五〇〇円札を出す。

隣席の田村さんは思ったより愉快な気品のある人だ。

七月六日(日) くもり

中学時代、大して親しくもなかった横山さんの家へ遊びに行く。少々彼女を研究する。

彼女から、私の欠点は「少々利己主義ナリ」と言われた時にはひどくドキリとする。

よく反省してみるべきだ。「行人」を読みはじめる。

八月十二日(火) 晴

風のない、比較的むし暑き夜だ。

今日は登校日。久しぶりに友人に会うのは、実に変な気持。朝は少々緊張。とても中学時代のように、一人一人に親しみがわかぬのはどうしたわけか。何にしても非常に冷たいやなクラスという感強し。代々木の時の三Bには、実に良い人が沢山いたせいか。

九月十九日(金) 晴

明け方少々冷え込む。やはり秋だ。朝のうちの少しをのぞいては、台風一過の秋晴れの日だ。

六月三日(水) うす曇

衣がえしてはや六日だ。中間考査の結果悪いのばかり返る。うんざりし通しだ。暗記科目をあまりにもバカにして、以外に他の人と差をつけてしまう。あまりにも数学と化学にはかり集中し過ぎたために。

今日の一日は実にいやな日であった。学校で、無暗と神経の変な部分ばかり突つてきて、少々ノイローゼ、もう、とりつかれたの何の、劣等感の十乗ぐらいになってしまつて涼しい顔をしている人がうらやましくて仕方がない。自分がバカでバカで他人ばかりが偉大に見える。友人が恐ろしく、先生が恐ろしく、こまったもの。

八月二十八日(金) 晴

又々ぶり返しの暑い日、ここ二・三日能率上がらず、気持ちの悪いことこの上もなし、休み中の勉強計画は全くの空想におわる。プールの誘惑に勝てず、二時間も並んでイモ洗いの如くプールにやつと入る。

十二月三十日(水) 晴

この時期になるといつも決つてある Complex を感じる。バカな人間共だ。商人にあおられて、単なる金銭の浪費にすぎない。やたらにセカセカと、あわただしくさえていれよと思つている人間もいる。

三月二十八日(月) 晴

いよいよ来週から定期考査。中間の時よりは、いく分の準備は整つたが実にかたよつた勉強の仕方だ。

毎日毎日の通学が全く無意味なもののように思われてならぬ。家に居るよりはよいにはちがいないが。一体、何を得ているのか、又得るべきか。

十二月三十一日(日) 晴

ひどく変化の激しい一日だ。午前中は学校で展示会と研究発表会。その間に食堂でカレーライスとあんみつを食べる。友人達のつくつたものは、きわめておいしい。家に帰らず直接にて、前々からの約束通り大塚さんと二人で青山墓地に行った。二時間強、ぶらつきいろいろのことを話す。足は相当につかれた。彼女の物の見方はなかなか変わつていておもしろき人物だ。

【二年】

四月十五日(水) 晴少々風あり

もう二年だ。前のクラスよりはるかにガリ勉の多いクラス。自分にとっては有利にちがいないが。クラスの雰囲気と新学期の緊張感とから、全く気づまりな毎日だ。教室にいるとまるで人と人に圧迫される事によって自分というものがおしつぶされてしまふような気がする。なぜ新学期には、こうも劣等感を味わねばならぬのか。あまりにもこれが強すぎるために、結果として自分で自分をいじめて変な見えを張っているのは、最も恐るべきことだ。

気持ちの良き天候。兄の東大失敗のショックもどうにかもとにもどる。あまりにも人の能力を過信しすぎたが故のショック。

「白鳥の湖」と「カチューシャ」を見に行く。自分の才能の不足をいやという程見せつけられるのをがまんして。シベリヤの光景は四人の衰れさを描く。自分が一人であるような所に置かれたら気が狂いそう。

【三年】

六月十六日(木) 雨

天気予報はずれて一日中雨となる。世間は大荒れ。歴史上、明らかになるであろうこの安保反対とからんでの岸内閣打倒、先日のハガチ事件から、アイク訪日反対に事が及び、昨日の国会周辺デモにては、女子東大生が死亡するなど悲惨な事件までひきおこす。傷ついた者に対して尚もコン棒をふり上げ、めちやくちに打ちまくり更に手錠をまではめてしまふといった、明らかに右翼と政府の大によるキチガイさの行爲。多くの負傷者続出。そこの国立大学は、ほとんど休校となる。これだけ多くの影響を最も知的な能力を有しているところの大学生ならびに教授連にまで及ぼし、大切な修学中の者達にやまを入れたる岸のキチガイ政治は即座に総辞職すべきである。それをずうずうしくも居坐っている面の皮の厚さは他になたえようのないものと思う。

「他人に見られるという前提を全々無しに書いたものであるという事をわかってもらいたい。」

たわごと

二年 橘田 洋之

鶏は私の手の中に居る。

私は毎年正月を山梨の祖父母の家で送る。そして、今年は、鶏を殺して肉のかたまりにする役目だ。

来年の三月は受験だ。大学へ行くのは、食うためである。こうやって鶏を殺し、Xマスの七面鳥の様にするのも、食うためだ。弱肉強食である。が、これも、あと五十年もくり返せば、私は土の中だ。いやその頃は墓地の価格が騰貴して、埋めてもらえないかも知れぬ。一生には、何百万何千万という物を食ったこの体を、他人は何の価値も認めないだろう。そうなる、その人達にとってこの鶏の価値は零だ。では、なぜ私は食べるのか。他人のためにならず、自分の楽しみにもならぬ一生を、命をすりへらし、無い頭を回わし、他人を蹴落としてまで生きようとする。何がために。又誰がために自分のためか。死ぬのがこわいのか、くだらない。断食すれば、何時か死ぬ。そうすれば、この鶏を殺さなくてもすむ。鶏はいやだろう、生きたかろう。それなのに殺される。どこの馬の骨だかわからぬ人間の、血となり肉となるために、その生涯をここに終ろうとする。人間なら骨に線香を立てるが、鶏の骨は、ネコの胃袋だ。人間なんていいきなものだ。こうして、自分以外の物人間も、鳥も、獣

さな幸福かも知れない。が、それゆえに鶏は幸福だ。死を予知出来ないのが、そんなに幸福なのだ。うらやましいものだ。

風がふいた。冷い風だ。こいつはこれをどう感じるかしら、何か連想したかしら。鶏は大人しい。つかまつているのに慣れたのかしら。私を信用したのか、それともあきらめたのか。大人しい。どうせ死ぬ時は一あばれも二あばれもするのだ。力をたくわえておくのだろう。風も止まった。風の前の静けさ、と言った所だ。静かなのは、ありがたい。人間にもこういう事がある。「十三階段への道」では、みな大人しくつるされて行った。ありとあらゆる物の底の、底まで知りつくしたと言った顔をして、戦犯はつるされて行った。ああ言うのは、紳士だ。「御山の紳士」的だったが、紳士だ。それにひきかえ、死刑囚の中には、泣きさけぶのも居る。あれは口ばしの黄色い鼻たれ小僧だ。腹黒いだけの青二才だ。この鶏も口ばしは黄色だ。もち論大人しい。鶏の中の紳士かも知れぬ。往生際の良いは、あとあとまでほめられるが、鶏では、所詮うかばれない。これも鶏と生まれた悲劇とがまんしてもらおう日が沈む。ヘミングウェイは、「日は又昇る」と書いたが、鶏にとって太陽は、永久に沈みっぱなしだ。もう目が見えないんじゃないかな。つるし首の目かくしが、いらなくて良い。ギロチンにするかな。父が、スマトラで、半野性の鶏の首を部下に鉈で切らせたら、二百メートル程、首なしで、飛んで行ったそうさ。これこそ本当の目くらめっぽうと言うわけだ。戦地では、両足を吹き飛ばされても、味方の陣へ返った人が居るとか、首がふっとんでも、母の名を呼んだ奴が居るとか、鶏が頭無しで飛んでも不思議じゃない。みんな生存するために、死力を

も何もかも使ってしまった。いらなくなるとたたきこわし、ふみつぶし、自分の道から蹴落とし、自分だけが、得を得たがる。ただ立身出世を望んで、一生を終るくだらぬ生物、これが人間だ。人類はえらい。人類は、ありとあらゆる物を、征服し、克服したと人は言う。何を。どんな物を。自然は人類を牛耳って居る。ありとあらゆる物が、人類を牛耳って居る。人間なんて小っぽけだ。やれフルシチョフだケネディーだ、皇帝だクラーデターだと言ったって、これがどんなにさわいだって、地球は自転しかつ公転し、太陽は毎秒十九キロメートルの早さで動いている。地球の針でさしたより小さい所で、一羽の鶏と一匹の人間が、苦闘して居る。両者の関係は、何も私は鶏を憎まない。ああそれなのにそれなのに……。この残酷さと矛盾。この鶏を殺さなくとも、生存可能。しかし、殺すのだ。「情に竿さば流さるる」とかく人の世は……。とは、まったくその通り。私は生きたいと切望しない。が、もし、万が一、立場が逆だったら、やはり殺されまいと私はする。面白い物だ。自分は殺されたくなくて、殺されたくない鶏を平気で殺す。母なる自然から平等に与えられた寿命を、一方が他方を簡単に断てる。特権である。人類は、生物の中の特権階級である。そして人間は、特権乱用者である。この特権にのっとって人は生物を殺す。私は鶏を殺す。何も変でない。規則により殺るまでだ。

私は鶏を見た。心持ち変な顔をしている。何か考えたかしら。何を。山を見て、何を思ったかしら。人間だったら。山なんて見えてられない。キチガイの様に泣き叫ぶだろう。その点鶏は幸福かも知れない。ものすごく多い不幸という中で、原子の中間子みたいな小

つくして、死と戦うのだ。俺もそうしなきゃ、一かどの生物たア言えねえのかもしれない。死力をつくして、死んでも生きる様戦うのだ。あわれな物だ、生物とは。

「おい、早くしろ、湯がわいたぞ。」従弟が言った。冗談じゃないよなア、鶏公、御前のウブ湯なら死に湯だぜ。毛を取るために、殺して湯につけるんだ。今は冷たい風だ。今に熱い湯に入れてやらア。それから丸裸にしてやらア。結局は寒さの中で、死ぬんだぜ。御前の毒にヨ。大体、生まれて来たのが間違いだ。食われるために、生まれて来たんだぜ。かわい相に。人間は死ぬまで待とうホトギスだがネ。もっとも、この頃は、演説していると、殺して呉れるらしいが。一人一殺主義だつてよ。「この頃の若い者は、血の気が多くてイケネエ。昔は、大和魂がガンと背椎にたたき込まれて居たが。」と、どっかの御年寄がぼやいて居たが、俺は一人多殺主義だ。お前なんか一千番目位よ、がまんしな、めぐり合いが遅かったのだ。何一番。一番は、背中についたノミ、お前の前。それは青大将よ。

さてと、馬鹿話して居る間に時間がたつた。今の話は冥土の土産に持ってきた。エンマ様によろしく、部屋は取っとくよ。俺は極楽往生だからな。言っとくが、俺は殺したくない。だが運てエ物よ。がまんしな。くれぐれも俺をうらむなよ。俺が殺るんじゃない。俺の手がやるんだ。足がなくても歩いた様にな。じゃちょっと苦しいが、我慢が大事、我慢が我慢だ。そうさわぐな、みっとない。ドイツの紳士のまねでいいからやってみろい。往生際の悪い野郎だ。人間でなくて良かった。きさまは、おい、いてエじゃねエ

か。そうひつかくない。呉々も言っとくが、うらみつこ無しだ。うらむなよ！ さわぐなよ！ さわぐな、南無阿弥陀仏、ほう蓮げーきょー、アーメン、ソーメン、冷ソーメン。ひでエ面してやがらア。寒いか、がまんしな。ほら湯だ。あついか。気分は。あつたかくて生き返るなんて事はするなよ。一回死にやア充分だ。念を入れて二回なんて、まっ平よ。どうでエ。あつたけえか。よくつかりな。良く入らねえと、毛が取れねエからな。裸にするのも楽じゃねエ。おい随分白い面になりアがったなア。気分はいかがかや。いい湯だなア。俺も入りてえやア。幡随院長兵衛も湯に入って死んだ。石さんもよ。光栄のいたりだろう。うれしかったら、ウンとかスンとか……言わなくていいよ。じゃそろそろ裸にしてやろう。寒かるうが、我慢しな、ほ、湯気が出てらア。寒くないだろう。何寒い。鳥膚が立って居る。ア、なるほどさて早くやらねえと、お前の相棒がまだ居るんでな。短かいつき合だった色が御世話したなさっき言た事を良くかみしめて人の前に出な。学問は、その人の血となり、肉となるからな。その肉を人間はかみしめて胃の中へ送ってくれらア。胃も又ていねいにかみしめて呉れるよ。結局お前の肉をかみしめた奴は、俺の講義を聞いた事になる。少しは切れる頭になるよ。俺のお年玉とボーナスさ。

こう言うくだらん事を思いながら、正月鶏をつぶした。富士は夕日が雪に反射して、大変きれいだった。鶏が見たか見ないか知らないが。又私の言った事をかみしめたかどうか解からない。ただ、これだけはたしかだ。私の歯と胃はこの鶏肉がかわれでかみしめえなかった事。

ママは何も言わないけど本当の事言って、高校へ入ってから、いやそれ以上前からかな、一人で起きて学校へ行った事一度もないんですのね。

夜十二時以上も起きていた事なんてない私が、いくら「明日の朝は一人で起きて行こう」なんて思っても目がさめた事なかったの。そしてね「四十分も五十分もかかる所に通うのやっぱり私には無理なのかな」その思ってたがっかりするんです。でも純江のそんな気が持がわかってるのか、ママは毎朝お弁当をつつでカバンの中にまで入れて持たせてくれましたね。学校から帰るとつかれちゃってごはんの支度のお手伝いもしないでぼんやりおぜんの前に座っている純江を、見かねてか、パパが「ママのお手伝いしなさい、純江ちゃん。」って注意する事さありますけど、ママは知らん顔をして一人で全部やってくれちゃっていたんですものね。ありがとうママ。学校であった事をその日の夕ごはんの時、ママに全部話すのが純江の日課であり、それを聞くのがママの楽しみでしたな。

でも面白い話や楽しい話ってあんまりなかったわね。松高へ入ってまず初めに私がくやしがつて話した事で、ママも驚いていたのは、私がある友達に言われた「そう、あんたこんな学校うけたの？ 私なんか×高うけたんだけど、おしい事にまわって来たのよ、人数が多かったのね。」と言う軽蔑した語調の言葉でしたな。でもねママ、三年にもなった今日、そうついこの間のホーム・ルームでさえ「だいたいね、皆さんこんな学校愛せませんよね、どこも入れてくれなかったから来たんですものね。」というこんな情ない言葉をはく人もいるんですものね。あんな事でくやしがつていたのおかしい

ママへ——大晦日の車中にて

三年 小林 純江

ママ、汽車はとってもこんでいますよ、もう大綱を出たんですけど座れる所なんかないんです。大原まで乗ってもこれでは立ちつきり覚悟しなければならいでしょう。さっき新宿を出てから約一時間半、もうだいたいぐたびれて立っているのがいやになって来ました。でも仕方がないですね。大晦日の午後の急行では……。

今年もとうとう大晦日になってしまいましたね。高校に通うのも正味あと一ヶ月、早いですね、いよいよ卒業の年を迎えるんです。

ねえママ、純江がもし卒業式に精勤賞をいただけたら、それにママの名前を書いてあげたいわ。今そんな事を考えています。

だって今まで二年と二学期の間、欠席も遅刻もなくいられたのはみんなママのおかげなんですよ。ね。「まるでママが学校に行くみたいじゃないの。」ママはよくそんな事を言いましたね。

まったく毎朝七時十分か十五分頃まで寝かせておいてくれて、絶対に遅れないように出してくれる。その早わざにかけては日本一だと思って居ます。

みたい。ところがねえ、ママ、そんなたんかを切った私のクラスのある男子、文化祭の時の活躍は、「学校一」と言ってもいい位。純江それを見て何だか、頭の中がおかしくなっちゃたの、だってそうでしょ。学校も愛さない人間が、その学校の文化祭をよくしようと努力する。なにがなんだかこの弱い頭ではわかりません。ただ純江に言える事は、その時担任の先生も言われた「学校は愛すべきもの」それだけです。ママも賛成でしょ。それから数少ない楽しい話の中で、ママが言ってた言葉は「一年生の時の先生が良かったから純江ちゃんを安心して学校へやれた」でしたな。それによるとママは、体の弱い純江を遠いしかも都立の学校へ入れたという事がとっても不安だったらしく、一年生の一学期の様子を見て、三年間松高へ行かせるかどうかを夏休みに決めようと思っていたらしいわね。

でも一年生の私が毎日楽しそうに学校に行くのを見て安心したんですよ。一年生の担任が良かったから——私もそう思っています。私の性質や体の事をよくのみ込んでいて下さって、それとなく気を配って下さったの。とってもうれしく思っているんです。そんな先生に、二年の間を受け持っていただけだから、おこされるとすぐ起きて楽しく学校へ行けたすですね——遅刻しないですね……。でも遅くなると新宿の駅まで、自動車で行った事も何度あったっけ——三年生になった時、ママはずい分その事を心配していたらしいわねでも一、二年の時に出来た親友もいたし、その他の友達もたくさんいたから、何とか二学期間行きました。あと少しだから、今度は意地でガンバリますから、どうか安心していて下さいね。

あのねママ、こんな事言ったら又例によってママはテレくさそう

に「何言ってるの」って笑うでしょうけど、純江とママとの仲の良い事、みんな知っているのよ。この前の遠足の前にね「小林のお母さんは、いいお母さんだね、又今度も送って下さるのかい？」って入学当時からよく知ってる先生に言われたの、それにね、去年の秋の修学旅行の時に上野駅で、あんまり二人でおしゃべりしていたものだから、校長先生がね、学校新聞に「語っても語りつきないKさん親子」なんて、お書きになったのよ。純江それ見てちょっとテレくさったけど、やっぱりうれしかったな。だから最近ではみんなに「うちのママはいいママよ」って言う事してるんです。

考えてみると、送って来なかった遠足なんてないんですもの、目立つのも無理ないですね。おはすかしいけれど……。

「いいお母さんね」と言ってくれる友達も、たいていびっくりする事、それは私の買物物は、みんなママがしてくれるという事です。そのセンスが又、いいんですものね。ママにしてはすごく新しいセンスだってみんなほめるのよ。

でもあんまりそんな事をしていると、私のセンスがよくならないから、来年からは自分で見させてね。三人しか家族がいないから、めったにママと一緒になんか出られないという「家庭の事情」が真相なんだけどママのセンスが新しく良いのやっぱり悪い気しないな。「ママ、手袋とマフラーそろっていて。」

ついこの間の事だったわね、純江がちょっといたずらしすぎちゃって、怒られるかなと思って、そとママの顔をのぞいたら、いつものママに似合わず、口の中で何やらぶつぶつ、「こりゃいけない

ね。大丈夫よ。」ってそれ聞いて安心しちゃったり、パパとママに感激しちゃったわ。

ママ、茂原を過ぎたわ。だけど一向にすぎません。もうあきらめました。立っていても、こうしてママと私の事を考えてる、とあきないから平気です。

そう、ママは私のよき、いや唯一人の相談相手ですね。純江が、ママに黙って何かやろうとしても、うまくいった事はないし、又あまり黙っていられた事もなかったわね。勉強の事でもそうだけど、特に男女問題についてはきびしいんですもの。長い時間あせらずに、よく納得するように、そう、かんで含めるってあの事言うのかな。とにかく、やさしく説得されるとガゼン弱いんだ。もともと問題らしき事を起したのは、精神年齢が低いのか、つい最近の事でしたけれどもね。

「何もかも、大学へ入ってからに」それはわかりきっている事なんですママ、でも純江は忘れられません。あの色白の顔は輝く美しい瞳を、あっ、弱いなんてママの言う言葉が、聞けたような事言っていてまたこんな事考えて、純江っていけない子ですね。ごめんない。

政治問題も、ずい分いろんな話をしましたね。たいていの事は意見が一致したんですが、一致しなかったのは「全学連」の事が話に出てくると平行線じみて来るの年の違いかな。

とにかくママは全学連を人事のように考える。純江は、自分達の

い「そう思って「何よ、はつきり言って」武者ぶるいしながら、いやに大きな声を出したら、まだぶつぶつ、変だな、こんな声はなに。そう思って今度はおとなしく「うん？」て聞いたら、小さな声で可愛がってあげないから」ですって、まるで三つか四つの子に言うみたいに。十八にもなる娘をつかまえて、馬鹿にしてるわまったく——そう思っただけですけど、それが口には出ないで笑い出していました。だってママ、そんな事を言う事自体が純江を可愛がってくれている証拠でものね。そう思って見たらママも笑ってたわね。

「高校はP・T・Aに引き出されなくてよかったわ。」そんな事をママはいつか言ってたわね。純江が小学校に入ってからすぐ、ママは委員、パパは別の部門の委員長、そしてとうとう副会長までやらされて、結局ママの雑用は、普通の委員の二倍も三倍も、中学校卒業までずっとやりつづけたんですものね。そう言うのも無理はないと思いました。でも純江が高校に入ってからには、パパが芸術祭の文部大臣賞等というものをちようだいしたのをきっかけに、急に忙がしくなってママはちょっとものんびりなんか出来なかったけれど。

家事とパパの仕事の事で忙しい間にも電話で純江が学校でのびちやった事を知らされて、寝ている純江の顔色よりも青くなってとんで来た事が何度もありましたね。

純江ね、ママがすぐ来るから、友達のお母さんも、自分の子供が病気になるたらすぐ来るだろうと思ってたら、そんな事ないので驚いた事がありました。ママに話したら「そう、でも純江ちゃんには、ママが行かなかったら泣くでしょう。きつと、それに他の人に迷惑がかかるもの。うちじゃパパが、早く行ってやれて言うから

事として考えるの。日本の国の平和に対する争いを見る態度として、どっちが責任感がある態度かな？ 安保さわぎの時もそうでした。学校では、オエライ方が「高校生の政治は違法だ」なんて、わけのわからない訓辞をする——家では、ママみたいに話のわかる人が、あれほどまでに変わるものかと思うほど、エゴイズムな発言をするでしょ。私はその時ママの顔から涙が流れているのを見て考えたの——そんなに私達をデモになんかやりたくなかったら、どうして世の中のお父さんやお母さん、そして学校の先生が、こんな問題を起す人物を政治家に、いや総理大臣までやらせておくんだろう。

戦争を起したのも昔の大人たち、そして今又、戦争にまきこまれる原因を作ろうとしているのも大人たち、それじゃ、大学生や高校生しかやめさせられないじゃないか。」とね。ママは「怪我をするから」と言ってたの。「デモで怪我をするのと、他の国のために戦争で死ぬのと、どっちがぐやしいか、ばかばかしいか考えて見てよ。」そう叫んだ純江の顔も涙でぬれてたんですね……。

あつそうそう、反抗心ばかりもやして、うれしかった事を思い出さずにいました。

まず最初は、おばあちゃんの入院から、お葬式さわぎのあった、中学の時からのおびのびになっていた純江の室が出来た事。クリーム色の壁のある室。古い家に住んでいる人々に比べると狭いかも知れませんが、戦争で家も何もかも失った純江にとっては最高にうれしかったのですものね。

それから二年生の春には、これ又私にとって生涯忘れられない程

うれしかったわね。それは、純江の室の隣の応接間に黒ぬりのピアノが置かれた事。置く所がないという理由で買ってもらえなかったけど、念願がなかったの。うれしかったわ。今までにあんまり達しなかったけれど大学へ入ったらみっちりやって卒業するまではうまくやってみせるから、待っていて下さい。

それから、うれしかった事と言えば、前者等とは比較にはならぬけれど、歌舞伎座で「忠臣蔵」を一等席で一日中見た事かな、「子供が一日見たってあきちゃう」って言われて、これもおあずけになっていた物、やっとなんと認められた事も重ったのでよけいうれしかったのね。ババの解説付きよ。なかなか良くわかりました。ママの時はババ行かないからだめだったでしょ。でも純江がおそった事位、ママ知ってるかな。

とにかく素敵だったわね。中でも海老蔵と歌右衛門の「道行き」それに上手だったのは甚五郎の基平が切腹の場面、こんな事を言う友達に不思議がるのよ。でも私にはハンドバッグや手袋なんかよりよっぽどうれしいクリスマスプレゼントでしたわ。でも甘いママは、ブローチとマフラーをプレゼントしてくれましたね。私には知らん顔してね。

そんな時のママ大好きー現金かな？ ああ、それから最近では、作曲者の子供が演出したというオペラ「ヘンデル・グレート」あの時も、ママの性質がよく現われるようなちょとした騒ぎを起しましたね。だってママが私に「切符いただいたからオペラ見ていらっしゃい。」って言ったの試験の二日前。だめよ。あさってから試験よ。冗談じゃないわ、断わってよ」私はいきなりママにどなりつけ



とにかく現役で入って早く安心させてあげたいと思っているの。それ位しか私が、ママにしてあげられる事もないのね。

とにかくそれ、あと三月足らず。寒い冬には心臓病と高血圧のママは辛いのでよくわかりますけど、どうか今までと同じようにがんばって朝起きてくださいね。お願いします。

こんな事いうと又、ママはきつとすまして見せて、それからうれしそうに明るく笑うでしようが、「ママと一緒に嫁に行く」それが出来る日まで丈夫で長生きして下さいね。

さあ、もう大原です。とうとう立ちつきりでした。おばあちゃんや、お兄ちゃん、猫の手よりましな位の、純江が行くのを待っていてくれるでしようから早足で歩いて行きますどうかよいお年を、二日には帰ります。

かしこ。

弟のこと

二年 佐野李影子

弟がなくなつてからまる一年になる。なくなつたのは十二月七日だったと思う。急性肺炎だった。もう十二才になっていた。もともと弟は小児マヒで不自由な体だった。脳を犯されていたので手足はもちろんのこと、口はきけないし言葉もわからない。食物も人が食べさせねばならなかったし。おむつの世話からなにか、全部まわりの人達がしてあげねばならなかった。全くの廃人だった。三才までは標準以上の発育ぶりだったのが、急に高い熱を出した。熱がお

てしまったの。そしたらママは困つたような顔して、だって中田さんからお電話で、是非お嬢さんについておっしゃるのよ」っていうから、「中田さん？ 喜直さん？」「違うのよ、喜直さんのお兄さんからよ」そう言われた純江は、考えちゃったわ。だって一度御挨拶しただけの方なんですものね。

「どうせ一時間や二時間やっただけでやらなくたって同じよ。今まで遊んでたんですもの、ね。それより一生に一度しか見られない上演なんでものを見てらっしゃい。」そう言ったママ、その言葉で私の気持は一変して、文京公会堂へ行く事にしたのね。

「送って行ってあげるわよ。そして又、迎えにも行くわ。」そう言っていたけど、本当に來てるかな？——そんな気持で出て来て見たら寒の中に立って待っていてくれたママ、おかげで新聞評にも「本場らしくきれい」とあった美しいオペラを見る事が出来ました。そんなにまで可愛がって育ててくれて、他の人の半分しかなくて生れた純江を一万メートルのマラソンもかけられるようにしてくれたのはママ、たった一人のママのおかげです。そんなママに申しわけないと思う事は、学校の成績、前にも言ったように疲れちゃって、御飯を食べても、おぜんの前から離れないんですものね。試験の時ぐらい少し遅くまでやってもだめ、朝は起きられない——。

辛さが重なるばかり、そんな純江の体を理解しているからか、どんな悪い点をとつても毎日おこつて、勉強させるなんて事はないママ、ありがたいと思っています。だから来春の大学入試も、無理をしないで入れる所へ行きます。

そんな所はないかな？……。



さまたちと思つたら様子が変わっていた。それっきり、なにもわからなくなつてしまつたのである。今でも母は、「あの頃は本当にかわいかったねえ、お客さんが来れば、『ハーン』と、かわいい声をあげて玄關にとんでいったし、ラジオを聞いてはまねをして歌っていたっけ。」という昔東京ブギウギという歌がはやったことがあつて、よくラジオからその曲が流れていた。最後の節のところで「東京ブギウギ、ハーン」と、いうのを弟がまねて、「ハーン」といながら両手をあげてバンザイをしたものだった。

弟は、私や妹に似ず、きれいな顔立ちをしていた。色白で眉毛がすつと上にのびていたし、目もとが涼しげだった。鼻もまっすぐですんなりとかつこうよく、唇も実に愛らしかった。なんともなくて成長したら、素的な美男子になっていたことだろう。弟の世話をしてくれたおばさんが、よく、弟の顔が姉さん達の方にまわればよかったのにと、口ぐせのようにいついていた。よっぽど私や妹の顔はなつてない顔だし、実際、弟は顔はこの私がみて、美しいと思わざるを得なかったのだ。頭の毛は寒くないようにと、おかっぱにしてあったので、知らない人などは、よく女の子とまちがえた。男の子だとうとすぐ驚いて、きまつてその次には、「女の子のお子さん」のようにかわいらしいですわね。」と感嘆するのだった。

当時は母も仕事をもつていたので、私が家事をしなければならなかった。弟には普通の白飯ではなく、卵を入れたおかゆを食べさせていた。よくかまないの、おなかをこわすからだ。はしと茶碗をお盆にのせる音がすると、弟は待ち遠しげに台所の方に目をや

った。サジですくって口に運んでやる。気分の良い時は面白いほどよく食べる。ひな鳥が親が運んでくれたえさを、小さな口をいっばいにあけて、早くくれとさえずるさまと似ていた。そんな弟がいらした。

おむつの世話が一番いやな仕事だった。寒い冬の日におむつをジャブジャブ洗うつらさは、今になっても忘れられない。冬の日や雨の日は、なかなかおむつがかわかない。寒いからたくさん使うのに、少ししかかわかないから困ってしまう。いつもこたつの中は、おむつの花盛りだった。

三時には、きまぐれで一合の牛乳をのませた。弟は非常に牛乳が好きだった。おわんにいっぱいの牛乳を、息もつかずにごくごくのどをならして飲んだ。まだのみたいといった目つきをするので、「これでおしまい、またあしたね。」と私はいった。

年を経るにつれ弟は弱くなっていった。よろよろ歩きをしたのもう、それも出来ず、ほとんど座ったきりだった。歌などを聞くと、よだれをたらしながら、「ウー、ウー。」と声を出したのに、もうなんにもいかなかったただ柱にかけてある彫刻をぼんやりと丸いせうに見入っていた。弟はいつもこのせうを見ていたものだった。時々、かける場所をかえてみてもいつの間にか、わかってしまふのだった。じいっと、何分も見続けてはまばたき、又じいっと見上げるのだった。私はこのせうのかざりについて、よく、へんな想像をした。なにが私達には見えなくて、弟にだけ見える神様がそこにいて、弟と目で話をしていて、ではないかと、ちょっとみたらなんでもないかざりが、実は魔法のかざりで、あの中にはひとつの

世界があつて弟はそこに行くのだとか、そういう想像だった。いずれの想像にしても、そこにも神だとか魔法といった幻想的なものがひそんでいた。と、いうのは、弟は人間とはかけ離れたものの感じがしたからである。弟が彫刻に見入っているのを見ると、私は必ず弟がただの小児マヒの子供としてではなく、人間の形をした神のように見えるのだった。

父と母が離婚したのは弟が死ぬしばらく前だった。父が弟をひきとり、母は私と妹をひきとった。私と妹は問題なかったが、弟は普通の元気な子ではないので、父は梅ヶ丘の精神病院に入院させた。今までの環境から、病院という異なった環境になったことが、弱い弟には致命傷だったらしい。もっともその頃には、弟の体はいちだんと衰弱しきっていたことはたしかであった。離婚してからも、弟のことが気がかりで、母は時々病院を訪ねた。おむつの世話をし、病院の食事を自分の手で子供の口に運んでは長いこと病院に入りびたっていた。母が帰ってくる時は、子供が寂しそうな顔をして見送るといって、母もまた、心なしか、さびしそうであった。忙しいのに病院にばかりゆく母の姿があわれで、どんなにわびしく、切なかったことか。父もよく弟のところについていたらしい。

病院にはいつの間もなく、弟は病気にかかった。急性肺炎だった、私ははじめ。大したことはなからうと思っていた。実際ははじめのうちは、ただ病気になるというのを耳にしただけで細かいことは知らなかったのだ、ところが数日後、病院から電話がかかって、病状が悪化したという。あわてて母は出かけた。その日の夜は帰らな

もっている行いのように私は思う。私は一滴も涙をこぼさなかった。不思議に泣きたくなかった。あまりに急の死だったからかも知れない。いや、弟に対する愛情が少なかったのかも知れぬ。母は泣けなかったらしい。家庭の不和や、離婚などで、これからの生活を考えると泣くどころではなかったのだろう。

弟の死に顔は絵に描いたようだった。苦しみから解かれた顔は、いつものようにすき通っていた。看護婦さんの心づくしの、うすくぬった口紅が、一点の花のようだった。白い巡礼姿で弟は旅立っていた。母はいう。「あの子は絶対に地獄にはいかないよ。なんにも悪いことはしなかったからね。あの子は神様のような子だったのよ。」本当に弟は神にちがいない。神だの鐘をたたく時、私はじっと耳をかたむけて余韻に聞き入る。弟も遠くでこの鐘の音を聞いているだろう。

近頃になってよく弟のことが思い出されるので筆をとってみた。

卒業を真近にひかえて

三年 鈴木玲子

卒業を真近にひかえて、みんなは何を考えているのであろうか？後、卒業試験が終ればもう学校に來なくて良い。そんな今、私の考えること。考えるといつても私は何も考えていないのだ。全然空虚な毎日。ただ、毎日何となく学校に來、聞いているかいらないのか判らない顔して授業を受け、お弁当を食べて家へ歸る。こんなま

かった。病院では、急救車の用意もして、その晩は医者がつききりだった。あくる日になった。朝早く、母から電話があつて、「今日がもしかすると最後だから、弟をみてから学校に行きなさい。」という。私と妹はすぐにとんでいった。弟の部屋は個室で窓には鉄ごうしははめてあった。体を動かすことの出来る精薄児が多くいるので、鉄ごうしがあるのだった。弟はベッドに横たわっていた。父と母がやつれた面持ちで弟を見つめていた。もともと、やせていた弟の顔が、熱にうかされて、しぼんだ風船玉みたいに小さくなっていった。久しぶりにみる弟の顔は前とは全然変わっていた。ほとんど昏睡状態におちいつていた。力なく目をつぶって、鼻と口から荒い息をしていた。小鼻が息をすうたびに、ヒクヒクと動いた。鼻の上にはへんな形をしたガラスが先についた管がつり下がり、口には細いゴム管がさし込まれていて、ベッドのわきにある吸入器から空気が吸い出されるたびに、水がゴボゴボと音をたてた。時々、看護婦さんが脱脂綿をまいたへらを口に入れては、たまった黄色いねばねばしたかたまりをとってやった。冬の日のさし込んだ静かなこの部屋に、時々精薄児の恐いような奇声が響いてきた。

その日学校から帰ってくると同時に、弟が午後亡くなったことをきかされた。

○
お葬式の日には妹は声をあげて泣いた。母が肩をさすってなだめた。日ごろ、妹は弟をかわいがっていた。おもちゃを手ににぎらせたり、だっこしてあやして遊んでいた。私の身のまわりを世話するのにくらべて、妹が弟をかわいがったことの方が、ずっと愛情のこ

ま毎日を過して良いのであろうか。時をこんなにも労費して良いのであろうか？こういうことを考えることも余りない。何ていうのだろう、我ながら自分が嫌になつてきた。遊ぶのだって前みたいに遊ぶ気が起らない。家に帰つたつて、以前みたいに手伝いもしなければ、勉強も全然。教科書を開けることすらめつたにない。日記をひらげてみてもずーっと白紙だった。たまに何か書いてあると思うと「ああ、つまらない。何て退くつな日だったんだらう。」と書いてあるのみ。友達とダベリングしていてもちっとも面白くない。頭が馬鹿になつていくみたいだ。進学の人には勉強で大変だろう。今みたいな状態なら就職試験前のあの少し不安な気持のあつた時の方がずっとよかつた。少くとも頭と心が常に働いていたから。

こんな時、人は「社会に出たら何も出来なくなるから、今のうち色んなことやっておきなさい。」という。じゃあ、一体何をすればいいのか。「本をよめ」とおっしゃつても、この頃は活字をみるとねむくなつてしまふ。あんなに本が好きだった私なのに。

級の人達は一生懸命レース編みをしている。レース編み？ 私は余り好きでない、好きではないというより、面倒くさいのだ。

何か刺激がほしい。くだらぬことだが、凄く素敵な男性が現れて、その人のことはかり考える（勿論片想いでも良いのだが）。これだつて良いと思う。だつてそうしたら、心に刺激を与えるから。残念ながらそんな素敵な人は私の前にあらわれない。

然し、考えようによつてはこんな退くつな時が幸福なのかもしれない。お勤めにでたらこんなことを思うこともできないのだから。毎日会社へいってくだたになつて。心身共に。そうなるのが、私

の現在望んでいることじゃないの？ そうなつたら、前みたいに何も考えることのない時の方がよいつて思うだろう。とかく、人間とは（特に私は）かつてに出来ているものだ。

やつて見て知る

二年 植田 裕子

夏休みを如何にして過すかという事は、私達学生にとつて相当重要な問題だと思います。人は皆各々、「今年の休みこそあの山へ登つてみよう」とか「絶対にこの問題集を完成させるんだ」等と様々な計画を胸一杯に持ち、さて九月一日になつてその成果は如何にという事になるのですが、私の高校二年としての夏休みを振り返つて見る時、私は或る満足感が胸一杯に拡がるのを抑えることができませんでした。

秋の文化祭に参加する英語部の劇が、トルストイの「酒の始まり」と決つたのは夏休み前のことでした。一年の時から英語劇に魅力を感じていた私は、一度出てみたいという希望がとて強かつたのです。ですから脇役ながら「隣人」という百姓女の役を演ずることになった時、小学校の学芸会に出たきりで演劇というものからは遠ざかつていた私が、果してできるかしらという不安と同時に、でも精一杯頑張るんだという気がしました。

練習は夏休みに入つてから早速始められました。毎日というわけではありませんが、学校の夏期施設に参加し、又補習を受けていた

私にとつては半日、時には一日中暑い学校で練習させられたことは相当な重労働でした。或る日など、朝十時から夜六時頃までやつて心身共に疲れ果て、一緒に出演する友達と「演劇って面白いけど大変ね」と話し合ひながら、あかあかと灯のともった商店街を帰途についたこともありました。又或る日はどうしても自分の思うような演技ができなくて、じれったくてどうしようもない気持になつた事もありました。でも今静かにその時の事を思い起してみて、本当に良い経験をしたとつくづく思うのです。毎日「暑い／＼」と言いながらも私は、厭な感じはちつともせず、何か物事を始めたばかりの者が感じる或る種の興味と期待の入り混じつたような気持が、日毎に高まつていくのを感じていました。そして暑い、殊に三年生にとつて大切なはずの夏休みを、未経験者の私達に手を取るようになつてくれた演劇部の三年の人達に、本当に感謝したい気持で一杯でした。

十月三十日の当日には母も「裕子が出るんですつて？」というわけで見に来てくれました。そして劇が終つた後で「全く驚いてしまつたわ！ 少し位恥しそうな顔をするかと思つたのに図々しい位、落着いてるんですものでも良かったわ。立派にできましたよ。」と言つてくれました。私は、その批評を聞きながら、確かに舞台上に立つた時、ドキドキして上がるといった気持はなく、むしろ闘志満々とした気持が湧きあがつたのを思い出しました。いかにしたら後に坐つてゐる人達に私の声が届くだろうか、どの様にしたら演技の感情というものを皆に感じて貰えるか、考える事はそれだけでした。舞台裏では皆が「御苦労様！」と迎えてくれ、責任を果たした後の快さというものを十分味つたものでした。

私は今、しみ／＼と 생각합니다。下手ながら、不慣れながら自分と与えられた役を自分なりに理解して実際に身体を動かしてみることが、どんなに自分に自信をつけてくれるものであるかということ。演劇をやる人達が、普段はおとなしうでもやる時になったら一生懸命に自分の力を出し切つて頑張る姿を羨しいと見ていた私でしたが、今度はほんの一寸でも実際にやつて見て、ファイトを持つて物事にぶつかつていくことの素晴らしさを、この身で体験しました。どんな事でもいいのです。自分が或る事に興味を持つたら、中途半端な気持でなく、その事に全身を打ち込んでやつてみるのです。必ず自分にやつただけの力はつくと思います。

「私、今度の文化祭で英語劇に出ることになったのよ。役はね……百姓女よ！」私がこう言い終るか終らないうちに、大抵の友達には吹き出して「あなたが百姓女ですつて？」と笑い出したものです。それ程私に出演するようなタイプとはほど遠く「隣人」の役は場違い的な突拍子もないものだったに違いありません。でもこれで良かったのだ。もし私がやり易い役を貰つていたのなら、作文に書くほどまでに多くの事を感じることにはなかつただらうと思います。

去年の夏突然に演劇にタッチしてみて、それが私にとつてどれだけ良い勉強になったかを思い、一寸やつた私でさえこんなに夢中にさせてしまふ演劇の魅力を、又改めて感じたものでした。

物事をする場合、いや／＼やるのも、喜んでやるのもその人の自由です。けれども、どうせやるのなら私は喜んで真剣にやつた方がいいと思いますし、喜んでやつたことによって、自分に自信がつくのならこれ以上の幸いはないと思います。どんな事でも経験と練習

一つで興味を持つ事ができると思った時、この世には楽しむべきものが数限りなくあることに大きな喜びを感じたものでした。

母校を持つということ

三年 高井 宏子

庭の木の葉が寒風にかさかさど鳴る今、私は思います。いろいろのことを。

私はもうすぐ卒業するのですが、その卒業に当たっていま私が考えていること——それは私の心の中を行きすぎるちよとした思いにすぎないのですが——をいたらないながらも書きつづつてみようと思います。

元来私は書くことにおいて無精な方ではありませんが書いたものは見られないようなことばかりです。けれども私が書いたこの文章をつれづれながら読んで下さる方があれば幸いに思います。

私は小学、中学と二回の卒業式を経験してきましたがそのどちらでも卒業して学舎をはなれゆく悲しい——そんな言葉が当てはまるかどうかわかりませんが——感情を味わったことがありませんでした。というのは私にはお別れして淋しいような友人もなければ先生もなかったからです。私は転校して三つの小学校と二つの中学校に通ったのです。

私は人と仲よしになるのに時間を要します。自分の方から親しんでうちとけていくことはほとんどありません。ですから転校

して行った先でも親しい友人というのは一人もいません。

まして、片田舎から大都會の真中へ来て、知る人もなく、それこそ全く赤の他人の中に入り込み、子供ながらに悲しくなってきたものでした。さらに転校して行った先では、長くいることなく大抵一年から一年半でした。友だちの名前を覚えると思う転校してしまふような状態でしたので、私が今、名前と人物とが一致するような人はほとんどおりません。淋しいことです。

友人についてだけではなく先生についても同じです。困ったことがおきても先生のところに行つて相談することなど全くありませんでした。それ故卒業式の時も悲しいだの淋しいだのという感情は全然ありませんでした。

他の人たちが別れを惜しんでいるのも全く無感覚でした。あるいはいくらあつたかもしれないが覚えていない位ですから激しくなかったのでしょう。

全く他人の中にいたのです。

けれども三回目の卒業式、それはちがいます。まして高校が義務教育の場でなく友だち個人の道を歩もうとしている矢先です。入学から卒業まで、一つの学校にいて、あの窓、この窓、水道の蛇口一つにも思い出すことがあるような気がするのは、かといつてこの学校に全く住み心地よい天国を感じたわけではありません。あるいは不平不満の方が多かったかもしれない。

しかし、これからは私が心の内外で本当にやさしく母校と呼べる場所ができるのです。卒業した小・中学校に私は母校と呼ぶことのできる親しさを感じておりませんから。私個人としての先輩は小中

高校を通じて、一人もおりません。けれどもこれからは頼りがいのある同輩、親切な同輩、私がライバルにすることのできる同輩がいます。そしてたずねて行ける先生方がいらっしゃるのです。そしてさらに数多くの後輩がいます。

過去二回の卒業式を通じて別れを悲しむべき友人も恩師もいないということの淋しさがわかりました。

何度も転校していろいろの先生や友人にあえて、自分をみがくことができていいじゃないかという人もいるかもしれませんが、それはもうたくさん経験しましたから、一つの学校で入学式と卒業式とする喜びも味わいたいです。又現在その喜びを序々に静かに味わっているのです。

三年前、桜が美しいな、と思いながら入学して来たこの静かな学園を、又桜が美しく咲くだろうなと、思いつつ巣立って行く私の心中には、小さいけれども深い足跡を印するような気がするのである。実際目に見えるようなことは何も残しませんでしたが。

でも、それでも私は野辺に咲く名も知らぬ花のようにやわらかく静かな幸福が私を包んでいるような気がするのです。

これを書いている現在、私が進むべき方向はまださだかには決定していませんが、この感覚の中で私の目的がかなえられるような心地がするのです。と、私の心を現在、よ



ぎる気持をならべましたが、これを読んだことなことを考えながら卒業した子がいたのだなあ、心のはしに止めておいて下さる方がいたら満足です。

論 文

今に想う

三年 角 田 肇

人間の生命、それは、はかなくも貴いものである。我々人類たる生物の最大公約数、そしてそれを全うすべきものである義務づけられた一つの生命を授けられたわれわれ。生きる為の理解、道程そして諸々の考えねばならない点、このことより端を発して拡がりつつ域を伸張し、無限なる一つの五体からなんと偉大なる生命の力とそれに伴った思想が涌出したことであらうか。それとも動物的本能的それらを超越した思考力、洞察力の鋭さ、科学をも支配下に置く人間の頭脳。

地球の有史以来は人類の足跡史である。その足跡史をたどつてみると、いかに人類の思考能力が驚異に値いするかは周知のことである。転じて現在の日本の世相に眼をむけよう。ハッと胸をうつものがあるに違いない。いや、既に感じているであらう——真の人間であるならば。

生命を根底として成り立つ人間の社会。その部分／＼には生命の

乱獲、年少者の無軌道な行動が頻繁に行われ、生命を粗末にする輩の横行が絶えないからである。

ジャーナリズムの波に乗って、我々現代人の視聽器官に否応なしにとびこんでくる暗いニュース、血をも連想させる事件の数々。これらのニュースをきかされるにつけ、なんと生命が粗末にされているかを考えると実に暗たんたるものである。

動物の生存競争。それらは古今を通じて行われる。アフリカの草原地帯でも、アマゾンの奥地でも。地球という大きな地盤を舞台として展開されてきた。それは、結果的にみると人類が各々彼等の集団民族で野獸類に勝ち抜いてきた競争の歴史である。その人類の内部に於いてさえも、未開の人間社会はさておき、それも現在の文明社会といわれる所で。

ところで原因たるものは。私が思うには、人間の特権として授かった理性と感情との不均衡からであると思う。理性とは本能的なものを（これらは曖昧であるが生来の判断力とでもしておこう）精神的生活に直結させる教育を基とする。感情とは、生来三つに大別される本能的欲求の心（その大部分は人間の生活の発達に伴って加味されてきた）のかたまりである。感情という矛と、理性という盾でもって相違を生じないところの均衡が必要なのであるが、感情あるいは理性のいずれかの破綻によってバランスが崩れ、怒濤の様に人間生活上の行動によってそれらを行わしてしまう。それらの過に走ったものが生命の乱獲、無軌道な行動である。そうした折に、未だ精神的発達の途上にあつて完成に到達していない青少年少女層とか、一部の成人層に人間の内部に秘められた動物的本能的欲望の心をよ

位な勉強態度とも私にはうけとれる。（一部には、学校というものに追従して稀少価値的存在の人物もいるが……）そこで私が理想論としてかかげることは、英才教育の徹底ということである。

人間の生来からの能力は各人まちまちである。その内の一つの能力をひきだし、のぼし、役立たせるのがその趣旨である。幼少の頃より英才あつて、手ほどきをうけているのは現在でも広々に見えてみうけられるが、他に成人後の生活迄引継けられる才能をのぼした例は、あまり見られないのが現状である。そこで私の具体案として、満六才頃迄は現在の保育園、幼稚園制度で結構であると思うが、それ以後はあまりにも現今の教育方針内容は頼りにならないから、七八才頃の期間は小学校的な広い知識能力教育、そしてその判定を下し、九才から自己にあつた勉強方針をひき出すように努力するのである。十二才（現在六年生）の頃は、もう一人前に物事をいったりするが、反面精神的影響をうけやすい。そこで英才教育方針として、職業学校を、音楽、絵画学校を、家庭学校を、数理学校、政治学校等々、あらゆる才能の分野に亘って、教育方法として学校制度にして、十二才〜十八才迄をその期間としたらどうかであろうか。又、今の大学制度は専攻制度で特別な才能が、さらに秀いでいる者を教育するようにしたら……、その前提として社会福祉、保障は国庫をして施し、安定した生活をさせるのは必須条件である。その英才教育の結果はどうであろうか。現今の教育の結果をしっかりとっている者は、大いなる驚異。それに続く歓喜の声をあげるに違いない。それらの分野で学者が、技術者が、芸術家が世界的に名声をはすに異論があるうか。しかしその才能教育にもつねに社会の動きに順応

びざまし、あおりたてる雑誌、新聞、映画、T・V等々のエログロ化、はてはスリラーブーム、ガンブーム、これでもか、これでもかと巷に氾濫させて、自己のふところをあたためるガメツイ業者、こういう業者に対しては憤りを感じるのみならず、断乎として斗わねばならない。そうした業者が一扫されることが早く実現されるのを望み主張するものである。だがよく考えてみると、それだけでいいだろうか。否、足りないことがある。教育である。悪徳業者がいなくてもその人間形成の要素である教育が墮落していたのでは砂上の楼閣にすぎない。

現今の教育。それらは墮落に徹している。例として生徒にたずねてみるとうしよ。

小学生は答えて曰く「……先生がいるから。」「楽しいから……。」

中学生A曰く「卒業しなくちゃなんないよ。義務教育だもの。」

中学生B曰く「高校に入るための通学サ。」

高校一年「どうしてって、大学に入るため就職する為。楽しいっていうこともね。」

高校二年a「大学に入る為。就職するため。ムツツリ」

同じくb「歩いてゆくさ。」

高校三年「アア、うるせえな！ そんなこときくのは、やばだぜ。」

「問答無用。」

以上は高校生迄の年令層にインタビューしたものであります。精神年令の発達段階のどれにもわたっていえることは、教育本来の本質というものが失われているということである。あまりにも自己本

した常識というものはうえつけさせるのは勿論のことである。世界的に日本人が名声をはす、そこに日本再興の、日本人に基因する愛国心が自から湧き上り完成された理性と才能をもつ各人による安泰した国政が施行され一人たりとも見つけていないものはなくなるであろう、しかし——私は理想論としてこの英才教育なるものが果して実現するかどうかを疑う段階に入ると嘆息以外のなものでもないのである。現在の政治が続行されるであろう。

一分野の者は榮盛を誇るであろう。

生活不安定なものは人間社会というものをなげかわしく思うだろう。そんな不平等があつてはならないのは、当然であるにも拘らず不履行いや不可能としているのは納得がいかない！

あえて私は叫ぶ！ 施政の大革新を！



創作

友へのたより

二年 高井 一枝

今日は医師からの許しができましたので久し振りにお便りをだします。

十日間も雪山を駆巡るなんて、枯れはてた木々の中に横たわって寒々とした海を見ている私にとって、まったく夢のようで美しい限りです。今年は貴女にとって、高校生活最後の年、心ゆくまで青春を味わって下さい。

私の短い高校生活は、余りにもあつけないものではありませんが、青春という名にふさわしい気がします。この短い期間に私の青春のあらゆる思い出が含まれている様に思います。たとえこの後、雪山を駆回る機会に恵まれたとしても、あの日あの時のように純粋な情熱を身辺すべてのものに燃えさせたなどということは出来ないでしょう。

スクリーンに心を奪われ、ロマネスクの世界を徘徊し、音の作り出すファンタジーに包まれて感動の熱い涙を流す。「ウェルテル」

電車がホームに入り、人々は等間隔に並び、そして吸い込まれた。

(一)

子供連れの婦人、本を読んでいる男女、学生、その他いろいろな人で座席は満たされていた。私はきついながらも座る事が出来た。最後の試験の時間割を思い出してみた。(後一日か、えーと。)つり皮を見ながら、頭を捻ってみる。いつもなら、外の景色を今日は変った所がないかと捜したり、遠くを眺めて近視でも直そうか、朝隠して来たお菓子は見つけれられたかななどと、思えばくだらない事に、頭を捻っているのだが。

つり皮が不規則に揺れたので、募って来た考えが崩された。「残念」思わず口に出してしまった。その声が大きかったらしく、回りの人が、私に目をそそいだ。私は顔が少しほてった。何人かがばらばらと降りて行った。そして何人かが乗り込んで来た。少し混んで来た。私は老人に席をゆずろうとして見わたした。その時、細く美しい人の大きな目と合った。私は、はっとした。女の人は、少し微笑みながら、私の前に立った。桑原和美だった。白茶の地にこげ茶の格子のオーバー、大きなエリから、真黒なセーターがのぞいている。髪は長く少し茶色に染めている。顔は前よりやつれて見えた。私の一番好きだった、大きな目は、以前のままだにキラキラして美しかった。「信ちゃん、学校はこちらだったの？」

「ええ、R高校です。(お姉様じゃないんだわ) 和美さんのお家は、どちらですか？」

「あら御存知なかった？ 下北沢なのよ。久美ちゃんが、時々遊びにくるのよ。信ちゃんもいらっしやいな。マカロニサラダを沢山ご

は甘い悩みを撒散らし、「熱情ソナタ」は秘めたる情熱の激しさと美しさを高らかに奏でました。この熱情を知ったときの感動はなんと素晴しかったでしょう。この感激、この陶醉、そしてこの歓喜こそ「永遠の情熱」を求めて放浪の旅を続けているのです。対象の完からぬ愛に身を置き、あるときは憂愁にあるときは快活に身を委ねて、春の川辺に愁ひ、夏の山々を駆け巡り、秋の森をさ迷い歩く、何と甘美なる怠惰、何と純粋なる放埒、そして、何と汚れなき情熱だったでしょう。「青春は美わし」まさにその通りです。

雪山を駆巡る。いつか私もあの思い出の山々を徘徊い歩きたいです。しかし、それも私にとってはいつの日か。

午後の休養時間です。いつも快く響く足音が近づいて来ました。今年の便りはきつと若芽が出てくるころでしょう。

制 欲

二年 佐々木 幸

(一)

明大前のホームには多くの学生がいた。五、六人の生徒達のグループが、ところ／＼に、二人でこそ／＼話し合っている者、一人ぼつんと立っている者等、試験最中である此の頃のホームの情景である。私は柱にもたれて立っていた。それ／＼の生徒が、大声で話し、解答し合っているそれを、自分の答案用紙に当てはめて、心の中で、ドキッとしたり、喜んだりしていた。

ちそうするわ。」

「どうもありがとうございます。」

話がとぎれた。友達と話していても有る事だが、今はこの間が非常につらく胸苦しく感じられる。どうしてだろう……。

「勇さん、お元気。」和美も和美で、耐えられないで口を切った。

「ええ。」何もなかったかの様に、少し微笑を加えて……。それが精一杯の答だった。これ以上話しを進めて行くには、とても耐える事が出来ないかと思っていた。折良く、電車は下北沢のホームに入った。

「それじゃ、勇さんによろしくね。信子ちゃんも遊びに来てね。」和美は静かに言い置いて、ホームに降りて行った。その後姿を見つめた。ある場合が映画の様に写って来た。

(二)

それは勇の部屋だった。うぐいす色のジュエタンが敷いてある。本箱、机、いす、整理ダンス、ベッド、電膏、そういった大道具が、ボン／＼と置かれてある。細々としたかさりのない殺風景な部屋である。お菓子と紅茶を持って行くために階段を登って行くと、軽いワルツが流れて来た。勇が和美にダンスを教えてもらっている所なのだろう。

「いらっしやい。」

「信ちゃん、こんにちわ。」和美はおどろきながら言った。

キラキラと光る大きな目は実に楽しげである。「兄さんおどれるの？ 足ばかり踏んでいるんじゃない？」 和美さんも御苦労さま。「本当に覚えがわるくて。」和美もからかった。

無口の勇は、口をほころばせて、少し赤くなった。がこれも楽しそうな様子である。(適当なものだな) と思いながらもうれしかった。

(和美さんみたいなお姉さんがほしい) いつもそんな気持ちでいる私だった。

勇の机の中に、いろいろな色のガラス玉が、いくつも輪になっているイヤリングが入っていたのを見た。

が、昨年の秋に、彼女は黒木という、会社員の人と結婚をしたのである。さみしかった。まさか兄と結婚するとは思っていなかった私だったが……。

(四)

電車は渋谷駅に着いた。

(五)

「ただいま。」

「お帰り、試験はどうだった。出来た？」

いつもいそがしそうな母である。「うん。」気がぬけた返事を残して、さっさと、自分の部屋に入った。オルゴールのふたを開けた。

大好きなうす紫色のあじさいの造花が一輪。和美にももらったものだった。枯葉の曲が鳴っている。

「和美さんは、この花の様だ。この花は私の大好きな花、和美さんは大好きな人、和美さんは大人。大人は大人としてのいろいろな問題がある。黒木さんという人の所へ嫁に行ったのも大人だから、和美さんは女の人だから、嫁に行くのよ。」

一言、一言、花に言い聞かせた。言い終るとこの解決感、私の心

を晴々としたものに、変化させた。と、とたんに、試験ノ、今の今まで、試験から頭が離れていた。スポッと頭に取び込んで来た。しかし、恐さ、つらさは生じなかった。「明日でおわりノ、ガンバルぞ！」

醜男の記録

二年 甘木貞子

俺は醜男である。名前は木崎かおる。この名前は俺が嫌いなもの一つである。皆は俺の前で平然と「お前の名前、どう考えても顔と一致しないな。」なんて言って、しげ／＼と俺の顔を見る。ちえつ、ばかにしてやがる。誰も俺の事を「木崎」とは呼んでくれない。「テサキ、テサキ」と呼ぶ。「バカヤロウ、俺は誰の手先でもないぞ。」と叫びたくなる。しかし俺は叫ばない。いや、叫び得ないのである。うっかり叫べば、ただ皆が笑うだけである。

俺は祖父の鼻をうけついで。人並よりいくらか、いや大部低く、面積が横に広くて、鼻先が半円形になっているのだ。小さい頃はこれでも良かった。顔も小さく鼻も目立たなかったから、それにかえって愛嬌があると、自惚れていたくらいである。唇は分厚く、歯はバラ／＼で、でっぱったり、ひっこんだり、これ等は俺の理想の女性(勿論性質が)、お袋ゆすりである。親爺からは毛虫の様な眉毛

とゴツ／＼にやせた真黒な顔と体である。俺の顔でいいところは無い。あえていえば、目であろう。二重まぶたの大きいうるんだ目である。俺は「太陽がいつばい」のフラン・ドロンばりのものであると思っているが、端から見ると、他の部分とあわないので、かえって変に見えるらしい。もう一つ、顔の一部分に醜い部分があるが、それはやめておこう。髪がバサバサなので「山嵐」というあだ名もある。「坊ちゃん」から、とったのであろうか。

俺は高校へ入ってすぐに、剣道部に入った。これは俺にぴったりだった。嫌な顔はかくれるし、一人で練習できるし、家でも木を相手にできた。俺は運動なら、かたっぱしから手をつけた。中学時代は野球・ラグビー・サッカー。高校に入ってバスケット・卓球・柔道、そしてやっと落着いたのが、高一の夏休みからやり始めた剣道である。寒中ゲイコは夏のけいこよりつらいが、それだけにやりがいがある。今になって、ちよつとの間に、よくこれだけの運動に手を出したものだと思う。一つ所に落ちていられないのと、自分を試すつもり、——すなわち、この俺の醜い顔を皆に見せるために——である。さらけものにして皆の冷たい嘲笑を受け、俺がいかにそれに耐えられるか慣れることが出来るか試すつもりであったのである。

「ウオー」俺は野獣のような声を出して先輩の河北さんに向っていた。「バシッ」と次の瞬間は、もう河北さんの竹刀に受けとめられ、あつという間に一本とられてしまった。俺は河北さんにスキがあるのを見て、思い切った「こて」に入った。しかし、又受けとめられたので、すばやく、元の姿勢にもどろうとしたが、その時はもう、

面を受たれていた。「山嵐！ 大分上達したな。二本目の時は、ヒヤッとしたぞ。だが、まだ／＼だな。一本とられてから二本目に入る時、少し躊躇というか、恐れというかなものがあるから、後の一本は取りそなったんだな。怖がってたら駄目だ。どん／＼かかって来い。」いつに似合わず河北さんの口調は強かった。いつもだったら、批判はおろか、はめてくれた事など、ただの一度だってない。俺は真妙な顔をして「はい」と言った。丁度、八時二十五分の子鈴がなったので、俺達は空振りを五十回やって終りにした。放課後部屋に行つて着替えていると、河北さんと女生徒の話し声が聞えてきた。

「私、中学二年の時、しばらくやっていたんですけど、高校になったら、入りずらくて……」

「男子ばかりだから？」

「ええ、中学の時は、女子が四人程入っていましたから。」

「へえー、女子が四人も！」

「……………」

「どこの中学？」

「埼玉の多川中学です。」

「埼玉か、東京には剣道部に女子がいる中学なんて殊んどないもんな。」

「女子でも入れてもらえますか。」

「ああ、いいですよ、でも他の部員とも相談してみないと……。」

「お願いします。」

「女子とても容赦はしませんよ。」

「わかっています。」

「ちょっと待って下さい。」

河北さんはそこで話を打ち切ると、部屋に入ってきた。

「おい、みんな……」

「先輩、全部聞えちゃった。スママセン。」

「一Cの島村由美子って、お前のクラスじゃないか？」
大声で長谷州が俺に言った。

「うん」

俺は元氣のない返事をした。彼女は確かに俺のクラスだ。俺は一度も、話したことがない。一年の男子の間では、指折りの人気者の一人であった。勉強も出来、クラスの間ではちょっと高慢のところがあるという評判だった。が、みんな別にそれを厭がっている様子もなかった。しかし俺は、彼女に反感を持っていた。彼女の容姿端麗な事、人一倍人気者である由縁である。俺のそなえていない所は皆そなえていやる。そして俺が持っている運動神経や、勉強方面での優越感も皆持っている。その上、俺の好きな剣道まで足をつこんでくるのかと考えたら、憎らしくてたまらなくなり、俺は急いで着替えると、体育館に通じる方に走って行った。島村由美子が居るのとは反対の方に……。

「オイ、山嵐、相談中だ。オイ」

俺は立ち止ってふり向いた。

「先輩、俺は反対です。」

気がむしゃくしゃするので、そう言って体育館の裏の方へ行った。体育館の裏は西日があたっていて暖かそうだったが、冷たい風が、

目にしみる程だった。

俺は島村が剣道部に入った事を友人から聞いた。それは、あの日から丁度五日目だった。俺はあれ以来、一度も部に行かなかった。教室でも、彼女の顔を見ないようにした。故意にさけていたのであった。理由は自分でもわからなかった。

昼休み体育館に行くと、河北さんに会った。

「山嵐、どうした。病気だったのか？全然来なかったじゃないか。明日の朝、いつもより三十分早く始めるから来いよ。」

そう言って、河北さんは行ってしまった。俺は考えた。普通より三十分早い事は七時から練習を始めるということだ。俺は、島村が、そんなに早くは来ないであろうと予想して、明朝は行くことにした。

六時四十五分頃、部屋に行くと、まだ誰も来ていなかった。俺はゆっくり着替えて行こうとすると誰かがやって来た。島村であった。彼女は、もう着替えていた。

「おはようございます。」

「……………」

「今度新しく入ったんです。よろしくお願いします。」

俺は黙って出て行った。彼女は、やつぎばやに俺に質問してきた。

「剣道はどの位やったの？」「中学は？」「剣道、面白い？」俺はどの質問にも答えなかった。彼女は最後に一言、「寒いわね」と言っていて、黙ってしまった。俺は空振り百回やった。彼女もやっていった。それがすむと島村は、俺に、「お願いします。」と言って来た。俺はむっとしたが黙って竹刀を持ち直した。彼女は思ったより強か

まともにあたるので、ブル／＼ふるえてしまった。俺は草の上に腰をおろした。わけもなく涙がポロポロとこぼれてきた。

——俺が泣いたのは物心ついてから、これで二度目である。一度は小学校二年の時、俺の幼な友達の子が死んだ時である。

彼女は髪をかり上げにして、いつも大きい目をくる／＼良く動かしていた。同学年であったが彼女の方が小さいので、兄妹のようにして遊んでいた。兄貴は五年であったが、国立の附属中学に行くために家庭教師をつけて勉強中だった。俺は子供心に兄貴を可哀想だなと思っていた。

それは五月四日で翌日は子供の日で御馳走をして遊ぶことになっていた。二人で鬼ごっこをしていた。俺が鬼で彼女を探していた。

「かおちゃん、ここよ、ここよ」

という声と同時に、俺の目の前のトラックが突然動き出し、トラックの後に隠れていた彼女は、俺の目の前で、そうだ、俺の目の前より二メートルと離れていない所で、彼女はひかれたのである。俺はしばらく呆然としてしまった。

どの位時間がたっただろうか。人々がガヤ／＼言って集まってきた。その中にお袋の顔を見て、俺はとたんにワアツと泣きだした。俺はどこをどう歩いたかわからないうちに、二人で良く遊んだ物置に入っていた。俺は一人になると急に怖くなった。俺が殺したんだ、俺が殺したんだと思った。

しかし今日は本当にどうして涙が出たのかわからなかった。俺はその日、とう／＼剣道をやらずに帰った。夕焼けがすごくきれいで、

った。こっちが一本とると、彼女が一本とった。俺達は汗をびっしょりかいて竹刀を振りまわしていた。いつの間にか先輩や、長谷川、太田、松山などが俺達の練習を見ていた。俺はそれに気がくたびたつと練習をやめた。彼女もやめた。河北さんが島村に向かって「五分々々だな、思っていたより、なかなかいいですね。」と言った。彼女は黙って下を向いていた。

「山嵐、おち／＼していると、追い抜かれるぞ。」河北さんは俺にそう言って笑った。俺は早く来たのを後悔した。

翌朝、俺は早く行くまいと、心に誓ったが、六時になるとどうしても制する事が出来ず、又早く行った。そして彼女と練習した。その次の朝も、その次の朝も俺達は練習した。

剣道部で俺達の事は評判になった。という事は、一年の大部分の男子が知っている事になる。だが俺達は、最初の日以来一言も喋っていない。俺は彼女が俺に好意を持ってくれていると思った。俺は彼女を好きになっていたのだ。以前持っていた反感は、彼女を思う俺の心がそれと反対に動いたためであった。俺は自分の行動に、自分で理由をつけ、一人で納得していた。俺は相談したくとも、友らしい友が、一人もないのを知った。俺は考えに考えた。

俺は、あれから一ヶ月半たったある日、いつものように朝早く学校に行った。しかし、いつもの時間に島村由美子は来なかった。十分程して彼女は河北さんと一緒に楽しそうに話しながら来た。俺はびっくりしたが素知らぬ顔をした。彼女は俺の顔をチラツと見ただけであった。俺は胸騒ぎを感じた。ざわ／＼と心の中で木々が揺れるのをとめることは出来なかった。河北さんが教室にカバンを置きに

行った。その間に俺は、彼女に対する感情を押えることが出来なかった。

「島村さん、俺と友達になってくれ。頼む、頼むから友達になってくれ。」

彼女は始め、びくつきしていたが、やがて、あざけり笑うようにカン高い声で「鏡と相談なさったらいかが？」俺は今迄の気持が全部ふっとんでしまった。俺は忘れていたのだ。自分の顔が、すっかり脳裡から去っていたのだ。俺の顔は、いつも剣道の時の面をかぶっていたのであった。俺は彼女の顔を穴のあく程、ジッと見つめた。皮肉な笑いをうかべた彼女の顔から、血の気がひいて、だん／＼恐怖の影が広まっていくのがわかった。俺は、首をしめたい衝動を、やっとの思いでこらえた。そして彼女の顔に平手打をくわして室を出ようとする河北さんが入って来た。

「先輩、退部させてもらいます。」

俺は後もふり返らずに学校を出ていった。そうだ、彼女は河北さんが目的で入ってきたのだ。こんな言い方はキザかも知れないが、本当にその通りなんだ。島村なんかには、この言葉がびつたりだ。河北さんは二年組のホープだった。剣道も学校で一番だし、将来有望の折紙がついていた。俺は、この時程、神を、父母をうらめしく思った事はなかった。俺の顔は、涙でくしゃ／＼だった。道行く人皆が俺の顔を見るので、全然人通りのない屋敷町を通過して浄水場の土手を歩いた。俺はこの事に耐えなければならぬと心にいい聞かせた。俺は考えた。この痛手のはけ口を、どこに持って行くかだ。俺は悪の道には入りたくないと思った。運動に全力を注ぐには剣道部

た。なんだか自分もえらい王子様の気分がしてきました。健太は胸をはって歩き出しました。

やがて月が出て来ました。その光は、道のあちこちにちらばっている小石を、白く浮き上らせました。健太は歩きながら、とびきり白くきら／＼光っている小石を蹴りました。

「いたい。」

小石は、斜め前に、けれど大変のろくさと飛んで、月の光のあたらない草の根元に、黒い小さな影をつくって止まりました。健太は、薬で編んだ草履をはいていたのです。視指の先がびり／＼痛みました。健太は急に小石が憎くなりました。足元にちらばって沈黙している小石を二三つひろうと、思いきり遠くへ投げようと前方を見ました。その時、健太はぎょ／＼としてふり上げた手を下しました。何か白っぽい人影が、うすれかかった月の光の中で、ぼんやりと浮き上っているのです。その上、その白い影は、だん／＼こちらへ近づいてくる様でした。健太のびんをもっている手は汗ばんできました。健太は、二、三日前にお婆さんから話してもらった「雪女を思い出したのです。——雪の様に白い着物をきて、年とったきこりにフーッと真白い息を吹きかけて、ニヤツと笑いました。……次の日、年とったきこりは死んでいました。——健太は、その人影が、自分の方に近づいてきて殺そうとしているのだと思いました。逃げようか、健太はそう思いましたが、逃げれば追いかけて来るだろうと考えると、身動きが出来なくなりました。白い影は、ゆっくり健太の方に近づいてきました。健太はそのまま、ずっと見つめていま

をやめたので、やる事がなかった。そうだ、俺には勉強がある。勉強は、美男であろうと醜男であろうと区別をしない。俺は勉強によつて島村由美子に、そして河北正則に仕返しをする事を自分自身に誓った。

空は果てしなく広がっていた

子供と大人の話 — その一 —

三年 清水 珠 美

ある月の夜

その時、月は雲に隠れていました。風は少し吹いていました。健太は鼻水をす／＼り上げながら、暗い道を一生懸命歩いていました。

「寒いよ。寒いよ。」

健太はお婆さんに縫ってもらった、筒袖の丈の短かい着物を着ていました。そして片手に、お酒のびんをかかえる様子で歩いていました。

「寒いけど平気だ。強いんだもん。」

健太は、際立って輝やいている、一つの星を見つめながら歩いていた。健太の頭の上で、ほほえみながら、どこまでもついてくるので愉快になってきました。まばらに、黒い影をおとして、建っている家の軒に隠れてみました。そして、まだ星が自分の後についてきたかどうか、そっと空を見上げました。その星は、健太が顔を空に向けるたびに明るく笑いかけてました。前に絵本で見た、西洋の王子様が星を見ている場面を思い出して、クス／＼笑ってしまいました。

その人影は、健太の二、三日前で立ちどまりました。

「坊や、」

健太の大きく鼓動している心臓は突然止まりました。が、その声が大変静かでやさしく感じられたので、少し安心しました。少くとも自分を殺そうとしているのではないなと思ったのです。健太は恐る恐るその人を見つめました。非常に瘦せて、青白い顔に、力なく大きな黒い瞳がみひらかれていました。秋の深まったというのに、薄い水色の着物の上には、羽織もコートも襟巻もしていませんでした。

「ねえ、坊や、」

その声は消え入りそうに小さくなりました。健太は、この女の人がなにかひどくかわいそうになりました。

「ねえ、坊や。この辺漁村でしょ。海はどっちの方向かしら。」

「あっちの方。」

健太は、自分がいま来た方向を指し示しました。女の人は、じっとその方向をみつめていました。健太はさびしうにしている女の人の優しい言葉をかけてあげたくなりました。

「寒くないの？」

女の人は、ちょっと驚いた様な顔をして健太の方を見ましたが、すぐに笑顔をつくって大げさな身振りで頭をふりました。健太は、先刻自分が恐れていた事が不思議なくらい、女の人に視しを感じていました。

「坊や、なんてお名前？」

「うん、健太っていうんだ。」

「どこへ行くの。」

「父ちゃんのお酒買いに。」

「まあ、街まで相当あるのに。」

月が異様に明るく女の人の顔を照らし出しました。光沢をもった黒く波うって、肩までもある髪の毛に、健太はもとれていました。

「ねえ、健ちゃん、お姉さんと少しお話ししない？」

「うん。」

健太はうれしくなって座る所がないものかとあたりを見回しました。何メートルか先に、松が何本か、まばらに立っている中に、人が座るに手頃な木が横たわっているのを見つけました。

「寒くない？」

「うん。」

「健ちゃん、おいくつ？」

「七つ。」

女の人はしばらくくたまったまま、じっと空を見つめていました。そして、突然なにか決心した様な顔を健太に向けました。

「ねえ、健ちゃん。」

「うん？」

「お姉さん、いいお話ししてあげましょうか。」

「どんな話？」

「童話なの。ある所に、それはそれは美しい心のやさしいお姫様が住んでいました。王様もお姫様も、そのお姫様を、とても可愛がって育てました。」

女の人の顔は、月の光を浴びて驚ろくほど白く闇に浮かび上っている

もその時間は、魔法使いは留守でしたし、息子はお酒を飲んで昼寝していました。……お姫様は王子様を大変好きになりました。王子様の方も、お姫様を好きになりました。……わかる？」
熱心に聞き入っていた健太は、急に顔をのぞき込まれて、頭に血が上った様に熱くなりました。そしてあわてて答えました。

「う、うん。」

女の人はおかしように小さな声をたてて笑いました。健太はなんだか恥かしくなってきました。女の人は又静かに話しました。

「その二人は、ついに逃げる約束をしました。その日はいつもの様に魔法使いは留守で、息子はぐすりねむっていました。王子様は用意の縄梯子をかけて、無事にお姫様をすくい出しましたが、残念な事はあの魔法使いが帰ってくるのが見えただけです。二人は白馬にとびのって逃げました。それに気付いた魔法使いと、その息子は追って来ました。飲まず食わずで逃げました。いくつもの国を越えました。白馬が大変速かったので、追いつかれずにすみしました。二人はつかれた足をひきずってある町の安宿に泊りました。しかし、二人は少ししかお金を持っていなかったのです。次の朝、王子様は大切な白馬をつれて、お金をつくりに行きました。いつまでたっても王子様がもどらないので、お姫様はどうしてよいか迷ってしまいました。町の人のうわさによると若い男が白馬をつれて、二度と再びもどれない森の中に入っていくのを見た人が何人かいるというのです。お姫様は、不吉な予感がしました。そして、それを信じないわけにはいきませんでした。なぜなら、王子様は何日までもお姫様の前に姿をあらわす事がなかったのです。少ないお金も使いはたし

ました。健太は一言一言をかみしめる様に、一生懸命聞いていました。遠くで、かすかに波のよせる、ザザーという音が聞えたように思いました。

「お姫様が十八になった時、大へん醜い魔法使いにさらわれてしまいました。王様とお姫様は、とっても悲しんで、ついに病気になるって死んでしまったのです。」

女の人はそこで言葉を切り、目を伏せました。健太は不思議に思っ

て、女の人をじっとみつめました。女の方はそんな健太に気がついて再び静かな声で話しはじめました。

「意地悪な魔法使いの為に、お姫様は高い塔の上にとじ込められてしまいました。お姫様は毎日々々、泣いてくらししました。何年かたったある時、塔の下で立派な王子様が狩りをなさっている姿を見かけました。お姫様は、すみ渡った空の下、ひろくした野原を思い切り歩いてみたいと思うと、いてもたってもいられない気持ちで、そしてその王子様が羨ましくてたまらなかった。どうかして逃がたいものだと思いましたが、意地悪なお婆さんがきびしく見張っているの、どうする事も出来ませんでした。その上、お婆さんの息子が、お姫様を自分のお嫁にしようといつでもつきまとっていました。お姫様は、心からお婆さんと息子を憎みました。女の人はじっと空を見つめたままの姿勢で話しつづけてました。

「秋風がさびしく吹きはじめると、いつもの様にお姫様は塔から外を見ていました。すると、あの立派な王子様がやって来ました。初めて見た日から、晴れた日は毎日の様に塔の下にやって来て、お姫様に励ましの言葉とやさしさに満ちた笑顔を送っていました。いつ

たお姫様は、宿屋から出なければなりません。そこで、今さらにお金の貴重な事を知ったのです。お姫様は全く困ってしまいました。王子様が行ったきり帰ってこない森へ行こうともしました。が、なつかしい、自分がよく遊んだ清い冷たい湖へ帰ろうと思いました。疲れはてた体にむち打って歩き続けました。お姫様は、ついになつかしいその湖をみつめました。女の人はじっと考え込むように身動き一つしないで空を見上げていました。月が雲に隠れ、あたりは目にみえて薄暗くなりました。健太はすぐ、となりに座っている女の人の肩が、小刻みに震えているのを感じました。薄墨を流した様な空気の中で、二つの黒い影は沈黙していました。健太は、その先が大変気がかりになったので、そっと聞いてみました。

「そして湖を見つけた女の人はどうしたの？」

女の人は黙っていましたがしばらくすると消え入りそうな声で答えました。

「お姫様の両視のいる美しい国へ行ってしまうの。……湖の中にある美しい国へ。」

健太は何だかとても悲しくなりました。女の方は大きなため息をつくと、地面に顔を向けて寒そうに震えだしました。

「お姉ちゃん、お姉ちゃんの家貧乏なの？」女の方は静かに健太の方に顔を向けました。薄暗い闇で、白い顔はちょっと笑いました。

「そう、貧乏よ。お姫様の様にね。」

健太はこの女の方が一層かわいそうになりました。健太は着物の懐に手を入れると赤い布でつくった小さな袋を取り出しました。それは、首からひもでつてありました。健太はそれを首からはずし

て、女の人に言いました。

「見てごらん。」

健太は得意そうに袋のひもを解きました。汚れた小さな手のひらで、一枚の百円玉と数枚の十円玉が、雲から出かけた月の中に照らされて、きら／＼光りました。そして、それを袋にもどすと女の人にさし出しました。

「これ、お酒のお金なの。けど、お姉ちゃんにやる。」

女の人は驚いた様子で、しばらく健太の顔をみつめていました。そして、かすかに首をふりました。

「いいのよ。健ちゃん困るから。」

健太は、このかわいそうな女の人に、どうしてもお金をあげたくありませんでした。健太は手をさし出したまゝ、女の人の顔と袋をかわるがわる見くらべていました。

「健ちゃん、本当にありがとう。いただくわ。」女の人は笑顔をつくり、白い手をさし出して、それを受け取りました。健太はひどくうれしくなりました。

「健ちゃん、お姫様のお話まだまだ続くのよ。」

女の人は健太の方に顔を真すぐに向けたまま話し始めました。大きな瞳がきら／＼輝いていました「実は、お姫様は湖の美しい国には行かないのよ。湖へ行く途中、それはそれは可愛いエンゼルに会った。心のやさしい天使にね。その天使は、弱いお姫様を励まして、贈り物を与えるのよ。すばらしい贈り物、それは、『まごころ』といって、人間には一番大切なものの。お姫様は、自分が弱すぎる事に気づいたわ。そして強く強く生きようと決心するの。」

た細い雨と、今朝のわずかに下りた霜で、ぐちゃ／＼になった土の中で、腐りかけていました。そんな風景を、絶えず目にはたきながら眺めていたお婆さんは、ちょっと寂しくなりました。

「婆ちゃん、いるか。」

寂高い女の子の声が、あたりの静けさを破りました。

「あゝ、ヤッコちゃん、ここだ。」

お婆さんの顔は、晴ればれじい笑顔に変わりました。

「ここだ。縁側だよ。」

五つくらいの子とお婆さんは、並んで縁側に腰をかけていました。

「ほうヤッコちゃん、髪にいいもんつけてるな。」

「うん、赤い蝶々だよ」

女の子は嬉しそうに、短かいオカッパ頭の髪の先にちょこんと結んである赤いリボンにさわってみました。

「裏ん家の良子姉ちゃんが、つけてくれた。」

「いいな。婆ちゃんもほしいな。」

「うん、つけないよ。」

女の子はすばやく立ち上りました。「母ちゃん、赤い布きれおくれよ。」

そういながら奥の方へかけて行きました。

白い頭と黒い頭に二匹の赤い蝶が仲良く並んでとまっています。

「ねえ、婆ちゃん、乞食ごっこしようよ。」

「昼飯食べてからな。」

女の人は、ゆっくり静かに、しかも力強く話しました。

「健ちゃん、ありがとう。あなたの事、一生忘れないわ。」

健太は女の人の動作の変わり様がよく理解出来なかったけれど、女の人が喜んでいと思うと、たまらなくなうれしくなりました。

「健ちゃん、お酒買いに行かなければ。」

女の人は、健太の手をとって、もと来た道へ歩きだしました。

月は雲から出ました。女の人と健太の影が細長く道路に映りました。あたりは全く静かでした。小さく、かすかに、波のうちよせる音が聞こえた様ですが、耳のせいでしょうか。

子供と大人の話 ―― その二 ――

お婆さん

「お婆ちゃんの古稀のお祝も、もうすぐだね。」

お婆さんがいつもの様に、仏壇の前で朝茶をすまっている、隣の部屋から、長男と、その嫁の話し声が聞こえて来ました。お婆さんは、還暦のお祝を終えてから九年もたっている事に気がつきました。熱いお茶は、ほんのりと乳色の柔らかい湯気をたてていました。お婆さんは、よいしょと腰をあげると、小春日和の弱々しい太陽の光が注がれている縁側に出てみました。背を丸めて、いつもタバコをふかしていたおじいさんの姿は、何年か前に消えてしまいました。お婆さんが若かった頃、庭に植えた柿の木が、今ではすっかり大きくなって、ひよろ長く、寒そうに立っていました。黄色くなつて、虫にくわれて地面に落ちてしまったその葉は、昨晚降り続い

「うん。」

その日は大変暖かでした。ボカボカと太陽の光が降る中を、お婆さんと女の子は、大きな風呂敷包を背負って田んぼ道を歩いていました。

「よう、ヤッコちゃんよう。どこへ行くんだね。」

野良着を着て、赤い顔をした男の人が笑いながら声をかけました。

「婆ちゃんと乞食ごっこするの。」

「ほう、婆ちゃんも、達者でいいなあ。」

男の人は笑いながら手をふって通りすぎて行きました。お婆さんは、本当に自分は丈夫だと思いました。

二人が着いた所は、狭い原っぱでした。隅には、さびているドラムカンが横たわっていました。女の子は風呂敷包をほどくと、ポール紙で作った四角で細長い物を取り出しました。

『ヤッコと婆ちゃんの乞食の家』そう書かれてある紙を、ドラムカンの上に上手に立てかけました。風呂敷包の中には、まだまだ沢山の物が入っていました。女の子はそれらを取り出すと、お婆さんにさしずをしながら、ドラムカンの中を飾りつけました。まず、小さな毛布を敷きました。

「冷えるといけないからう。」

お婆さんは丹念に毛布のシワをのばしました。

「婆ちゃん、春になったらな。タンポポの綿毛で、座ぶとん作ろうな。そしてお花を沢山摘んで、もっともっと、ここ、きれいにしよう。」

女の子は楽しそうに言いながら、二人の、毛糸で編んだ座ぶとんを

毛布の上に並べました。

「ねえ、婆ちゃん春になって、乾いた草、うんと集めて、ソファの大きいの作ろうよ、婆ちゃんきつと楽だよ。」

お婆さんは、女の子が言った様に、本当に春が待ち通しくなりました。今度はお婆さんの包みを開きました。割れかかったお椀を二つ取り出しました。この遊びのために、台所の隅に捨ててあったのをお婆さんがとっておいたのです。干し柿五つ（昨日のお八つ）焼いたじゃがいも数個（今日のお八つ）道々買った駄菓子、水筒につめた番茶、これが二人の乞食の食物の全部でした。二人は満足しながら食べました。

ドラムカンの外に、きちんと並べられてある下駄とわら草履、急に影がさしました。

あたりはだん／＼暗くなりました。女の子は腕時計を見ました。おもちのそれは、正確に三時を示したままになっていました。

「婆ちゃん、雨だよ。」

「こりゃ困った。大降りになるといけないから、早く帰ろうね。」二人はいそいで荷物をまとめました。予備の為に持ってきたビニールを、頭にかぶりました。

「ねえ、乞食は傘もっていないね。」

「もっている人もいるよ。だけど婆ちゃんとヤッコちゃん乞食は持っていないね。」

二人は田んぼ道を小走りに走りながら家へ急ぎました。女の子は、道々寒い／＼と歩いていました。

その夜から女の子は高い熱を出しました。女の子のお父さんとお

「うん。外は冷たいよ。」

女の子は言いながら、お婆さんの床にもぐりこみました。

「ねえ、婆ちゃん、老衰って、どういう事？」

お婆さんは急に言われたので、何と答えてよいか、わからなくなりました。

「雑炊とは、ちがうでしょ？」

「ヤッコちゃん、どこでそれを聞いたの？」

「うん、母ちゃんと近所のお婆さんと話してたの。婆ちゃんの事、老衰といってたよ。」

お婆さんは、心の中に冷たい風が吹き込んできたように、なんともいえない寂しい気持ちになりました。

年をとってね。だんだん体が弱くなってゆく事をいうんだよ。」

「ふうん。」

女の子は素直に聞いていました。

「そして、うんと弱って死んじゃうんだよ。」

「死んじゃうって？」

「おじいちゃんみたいに、ヤッコちゃんの前から消えてしまう事を言うのかも知れないよ。婆ちゃんにも、よくわからないよ。」

「そして、天国に行くんじゃない。」

「ほう、ヤッコちゃんは良く知ってるね。」

「うん、絵本でね。天使の絵も出てたよ。」

女の子は、お婆ちゃんの顔をみつめながら言いました。

「お婆ちゃん、ヤッコの前から、消えちゃいやだよ。」

「うん、消えないとさ。」

母さんは始終つきそって看護しました。お婆さんは、おとなしく女の子のふとんの側に座っていました。お婆さんも、少し寒けがすると思いましたが黙っていました。

女の子は二日ほどすると全く元気になりました。その日の朝、お婆さんは、体がだるくて床から起きる事が出来ませんでした。

その日から一週間たちましたが、床から離れる事が出来ませんでした。

「婆ちゃん、お医者さんこわかった？」

めつたに呼んだ事のない医者が帰った後、女の子はお婆さんの顔をのぞき込みながら言いました。

「こわかったぞ、こゝん所、ほれ、注射の跡だ。」

女の子は、とげをさして赤くなった跡がある手の指を見せて、笑いながら言いました。

「婆ちゃんと同じね。」

お婆さんもおかしくなって笑いましたが、女の子の丸々肥った赤いうでで、自分のシワクチャな腕と比べて、少し悲しくなっていました。

今年になって、初めて雪が降りました。お婆さんは、ガラス窓を通して、前の家のワラぶき屋根や、背の高い柿の木が白く化粧されている様を見ていました。突然女の子が勢いよく障子を開けて入ってきました。

「婆ちゃん、雪、きれいなね。」

女の子は、赤い毛糸の手袋と帽子をとりました。

「外へ行ってきたの？」

女の子は安心したような顔をして眠ってしまいました。お婆さんのほんやりした頭は、わけのわからない不安で、いっぱいになりました。今まで考えて見なかった事なのに、どうしてこう気になるのかしらん。もしかしたら自分は死ぬのかも知れない。お婆さんは、遠い遠い昔に、こんな事を真剣に考えたことがあったような気がしました。自分が死んだら親戚の人は来てくれるだろうか。きつと、おじいさんと同じようにお酒で体を清めてもらい、箱に寝せられるだろう。村の人達は、それを車に乗せて墓地へひいて行く。各々手に花をもったり、のほりをもったりして長い列をつくり、お祭のように、にぎやかだろう。きつと死んでも寂しい事はない。お婆さんは考えているうちに、頭が痛くなりました。そして、なんとなくめんどうにもなりました。お婆さんは、少し眠くなったので目を閉じました。お婆さんは夢を見ました。

箱に寝せられガラ／＼／

墓地へ行きますガラ／＼／

歌って下さいガラ／＼／

あれはいつかの子守歌

のほりもお花も歌います

私は墓地へまいります

皆んな歌ってガラ／＼／

お正月がだん／＼近づいて来ました。冷たい風が、電線を枯木をヒューと鳴らしました。そして、お婆さんが寝ている部屋にも、か

とが、その家いっばいに響いていました、

すかに入り込んで来ました。
「寒いいう。」

お婆さんはそういつて背を縮めました。お婆さんは、じっと目を閉じていました。

お婆さんの寝息は、非常に長い間隔をおいて、冷たい部屋の空気にとけていましたが、一吹の風が激しく部屋をゆすぶると、その間隔は全くとぎれてしまいました。

近所で、おもちつきの元気のよい音がしてきました。そして、それは、この冷たい部屋にも、お正月の匂いを運んで来ました。

「婆ちゃん、家も今日おもちつきだよ。」

女の子がうれしそうに飛びはねながら、部屋に入って来ました。
「婆ちゃん、早くお正月来るといいね。そしたらすぐ春だよ。乞食ごっこも楽しく出来るね。」

女の子は、だまったままでいるお婆さんの肩をゆすりしました。いくら起しても返事がないので少しさびしくなりました。

「婆ちゃん眠っちゃったの。」

その時、土間の方から大きな掛け声とともにおもちをつく音がしてきました。

「ヤッコちゃん、早く来いや。」

お父さんが女の子を呼びました。

「ハイ」

女の子は、大きな声で答えて、びよんびよんはねながら部屋から出て行きました。

べったん／＼おもちをつく音と、女の子のはしゃいでいる笑い声



る・くーるに寄せて

教諭 森 善 男

一年の総しめくくりともいうべきこの三月、又る・くーるの編集の時期がやってきた。

昨年十月松高十周年を迎えて校舎もすっかり完備し生徒も九百余の多きを数え一と昔の頃と較べると文字通り一段の飛躍発展をしてきた。

この輝かしい時期に元気で明るくそして楽しく勉学する諸君は実に幸福である。

このる・くーるは仏語で「心」という意味だそうだが、この機関誌を通じ諸君が平生考えていること、又思っていること等、心の中を思う存分開陳する又とないよい機会ではないかと思う。

そして皆で力を合わせてこの「心」を大きく立派に育てていこうではないか。

る・くーるに寄せて

教諭 大 島 信 六

一回発行のる・くーるに、今年も稿を寄せるときが来た。私のような文筆のヘタなものにとっては何んと早く月日が過ぎたかと感じ

られる。三年生は希望を胸に社会に進出する人、又受験で苦しんでいる人毎年卒業生を送っているがこの心境は何んと表現してよいかわ複雑なものがある。ただ各個人／＼夫々の希望が満たされて学窓を巣立つ事を心から祈ってやまない。在校生の二年生、一年生はこの一年を振り返って新しい学年に向ってよりよい学び舎に、運動に、勉学に楽しく明るく若人の血を燃やしてもらってもらいたいものである。

おさだまりな文で恐縮であるが卒業生、在校生の前途を祝福してこの稿を終ります。

教諭 関 恵

おめでとう。

社会に出ても学者者であるように。

高校生活を

思い出深きものに

教諭 保 高 由 利 江

小学校、中学校、高校そして大学と私の歩んできた学校生活を願

みて、一番その思い出を色取りどりに残してくれたのは、やはり高校時代であるような気がする。尤も私は、高校までの学校生活の殆どを長野県の松本で過して来たから、いささかの郷愁も手伝ってか、特にそこでの高校生活に一層の懐かしさが加えられて、快く呼び戻されるのであらう、あの校庭一つ思い浮がべただけでも、何か心暖まるものがえってくる。

私の高校時代と言っても、高校の予備校化などという言葉を聞くようになっていたから、左程遠い者のことではない。いつも勉強に追われ、落ち着いた頃にゆっくり遊ぼうかと思っていると、すぐに試験期がやって来て、また勉強せざるを得なくなってしまうという、どちらかと言うと、堅実な生活の繰り返しだった。しかし、私は私なりに、その中で愉快に跳ね廻った。今考えてみて、有益であり、楽しかったと思うのは、クラブ活動である。私は、主に音楽部で活躍して、年中、音楽会などの為に、忙しく練習に励んでいたことを覚えて、クラブの楽しさは、生徒たちが自主的に動いて研究し、自分と全体が一步一步向上して行き、また、その中で広く友達が出来ることである。他に、忘れない思い出として「コンパ」がある。試験の終わった後など、クラスやクラブでやる親睦会みたいなものである。私の高校は男子、系の学校で大部分が男の子であったから、こういう時の威勢の良さは、なか／＼大したものだった。御飯にしんのあるライスカレーや肉めしなるものを作って、きたないバケツに入れてきて食べたり、学校の屋上でスクラムを組んで「デカンショ」や応援歌などを夜遅くまで歌って、まるでお祭り騒ぎになったりした。こんなことが出来るのも、周りに人家のない田

舎ならではのことだが、今はその学校附近一帯に、アパートがぎっしり建てられてしまっていて、思う存分わめき散らすことも出来なくなつたようである。とに角、高校二年までこういう長閑な所で、高校生活の一応の苦勞と喜びを重ねて来たが、三年から東京の学校に入ることになって、最後の一年は不馴れなままに、ひたすら受験勉強に追われて終ってしまったことは、残念である。しかし、苦しんだ受験勉強や試験も、案外私には、スマートな思い出として残っているような気がする。

どうか、これから卒業して行く人達も、後になって高校時代を思い返した時、特にこの松高と結びついた心暖まる思い出が沢山蘇ってくることを願っている、私も教師として、少しでも生徒の皆さんにいつまでも快くよみがえってくる思い出を作ってもらいたいと思う。

忠言

教諭 玉置文子

人生の転機とは実に不可思議なものである。若乃花がまだかけ出しの頃、二所の関部屋で、琴ヶ浜と兄弟弟子であった。しかも二人とも稽古の割にはうだが上らず或る日二人で夜逃げを決め込み、まだ明けやらぬ中にこつそり抜け出して両国駅の近くまでやつと来たところ、先輩の力道山がオートバイでかけつけて、バカヤロウに一喝して部屋に連れ戻した。力道山に見送られて二人はほん然と、目覚めた云う。

今日、若乃花と云えば三才の幼児でさえ、その名を知らないものはない大横綱であり、一方琴ヶ浜は押しも押されもしない大関である。若しあの時弱音をはいて、すこ／＼角界を去っていたならば、このかがやかしい栄冠は永久に得られなかったであらうし、我々を場所毎に熱狂させる彼等の名も知られなくなってしまうであらう。

いかに、チャンスが眼前にブラ下つていても、『縁なき衆生は救い難し』（釈尊）と云われている様に、忠言を馬耳東風と受け流していたら果してどうなっていたであらう。

明治、大正、昭和の三代にわたり特異の風格があった元老政治家西園寺公は『匹夫匹婦の徒といえども善言うものあれば之を聞く。』と云うことを処世の信条とされたそうである。今日の言葉で云えば、たとえ相手がルンペンであらうと、とるにたらない人であらうと、忠言には素直に耳を傾けよう云うことであらう。学ぶべき言葉である。

教師と生徒

教諭 前田惟義

先日の校内弁論大会において、「本校の先生は寄りつきがたく、親しみにくい。」という意味のことがあった。これは、本校だけではなく、高校においてはよく聞かれることばである。

われわれ教師は、どんな目標を持って、日々の勤めにたずさわ

ているのだろうか。この松高を、誇るに値する、りっぱな学校にしたい、自分の教科を通じて、どこにもひけをとらぬ実力をつけ、進学率をあげたい、などがあげられる。これらはりっぱな目標ではあるが、もっと大切なことが忘れられてはいはないか。教師が、未来をはらむ、生き生きとした生徒という「人格」と、じかに触れあうことによって、生徒の個性が現在または将来、目を開く契機をつくり出す。そういった「魂と魂の触れあう」場を持つことが目標であるはずだ。即ち、生徒の個人個人が、「人間」として、より豊かにりっぱになることを念願しているのである。

今年のある賀状に「十幾年も御無沙汰致しておりますが、覚えていらつしやいますか、第一県女の頃動員時代、先生のクラスでございました。……」という、福岡からのものであった。私が広島第一高女に勤めていた昭和十七年ごろ教えた生徒で、姓も変っていて、こんな顔だろうか、あんな顔だろうかと思像してみるが、はつきりと思い浮かばなかった、又、先日二十六、七才の青年が学校の窓口にやってきて、「私を知っていますか」といわれ、顔は覚えがあるが、名前も、どこで教えたかも全くわからなかった。この青年は、終戦直後、大分県の竹田高校（当時は中学）で教えた生徒であることがわかった。このように記憶はうすらいでくるが、すぐまた、昔なつかしくよみがえってくる。本校に勤めてからも、二回、卒業生を出した。これら卒業生はあっても、かつて教室のどのへんに席があり、どんな悪い事をしたとか、どんな性質であったとか、不思議に良く覚えているものである。しかも、三十才過ぎた大人であつても、昔の生徒時代のままのものとして見る、悪い癖がある。

今年の卒業生が入学してきた時、私は一年A組のクラス担任であった。入学式がすんでAの控室で初めて話をした、その時の生徒が、あんなに大きくなったかと、先日のマラソン大会の時、途中審判をしながら、今さらのごとく感じたのであった。かつてのAの生徒の名前を見れば、その一人一人の三年間の歴史のこまが、次から次へと浮かんでくる。ときには彼らの父兄の顔までも現われてくる。授業での接触よりも、修学旅行とか、クラス対抗試合などにおける、生徒との接触の場合が妙に印象強く思い出されてくる。クラス担任をしてこそ、「教師である」という実感を味わうもので、大変な仕事ではあるが、またそこに教師の喜びがある。

過去の教育生活において、年若く、死んだ生徒・退学した生徒・事故をおこした生徒・父に死なれた生徒・病気に臥した生徒などが浮んでくる。一流大学に入学したとか、成績がよかったとかいうことは、喜ばしいことにはちがいがいが、それよりも、かわいそうな生徒、問題をおこした生徒のことが、いつまでも気がかりになって、脳裏に残っているものである。日本のどこかで、健康で幸福に、平凡な生活であっても堅実に暮らしてもらいたい。別にクラス会を開かなくても、便りをくれなくてもよい。困った時には、何かのお役に立たせてもらいたい。

生徒諸君は、「冷たい、あたたかさがない。」という。朝でもこちらから先に礼をしたら、やさしくことばをかけてやったら、などと思わないではない。クラス担任でなくても、つとめて親身になってやり、あたたかく指導すべきである。外見は冷たく見えても「生徒を思わない」教師はないはずだ。諸君も積極的にぶつかってきてもら

いたい。近視眼的に見ないで、長い目で見てもらいたい。「教師」としてよりも「人間」として交りたい。よかれあしかれ、師弟の「えにし」は結ばれているのだ。お互いがよく話しあい、是は是とし、非は非として、寛容の気持を持ち、共に誠実に生きたい。孟子は、「天下の英才を得て、これを教育するのは、三の楽しみなり。」と述べているが「英才を」とか「英才に」なんかを望むのではない。教師のはきすてたことばや、無造作の行動・態度などを、つか、どこかで思い出し、その中にとるべきものがあれば、自己を豊かにする「よすが」ともされ人間らしい人間として生きていけることを、教師はただ、ひそかに願うのみである。

山の寮の建つまで

教諭 長 沢 久 敏

一、たかねの花

昨年はわが松高も創立十周年を迎え、生徒ホールと山の寮の二つの記念すべき建築が完成して学園の面目を一新した観があるが、そのうち後者、山田温泉の学校寮はどのようにして出来たか―編集部からの注文であるので、その経過を報告することにする。

わが松高にも、古い歴史をもった他校が山や海に経営しているような寮施設が欲しいものだという声はかねてからあった。しかし創立来日も浅い松高にしても見れば、これ迄は主屋たる校舎の整備で既に手一つばいで、云わば別荘である寮の建設など、しよせん

は「たかねの花」と見送られて来たのであったが、はからずも創立十周年記念事業の一つとしてPTAによって、われらのかねての宿願がにわかにかなえられ、「たかねの花」の一本をわが庭の花とすることが出来たのは、お互いに喜び、又感謝すべきであると思う。

二、設立計画

かえり見れば、PTAの記念事業実行委員会が発足したのは昭和三十四年秋のことであった。以来事業計画の立案をめぐって数多くの会議が開かれた末、生徒ホール建設その他の具体案が次第にまとめられて行った。山の寮建設計画が浮び上り真剣に討議されたのは翌三十五年の春になってだった。それは他の事業計画が具体化するにもなつて当初の計画に盛られた財源に幾分ゆとりが出来たことからして、この際、山の寮の建設にまで計画を拡張して、われらの宿望の一を是非この辺で実現させようという気運が次第は高まってきたのであった。しかし当時はまだ具体的な候補地があつての話ではなかったので、果して限られた予算内で、それを実現し得るかどうか、には大きな不安が残されていた。

そこで四月早々、先ず日本橋室町にある長野県庁の東京事務所を通して信州方面の実状の打診を試みた。存外有望な見通しがついて来た。そこで委員会も活気づき、遂に山の寮の建設に踏み切ったのであった。その後に関わられたPTA総会に於いてもこの計画案は幸い全父兄の支持賛成が得られて、いよいよ実現の運びとなった。

先ず理想的な候補地を求めるための現地調査が開始された。たま

／＼私が長野県生まれであちらの事情に多少通じていると云うことで、第一回の現地調査の大任は私が負うこととなったが、責任の重大さに私はいささか悲憤な決意を胸に秘めざるを得なかった。

三、候補地を求めて

五月三日の早朝、PTA会長の平沢さんに見送られて新宿を發つた私は、聖科温泉、白樺湖方面の調査を皮切りに、中央線、大糸線信越線と約一週間で信州を一周した。時は若芽のほころび、山桜の咲きにおう、さわやかな季節であった。これが単にスケッチブックを友に自然を相手の旅であつたら、さぞやと思う旅であつたが、寮の候補地を求めると云う重大使命は、私から熱心な閉め出ししてしまつたのは、今にして惜しいことだと思つてゐる。

さて委員会によって打ち出された寮候補地の適性条件としては

- 一、夏期施設に適當であること
 - 二、冬期スキー施設にも適地であること
 - 三、運動部の夏期舎宿にも便宜をそなえていること
 - 四、環境の良いこと
 - 五、温泉の利用できる土地
 - 六、交通の便の良いこと
 - 七、医療にも心配のないこと
 - 八、地価、建設費等経費の見通しが予算の範囲内であること
- その他盛り沢山の多角的条件が挙げられていた。したがって調査も慎重さを期さねばならなかった。

私は行先々、土地の市長さん、村長さんその他の有力者を歴訪し

候補地の推薦方を依頼して歩いたが、幸い何処でも皆さんは熱心に学校の計画に協力してくれて、忙しい中を時間と労をおしらずにジブや或いは徒歩で、現地案内をしてくださった親切は忘れ難い。

またそうした私の遍歴の副産物として、東京の「松原高校」と云う校名は信州のかなり広い地域に知れわたった筈である。若し今後その辺を諸君が旅行する際はそれを承知の上で行動し、恥をかかないでもらいたいものである。

かくて各地を一巡のあげく、私が学校へ持ち帰った候補地は

- 一、豊科温泉及び白樺湖周辺
- 一、北ア山麓、大町葛温泉及び黒沢高原
- 一、白馬山麓、落倉及び佐野坂スキー場周辺
- 一、山田温泉及び五色温泉池帯
- 一、浅間山麓小諸高原池帯等

十余ヶ所である。

四、山田温泉に決まる

これらはそれぞれ特色ある好条件を具えた土地ばかりであるが、そのうちから一つを選ぶとなると、なかなかむずかしいものである。それで決定は委員会の審議に待つことにした。委員会はこれらの候補地にもう一カ所群馬県新鹿沢温泉を加えて、慎重審議の結果、先ず山田、新鹿沢、葛の三カ所に候補地をしぼり、更に校長先生とPTA会長さんによる現地の再調査の結果にもとずいて最後に「山田温泉」を施設地とすることに決定を見たのは、六月中頃のことであった。

この山田温泉を理想的な適地として最初に推薦してくれたのは長



生徒収容力五〇名を目標にした木造二階建延べ五十二坪、居室数

七、畳数五十畳、他に調理室乾燥室、便所等が設計の概要である。これを更に専門の設計家の手をわずらわして完備した設計にまためてもらう筈であった。しかし残る日数も余猶乏しくなってきたので、施工を急ぐ必要上、それを省いて結局私の原案設計のまま、着工に乗りだすことになってしまった。

施工者は現地の高山村役場の幹旋により入札の結果、地元の小出土建が請負うことに決定、七月早々地鎮祭、次いで下旬に上棟と工事は進められたが、何といつても着工の時期が遅れたために完工はおくれて八月末になった。

六、落成式

結局、夏休みに生徒諸君に利用してもらうことが出来なかったのは残念であった。しかし出来上がった建築は、寮としては先ず申し分のない建築とほめられるほどの出来栄で原案設計者として安堵の胸をなでおろした次第だが、これは施工に当った小出さんという人が実に良心的な技術者で犠牲も惜しまずに存分な工事をしてくれた賜であり、良き施工者を得たことは、まことに寮のために幸いなことであった。

九月七日に学校からは校長先生とPTA会長が代表として出向き、また地元からは数十名の代表者が列席されて、山田寮の晴れの落成式が、木の香も新しいその建物で取り行われた。

かくて寮舎の建築は済んだ。あとは内部の設備、調度類の調達である。これも新世帯同然の寮のことであるからなかなか大変な仕事

野県庁の観光課であった。県庁を訪問した私から候補地についての希望条件をきいたその吉田係長さんは「それなら先生、山田温泉です。あそこなら夏は涼しいし、山あり谷あり、冬はスキーに良し、温泉もあり、しかも環境も俗化せず学生にはもってこいです。」と言下に山田を推薦してくれたが、実際これだけ多方面な条件を備えた場所是他になかったのである。しかも現地の山高井郡高山村役場では村長の黒岩義雄氏をはじめ皆さんが非常な熱意をもって学校の計画に協力して下されて、温泉池帯の一角の村有地の提供を約してくれたのである。寮の敷地としては七〇坪ほどでやや狭いのは難であるが、すぐ目の前には立派な浴場設備が村営で既に建てられてあり、したがって寮の建築には浴室はつくる必要もないと云う有難い条件が備っていたのである。

山田の周辺五色温泉に至る松川溪谷や、牧場の美しい景観については、既に松高新聞にくわしく紹介もされたのでここでは略すこととする。

五、建設

さて土地が決ったからには次は建設である。なるべく夏休みに間に合うよう建設を了え、一日も早く生徒諸君に使用させたいというのが委員会のかねての意向であった。その夏休みもあと一カ月後にさしそまつたので設計も急がねばならなかった。

設計については、私が委員会の依頼で原案作成に当った。素人の私のこと故苦心をしたが、十数枚の原案をかき改めるうちに、ほぼ皆さんの賛成を得られる原案設計に迄こぎつけた。



ではあったが、委員会の方々の協力によって十二月迄一応の整備を終えることが出来た。その主なものは寝具五〇組をはじめ、調理器具、食器類、暖房設備、スキー十七台（別に同窓会より寄贈の十台を合わせると二十七台）等である。これで不充分乍ら一通りは設備も整った。

七、結び

この冬、スキー教室その他で、トップを切って山田へ出掛けた約百名の諸君は、幸い雪にも恵まれて快適な寮生活を味わって帰ったようである。

今後年々歳々、多くの生徒諸君によって寮が色々に利用されていくであろう。諸君の松高生活の中で寮が正しく活かされ、又愛されていくことを願って止まない。

終りにこの寮に設立あたって、校長、平沢会長さん、黒岩村長さんをはじめ、直接間接に御尽力下された各方面の方々に對し関係者の一人として心よりの感謝の意を表し、この稿を閉じる。

そんなもんじないよ

教諭 宗内昭春

私達は今親しくしている仲間の間で「そんなもんじないよ」という言葉を流行させ、事ある毎に好んで使っている、誰かがお菓子など食べている時をこへ行って「そんなもんじないよ」と言って

手を差したすと、分け前にあづかれることになる。私もいるのに自分だけ食べるのはずい、そんなもんじゃないから少し呉れろという意味になる。特に女性が美しい声で語尾の「よ」にアクセントをつけて言うのと何ともいえない余韻があり、とても魅力的だ。とにかく大変味のある、意味深い言葉に感じられる。物事の無理を通そうとしたら、自分の依頼を拒絶されてしまった場合に、理屈として使う言葉ではない。些かふざけてはいるが飽くまでも信頼出来る善意の人間同志が、勿体ぶったり億劫がったりしている時に使う言葉である。そこには理論も道理もなく、強要も制約もない。こんな他愛のない言葉も人間社会にはもっと数多くあって良いと思う。私はテレビなどを通して一部に流行している「申し訳ない」も、そのまま素直に受け入れている者の一人である。合理化され、機械化されることは勿論必要であり、大切なことであるが、唯それだけでは世の中は余りにも殺風景で味気ないものになってしまうのではなからうか。近代文明が発達し、高度にメカニカルされたアメリカに於て現在一番困っている問題は人間関係だという。生活の中に、無駄なことやつまらないことが少なくなり過ぎたからではないだろうか。何かにつけて合理化し、理屈をつけようとするところに、現代の人間社会に於ける危機があり、自認インテリの悲哀がある。登山家は「そこに山があるから」そして山が好きだから登るのだと言う。その純粹さに心を打たれると共に、大自然に通じる心を失いたくないものだと思う。何の為に、何の必要があって、と言っていたのでは、クラス会やコンパは開けない。お花見や盆踊りやお祭りなどが、全然なくなった生活は考えただけでもやり切れないが、然し依然とし

い。思うに、私達が間違ひなく両親より生を受けた人間である限り、高遠な理論の分析や構成もさることながら、割り切るべきでないニュアンスや、掘り下げてみてはいけない深い味わいを忘れてはならないであろう。

某月某日

教諭 富増寿男

午前六時

今朝は寒気がきびしいようだ。毎朝、六時になると鳴り出す府中市役所のチャイムの曲が、まるで空の途中で凍りつくように冷え冷えと、目覚めたばかりの枕元に響いてくる。チャイムがあっけない余韻の中に消えてしまうと、締めたようにまず妻が起きる。そのあと僕は少し蒲団のなかで、未練たらしめ自分の体温をなつかしんでいて、妻がつけてくれたストーブが真赤になったところ、やっこのことで起き上がる。

それから、丹前を肩に引っかけたまま、隣の部屋で、静座合掌瞑目して、三十分間お礼をする。福岡にいる弟が、この冬の初めから「自律神経失調症」という奇病にとりつかれて、九大病院に入院している。その病状平癒を毎朝僕なりの宗教作法で念じ続けているのである。妻は僕の信仰生活を理解してくれるので、傍からみてちょっと滑稽にみえる僕の姿を笑いはしない。僕としても、別に祈ったからと確信があるわけではないが、一日の最初にあつ

て残っていると根強い人間性がある。すべてをとことんまで割り切ろうとするとどうしても無理が生ずる。少なくとも人間の世界は「そんなもんじゃなし」である。

話は違いますが、私はいつか学校からルーブル展を見に行つての帰り所要である有名な画家のところを訪ねて、たまたまルーブル展を見た話になり、「私は絵は分りませんが」と言つたところ、ひどくお叱言を頂戴した。日本で絵やクラシックの音楽が、特定の人に限られて大衆に愛されにくいのは、分る分らないという言葉に抱束されるからだと言ふのである。分らないというのは、分るといふ人意識して。卑屈に、又遠慮して発する言葉であらうが、美術は感覚に訴えるもので、慣習上に分る分らないというのはおかしいと言ふのだ。分らないという者は、必然的に芸術は分らないし、自分には関係ないからと、遠ざかるうとするのである。仮りに食べて「私は味は分りませんが」と言つたとしたらどういふことになるだろうか。恐らく聞いた人はびくびくして病院へ行くことをすすめるだろう。先生のお話は、味については分らない人はなく好き嫌いがあるだけだが、絵やクラシック音楽についても同様に、分る分らないを好き嫌いに置きかえてみたらどうかと言ふことであつた。成程とそう考へてルーブル展をもう一度見直したら、「分らない」が頭にあつて重苦しかった前回にくらべて大変楽しく、私にも好きな絵は沢山あつた。セーヌ河のほとりで写生していると道ゆく車夫までが立ち止まつて後から覗いて見るほど絵が大衆に愛されているというフランスの秘密も、案外ここらにあるのではないだろうか。人間の社会や生活の中には、この種のものが可成り多いような気がしてはならな

て、他人への思いやりに時間を捧げたというそのすがすがしさは、例えようもないさわやかさだ。その勢いで、冷たい水に顔を突っ込み、ひげを剃り、ボマードをぬる。下の二つになる女の子はひどく早起きで、まだ上の女の子が眠っているのに這い出して来て、僕が食卓に向うと、ちょこんと向う側に坐つてお相伴をしてくれる。そして、僕が洋服に着かえて、玄関で「バイ・バイ」と手を振るころは、もう眠むような顔をして母親に抱かれてゐる。僕は霜柱の立つたかちかちの道を踏みしめながら、「さて」と、あたたかい弁当の包みをかかえ直して、今日一日の生活に出發する。

午前八時半

朝のホームルームが始まる。廊下を教室に急ぎながら、このころ僕はきまつてメランコリックな気分におそわれるようになってゐる。緊張しなければならぬ時間の筈なのに、堪えがたい倦怠が僕の心にかかってくる。こんなことは、昔はなかったことだ。先生になったばかりの頃は、生徒の顔をみるだけで、不思議と生き甲斐に似たものを感じていた。男の子女の子も、一様にかわいく思っていた。多分そのころは、それ以外に僕の愛する対象がなかったからなのかも知れない。それにしても、今の空しさはどうしたことだろうか。

今一日の生活を通して、がっかりと心に喰ひこんでくるのはずの感動を、こも期待できないというのはどういふわけだろう。僕が生徒から離れているのか。生徒が僕を必要としないのか。二十四才

の僕だったら、離れていると分ったら、こちらから近づくことが出来るかもしれない。必要とされていないと悟ったら、必要なものを作り出すことが出来るかもしれないのだ。それを思うと、先生になって十年過ぎた今の僕には、無気力と情性のほかは、何も残っていないような気がする。十年前、最も僕が軽蔑していたタイプが、どうも今の自分らしいのだ。

「しかし」と、僕はすぐ考え直そうとする。若さに全てをゆだねていたこと自体が異常だったのだ。權威に反抗する媚態で生徒の人氣を集め、独善的な自分の考えを押しつけることによって、純情な生徒たちをスポイルしたということはなかったか。さびしい反省だが、今はその中に徹底することだけが救いとなってくれるのではないか。平凡さということはやはり尊い。ペテランということは、やはり価値のあることだ。しかも、その平凡な繰り返しの中に、僕なりの新鮮さを吹きこむということは、人間生きている限り作り出せないことではあるまい。そう思い直して、僕はちよつと肩をそびやかすようにして、教室のドアに手をかける。

午前十二時――

四時間目の授業もあと三十分だ。同じクラスの三時間連続の、あとの方の時間なので、どうしても気分的に息切れしてくる。教材は一年国語の現代文の「史伝の文学」である。漢文を順番に、二、三行ずつ読ませて見る。全く予習して来ないようなたどたどしさで読まれると、イライラしてくる。「欲して」を「ヨクして」と読んだ奴を、思いきり大声でどなりつけてやった。となった後は、かえって

わびしい。

調子を変えようと、今度は思いきり明るい語調で、教科書の主人公の人物批評にスポットをあて、素直な人間の持つ良さといいものを説明する。生徒は素直なものだ。こちらの雰囲気に入ってきてくれて、用意している場所で必らず笑ってくれる。しかし、この同じ場所で、ほかのクラスの生徒も笑わしたのだったなあと、変にむなししい思いで、一諸に楽しくは笑えなくなる。救いを求める気持で、僕は何人かの生徒の顔を眺めてみる。生徒たちは、間違ひなく真面目に笑っている。そして、サワリの場所では、真剣に考え込んだりうなずいたりしている。その輝いた瞳に嘘はない。やっぱり、そこに信じておかなければならない教育の事実があるのだ。

そうしてみれば、才知のひらめきにのみ興をつなこうとするのは、邪道ということになるのだろうか。それにしても、質問に、こちららむきになって、時間の経つのも忘れて議論しあっていたよ、その学校の生徒のつらにくさが、今となつかしい。

午後四時――

放課後の職員室はひとしきり活気づく。ほつとした解放感が、見なれた部屋のなかに、新しい雰囲気の色彩をどつぷりとすりこんでしまう。ストープの周りで、相撲の話に夢中になっている人たちが、机のかげで囲碁や将棋をかこんでいる人たちが、何か相談ごときにきたらしい生徒と、いつまでもひそひそと話しあっている先生、教材研究に一人黙々と書をめくっている先生――。

話し相手のない僕は、無意味に歩いたり座ったりしている。話し

相手がある時には、内心の楽しさとは別に、却って迷惑そうなそぶりを示して、相手をじらしてしまふ。どうも僕は、交際の下手な、孤独な部類の人間に入らうだと思ふ。それでも心の中は、いつも一つの自負にささえられていて、虚勢を張っている。それが本当はよくないのだから。もっと自分の心の中をぶちまけて、好きは好き、嫌い嫌いとはつきりさせれば楽になるのだ。ただ、嫌いといわれ、誰かの心が傷つくかもしれないと思うと、それが堪えがたい。むしろ黙っていた方がよいと、再びもとの自分の穴の中におくまる結果になってしまうのだ。自分ながら、うぬほれと世間知らずの程も甚しいものだ、と、あさましく思う。いずれは自分の生活に革命が来なければならぬ。せつかくの囲碁の手ほどきの本も、読みかけたまま放り出している――この余裕のなさが敵なのだと、僕は放課後になるたびに考える。

しかし、その前に、僕にはまだほかの生活がある。あわただしく学校をとおび出して、今から寄りなればならない家庭教師の今日の日のプランを考えながら、急ぎ足で歩く。今夜のうちに書きあげなければならぬ通信添削の答案の枚数を計算しながら、ホームに駆け上り電車のなかにとびこむ。そして、定時制の授業の始まる時間を気にしながら、阿佐ヶ谷の商店街の人波にもまれている。この商店街の奥の分校に、時間講師としての勤めが、あと一と月は残っているのである。

午後九時――

定時制の授業が終る。四百五十人の生徒たちは、わらわらと明る

い照明灯の校庭に散って行く。職員室は生徒たちの出入りでごったがえして、僕たちの講師はもみくちゃにされている。まるで、生徒ホールみたいだ。先生と談笑するもの、授業の算間をするもの、今日の休日の行楽の相談をするもの、職員室のすみでは、生徒と先生の社交ダンスさえはじまっている。僕もここでは、古巣に帰った気やすさから、思いきりふざけ、散らして、女の子のセーターをつまんだり、男の子とボクシングの真似をしたりする。先生たちとも「おまえ」「おれ」の気楽さだ。この雰囲気はまきこまれると、週に一回顔を出すあのしづい顔の校長さんも、実に愉快な話ずきのおじさんにかわってしまふ。

四年生の女の子たちが「一諸に帰りましょう」と誘いに来る。「今日給料日ですから、先生にコーヒーをおごつてあげますよ」という。駅前の近くの「モーツァルト」という音楽喫茶が彼女らの根城なのだ。うす暗い照明の中で、クラシックな音楽のおつきあいをさせられる。「ねえ、先生、相談にのってよ」と、恋愛の悩みを聞かされるのもこうした折だ。昼の生徒とちがって、彼等には社会人としての目覚がある。言うことがひどく大人びていて、そのくせお人好しかすことが多いが、こうした喫茶店での約束ごとにはひどく義理がたい。しかし、それがいささか煩わしくなってきたのは、僕の年のせいだろうか。

いい加減に切りあげて、あとは、若い先生たちが待っている駅の飲み屋に駆けつけなければならないのだ。みんな同じころ次々と結婚して、微に入り細をうがっての新婚旅行の報告話を、お互いに抱

腹絶倒しながら、聞かせあい聞きあったという仲間なのだ、もう十時を過ぎていたようだが、彼らは終電までねばるはずだから、まだ遅い時間ではないのである。

午後十一時——

深夜の府中の街は、全く人通りが絶えてしまう。けやき並木の辺りは、気味が悪い程のくらやみだ。妻はまだ起きていて、待っていてくれる。あたたいストーブで、やっと凍りついた頬の筋肉をゆるめながら、いつものくせで、オーバーを脱ぎながら何か「変わったことはなかったかい」と僕はたずねる。妻も決まった調子で「さあ、別に何もなかったわ」と答える。そのくせ、今日届いた手紙の束を眺めながら、ウィスキーをなめている僕に、何やかやと話し出す。子供の幼稚園のこと、庭の鉄棒で近所の子供が遊んでいたということ、街の食料品の割引のこと、ラジオの放送劇のこと——これは実によく覚えていて、その筋書きをセリフを再現しながら、くわしく話してくれる。

そのうち、ピアノがほしい、着物がほしいと、真面目に相槌を打っていては、具合の悪いことに話が発展していく、どうせ実現するはずもないことから、僕はいい加減に笑いにまぎらせて聞き流しながら、それでも夢を持つことは楽しいことだと、心の中では考えている。お茶をいれている妻の白い横顔をちらつと眺めながら、「もう六年のつきあいだなあ」と、人並みなことを思い出してみるのである。



クラブ紹介

文化部

英語部

一、クラブ内容

○部員三十余名

○部会毎週一回

二、三十五年度の経過

○外人講師を招いて毎週水曜日に一時間英会話の練習。

○リンガフォンを用いて、英会話の練習。

○アメリカンスクール訪問。

○アメリカその他の国の学生との文通。

○文化祭には英語劇を演じました。

○楽しいクリスマスパーティーも行いました。

三、三十六年度への抱負

○日本駐在のアメリカその他の国の学生や都内の各高校のクラブとの交際を広めて知識を深めたい。

○優秀映画鑑賞等を行いたい。

数学部

人間誰にでも生涯つきまとうもの、それは数。日常これに関しない時は無いと言っても過言ではないだろう。その数を基に成り立つた学科が数学であることは周知のことであり、又むずかしいと折紙をつけられる学科としても存在をなしている。数学を易く理解し、興味を増し、あわよくば成績向上にも役立てるといふ偉業をなそうとするが、文部省に指定されるべき我校の数学部だろう。この学科は、一に興味、二に努力、三に忍耐を持って初めて楽しいものになり得る性質がある。楽しさが身につけばシメタものである。数学という学科が得意科目と成り果てるのも問題ではなくなる。きつと良い結果も約束されよう。だがこのような状態に、簡単にすることが出来なのが一般に偽りのない事実である。だから先程の諸要素を現実に通じだそうと努めているのが我等数学部である。得意な人はもちろん不得意な人はなおさら入部且つ利用を願いたいものである。先輩の厚い指導、グループ学習の効果、友人間の親睦、自己の趣味を伸ばす等あらゆる利点を含んでいるのが松高の数学部だ。その内容の一部を紹介しよう。必ず数学部の魅力を感じるであらう。

一 部会は毎週月水の二回。

二 数学部主催校内コンクール……昨年かなりの成績を収めた。

三 夏期及びその他の休暇の部内レクリエーション。

四 文化祭出展等多様な活動内容で校内でも中堅的存在のクラブ。それが数学部だ。多数入部してより一層充実したものに築き上げようではないか。

化学部

私達の化学部は毎週月・水曜の放課後化学室で活動しています。現在の部員数は二十名程で大島・関・両先生の指導のもとで熱心に研究を続けています。昨年の活動内容を二、三あげますと、夏休みには製菓工場を見学しました。又、文化祭には毎年好評の液体酸素やドライアイスの実験を始め、全部員がそれぞれ自分の個性を発揮し種々の実験や展示を行いました。共同研究としては、現在松高付近の井戸水の水質検査を継続中です。以上がだいたいの内容ですが、週二回の活動日には、主に二、三名のグループで自由に実験等を行なっています。今年の抱負としては、共同研究等を通して部員相互の理解を深め、楽しく部活動が出来るようにし、又、部誌を発行して部員の研究発表の場にしたいと思っています。新入生の皆さん！化学に興味のある人はぜひ入部して自分の研究心を養って下さい。

生物部

部員三十数名からなる我々生物クラブは、特に根気を必要とする。文化祭等で発表する場合でもそのデータを集めるには、とても一夜づけでは出来ない、短くて二、三カ月、中には三年、四年とかがってやっとデータのできるものもある。

部の目的は、部員の個性をのばすため遺伝研究班、植物班、鳥類班、昆虫班、発生源の五班に分れそれぞれ違った研究を、互の協力と先輩の親切な指導の下に常に疑問な事を追究し、観察すること生心がけ、平素から生物に関する知識を豊かにし、我々の周囲の多く

をひめる木や草、鳥や昆虫、又目に見えない微生物まですべての物はみな、いかに環境に適用した生活を営んでいるか、又これらの生物が高等になるほどその体の構造は、ますます細かく複雑になり、我々の疑問となる事が、数しれずあるのに気がつくのである。これらのほんのわずかも我々のものにしようと、熱意、忍耐を持って努力していかなければならない事をきまに命じて、これからの部の向上をはかっていきたい。

演劇部

一、現在、部員は約十五名。月、火木の三日が練習日。

二、昨年度は、新入生歓迎会の「シガマの嫁コ」を皮切りに、六月には放送劇「雪」を発表。好評を得ました。次いで文化祭には、生徒創作の「北の民」を上演。多くの人を感動させて、大好評を得ました。高校演劇コンクールにおいては、初出場でありながら、審査員の感動も呼び、みごと、中央発表会に出場する榮譽を得ました。

三、三十六年度は、昨年度の経験を生かし、よりよいお芝居を上演していきたいと思っています。

私達は、演劇によって、創作していく喜びを、共にわかちあえる仲間を、いつも待っています。

さあ皆さん、手をつないで、三年間を仲良くやってみませんか。

ユネスコ部

私達のユネスコ部は、ユネスコ憲章の「戦争は人の心の中で生ま

れるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」と云う前文を、高校生としてできる範囲で実行しようとして生まれたものです。

その為には文通、交歓会、見学、研究、発表、花壇作り、施設訪問等を行っています。

今まで、こう云う活動をした事のある方、友達を作りたい方等松高生ならでもどうぞ。

そしてユネスコ部発展の為、張り切って活躍してください。

美術部

一、部員三十二名 自由油絵用具 石膏 他一切を備えている
放課後各自の意志により自由練習。

二、春 校内展示

夏・合同制作に苦心（各学年一枚）

・芸大講習会に参加

秋・文化祭に多くの作品を展示

・他校文化祭に作品を出品し、他校との交流を計った

三、明るく楽しいクラブにしたい又活動部員が非常に少いので新入生の入部を希望する。

書道部

一、練習日は月、木曜日。午後三時より五時迄。二十八番教室。

二、各種校内大会の催し物の際の賞状を書き、全国学生書道展において優秀な成績を修めました。また夏休みにはお寺へ拓本を取り

に行きました。

三、今年度は昨年度よりもっと校外の展覧会に出品して成績を向上したいと思っています。

興味のある方は勿論、卒業後も役に立ちますから、きらいな方でもふるって入部して下さい。特に男子の方の入部を希望いたします。

写真部

現在部員一、二年を合わせて三十数名で活動している。今年限りで生物室に併置されている部室を、新たに職員室の近くに移動する予定で部員一同非常に張り切っている。活動の様子を紹介すると、フィルムの現像は今まで写真屋に任せるより方法がなかったが昨年より設備も整いそれが、可能になることは、一貫した写真技術の修得に役立つことと思う。去年の秋の芸術祭には「写真」の始んど完全に近い姿を観覧者に発表し、好評を博した。すなわち、一昨年までの芸術祭に於ける写真部室はいつも先輩との部員の写真を教室全体に飾っておくだけでマンネリ化して、一体写真部とはどんなことをするのか、どの様に像が現われるのか、実際にこれに携わった人以外理解できなかったと思う。そして昨年毎年の例を打破しようとしてD・P・E総て見せることになり、暗室を組立ててそれを発表した次第である。

家庭部

一部員は三十五名、食物、被服の二部に分れていますが、現在被

服の希望者が少ない為、食物を主に行なっています。

二 毎週木曜日に実習を行なっています。文化祭には食堂を開き、少ない設備の中で三種類のものを作り結果は上々でした。又、クリスマスにはデコレーションケーキも作りました。

三 昨年は非常に一年生が少なかったため今年は新一、二年生の入部を希望します。又、今年是被服の方もやってゆきたいと思っていますので多くの方に入部していただきたい。部員の趣味を一層広くし、昨年より一層頑張るつもりです。新一、二年生の皆様、是非我がクラブへ

物理部

今や世界は電気によって支配されている、といっても決して過言ではない。すなわち上は電気計算機、オートメーション機械から下はラジオ、テレビにいたるまでの、その電力源はエレキである。さて、この見捨てざるべからぬ重要なエレキの研究を背負って立っているのがこの物理部である。我が物理部は電気の基礎であるラジオの研究を行っているのである。豊富にある工具と部品を使いラジオでも電子楽器でも製作可能である。

現在、部員は十五名、研究日は月、水、土。

華道部

昔から花を愛さない人はいないといわれています。その花を生けてみたいとほとんどの方が思っていることでしょう。ところが幸福にも、私達は毎週美しい花に囲まれているのです。あのチョキチヨ

文芸部

文芸部ほど全校生徒に密接な関係をもつクラブはないでしょう。何故ならそれは、自由な場を有しているからです。同部で発行している雑誌『たわごと』は皆んなが気持ちを自由に表現発表し、かつ又観賞し合う場なのです。

——時に我々は、時間・感じ方・考え等を一にして過ぎ去ってしまった道を通り直してみたいと思うことがままある。

今の自分は以前と余りに変わってしまったのだから致しかたないと思いつつ振り返る私の場合、『たわごと』は現在の自分をよく確かめ自分をいとおしむ支となるのだ。——

誰れかれに添則してもらおうでもなく、自由な気持ちの表現、それはほのぼのとして良いものです。

『たわごと』も第九号までと発展し続けました。これからも一歩又一歩前進する様、部員一同一生懸命です。

社会科研究部

一月十五日、この日は成人の日である。そして今年も多くの若人が成人されたのだ。

私達も後二三年たてばいやでも二十才である。その日が来た時、私達は多くの喜びと、責任感を感じるにちがいない。なぜならば、はじめて一票の選挙権をもつことができるからだ。私達は社会に対する正しい批判の目とたしか知識を身につけて、自信をもって投票したいものである。それには今からそれらを学ぶ必要がある

キというハサミの音、何か一週間の悩みが消えてしまうようです。今では用具もだんだんにそろってききましたし、毎週土曜日の一時から始めるお稽古には、古流の久野先生においでいただいて、楽しく又活発にやっております。

これからも部員の皆さんに喜ばれるよう、いつも笑いのあふれるような部にしたいと思っていますので皆さん華道部へ入り、花のようなおだやかな心を作ろうではありませんか……。

男生徒の方も恥かしがらずにどしどしお入り下さい。

音楽部

私達は色々な時、何か音を出すことによって自分の気持ちを満足させます。その音にリズム感をもたせメロディをつけたものが歌なのです。どうせ音を出すなら良い音を出しましょう。

それには毎週月曜日と木曜日の放課後音楽室までおいで下さい、きつと楽しい美しいハーモニーが流れて来るでしょう。

唄うことは嫌いでも聞くのは好きな人、下手だが皆と合唱しているといやなことを忘れてしまう人、誰方でも結構です。大切なのは音楽を愛する心を持っていることです。

毎年文化祭にそなえ皆で作っていき喜びを一人でも多くの人に味わって頂きたいのです。

さあ、男子も女子も松高の音楽部をもっと明るいものにしていきましょう。

のではないだろうか。こんなふうに思われる方は是非社会科研究部に入ることをおすすめします。

とかく社研などと聞くと、かた苦しいクラブだと考える人があるようですが、決してそんなことはありません。顧問の先生をまじえて本を読んだり、時事問題をとりあげてみんな話したり、他校の訪問をしたり、雑談したり致します。又、昨年の文化祭には「安保闘争の記録」と題する研究発表「株について」の研究発表、時事用語の紹介、その他いろいろなアンケート等、多方面にわたって行いました。部会は毎週火曜、現在部員は十余名ですが男子がすくないので、男子の方の入部を歓迎致します。このクラブは、活動しはじめてから今年の四月でやっと一年しかたっておりませんので、これからの活動は入部された方々と一しよに改善していくつもりです。皆さんごきらくにおいで下さい。

運動部

バスケット部（男子）

諸君は高校入学生という難関を突破し、何か高校生らしい事をしようと思込んでいることであろう。その一番手早い方法はスポーツである。松高に於ては特にバスケットを選ぶようすすめる。それは練習量、スピード・チームワークを誇る我が部がスポーツの目的たる自己完成に最も役立つかからである。合宿、諸大会、対校試合どれも諸君の意気込みを見せるにふさわしいものだ。

次に我が部の特色をあげる。

- 一 夏の合宿に於て部員間のチームワーク、忍耐力をつける。
 - 一 先輩間の精神的な差がない。
 - 一 現部員の多くは高校で始めた者ばかりなので経験の有無に関係なく入部を希望できる。
 - 一 試合数を多くし経験を積ませる。
 - 一 練習日は火、木、土の三日間。その他夏の強化練習あり。
- 尚、特に今年は一年生の参加を強く望む。現部員数は二十名である。

バスケット部 (女子)

現部員は二十五名程度。そのうち、実際に練習に参加しているのは十三人位である。

練習日は火、木、土の週三日間。
クラブの勝率は三割程度。あまり強い方ではないが、昨年夏より、コートにも来ていただいていますし、特に一年生が近頃、以前より一層熱心になってきたので、これからますますのびるチーム。バスケットの得意な人はこちらのこと、積極性、協調性を養いたい方でもどうぞ。

庭 球 部

男女共五十名近くの人がこのクラブに在籍するにもかかわらず、コートが一面なのが悩みの種、従って一週間コートをフルに使用し、現在まで不規則的だと言われた時間使用を規則的に且つ効果的

陸上競技部

部員は現在十三名。

練習は日大グラウンドを借りて、火・木・土の週三回、長距離を中心にしています。

陸上競技は地味な運動ですが、それだけに記録の上があった時の喜びは、経験者でなくては判らないものです。

この学校の陸上部は人数も少ないし、活動も地味ですが、今年からは松高一の部にしたいと思っています。

新入生の皆様ふるって御入部ください。

柔 道 部

我々柔道部は肉体的、精神的、社会的に健康な人間となる事を目標として、毎週月、水、木、金の四日間練習に打ち込んでいる。

今年度の我がクラブの活動を振り返ってみると、十二戦して六勝六敗というあまりおもしろくない成績であった。これを二、三年前と比べると問題にならないほど弱体している。この最大の理由は二つある。

- 一 部員が余りにも少ない。
- 二 予算が余りにも少ない。

予算が足りず途中でコーチにやめてもらった事は帆をなくした船にも等しかった。

我々は先輩達の築いたような強固な柔道部を夢見て、再建の意気に燃えているのである。

に利用し、練習に励む。一年生は基本練習多し、しかし努力次第で一年の時からレギュラーになるのもあながち夢ではない。二、三年は練習試合多し。

先年度に於て、学校対抗練習試合は成績良好なれど、大会に於ての勝敗かんばしくなく、全てを今年に掛けていた。今年は女子も高体連に加盟をし、男子同様試合度胸をつけると共に技術を向上させてもらう。又他校との練習試合に於てより以上の親睦を高めることを最大の望みとしている。そしてクラブの年中行事で最も楽しく、又大切な今年の合宿はテニス部単独で八月初旬一週間位郊外で行う予定。

エネルギーの発散地ここにあり。

野 球 部

去年の成績は十八勝四敗で勝率は八割一分八厘であった。その中の三敗はいずれも都一高校だったので悔いはない。夏の全国大会では支部代表となり、秋の新人戦には、早実と並び都ベスト四になった。これは松高始まって以来なので部員一同誇りにしている。なお、部のまとまりには、第三支部中でも定評があり、各校から試合の申し込みが殺到している。

現在の部員数は二年生十名、一年生十一名合計二十一名である。現在の一年生には野球の経験者が少なく経験豊富な人の入部を希望している。

今年は支部大会優勝はもちろんのこと、都大会で優勝し、全国大会に出場したいと思つて部員一同張り切っている。

今年度の大きな目標は、強固な柔道部の基礎を固める事である。そのために我々は、新入生の多数入部に希望をつないでいるのです。もちろん二年生の入部も大歓迎です。

次に、有段者を増す事。そして対外試合も一カ月に二回はやるつもりです。

山 岳 部

山へ何故登るかという点、やはり美しい景色と心の問題でしょう。僕達山岳部員はいつも、淋しい心と対立した心の中からも山へ行き、そして何かを考え、学びとって学生生活にプラスしようと思つて山へ行きます。山へ登れる心は純なものですから。それとも自然というのかなあ。まあ高校生活を愉快に有意義に過ごすなら決してマイナスにはならないと思います。そこで今年の山行を順に追つてふりかえてみます。

- 四月 新入生歓迎登山 南ア櫛形山
- 五月 丹沢 水無川
- 七月 夏山合宿 BC 淵沢
- 十月 奥秩父
- 十二月 金峰山
- 予定 三月 八ヶ岳

以上ですが、僕達はいつも楽しい有意義な山行を実行する為俗にボツカとか、新入生を絞るとかという事は無益な事です。から行いませんが基礎運動を週二回は行い、基礎の体力とび等を養い、又立派な岳人になる事を目標にしています。

ワンダー・フォーゲル部

皆さんの大部分の方は、登山ブームとやらのお陰で、ワンゲルとは何か御存知だと思ふから、そう云う説明は省く。

それでいよいよワンゲル部のP・Rだが、とに角楽しい集りだ。近郊へのハイキング、近くの山での模擬キャンプ、合宿等で家庭のとは又違う料理を味わい、都会の文明からのがれ自然に遊ぶ、こんなに精神衛生に良い事はない。

今年の合宿は八幡平まで足を延ばしたが、大抵伊豆、信越方面で行う。今まではいつもキャンプだったが、これからはユースホステルや山田寮等をどんどん使用するつもりだ。

新入生、二年生、三年生諸君、高校生活を有意義に送りたいのなら、是非ワンゲル部へ入る事を勧める。

ソフト部

私達ソフト部は設立して三年の年を迎えました。

最初の頃は、名前だけあるというような粗末なもので練習も遊び同様なものでしたが、現在ではソフト連盟にも加入し、他校との練習試合も何度か重ねました。

部員は二十五名おりますし、今の三年生は二年間練習をしたわけになるので、今年からは大分有望になります。それで今年は練習試合を沢山して経験をいかし、大いに活躍するつもりです。

練習日は火曜日木曜日土曜日の三回です。

ソフトの好きな人、又興味をもっていられしやる人は、出来る、



三 良い先輩が多いのでかかさず来て私達の練習を指導して下さいます。しかし今年こそはコーチを頼んで良い成果を修めようとはりきっています。そしてチームも、ラングが出来るようにチーム作りたと思っていますので、新二年生と新入生に期待を持ち、一人でも多く入部される事を希望しています。

舞踊部

舞踊というものに少しでも興味をもつ諸兄弟よ！

「踊ったことがないので入りたいけれど」「入りたいけれど、どうも動きが鈍いので……」こんなことをいわずに我校の舞踊部というものがあるか、まあ、入ってじっくりと眺めて見たまえ！ 何処の学校に於いても、舞踊部というクラブはなかなか入りにくいのだが一旦入って見れば何のことはない。それ迄にあれこれと考えていたことがきつと、馬鹿らしく思うだろう。先生（創作舞踊家、内田裕子先生）を中心に上級生、下級生の区別なく、一緒に楽しく自分の趣味を伸していく。こんな結構なことがあるだろうか！

現在、部員は十数人であるが毎週火、木曜日には授業の終るのも待ちどろしい位。チャイムが鳴り終るか終わらないうちに体育館のステージめざして飛んでいく。そして掃除……プレヤーの取り付け、そこで、おもむろにその日のレッスンが始まるわけである。又今日迄の作品は「美しき人達」「海の変容」その他いろいろあるがいづれもなかなかの好評を得ている。これらのことに於ても、諸兄弟の期待を充分に満足させるのではないかと思う。

出来ないを問わず是非おいだ下さい。

バレーボール部（男子）

昨年の対戦成績三勝五敗。

この成績が示すように昨年の成績は決して良いとは思いません。しかし一生懸命練習した結果、表われたもので、バレー部員一同としては何も悔はありません。又我々バレー部員は常日頃より必要以上の練習は思わぬ「けが」を招き逆の結果を生むものであるという事をよく知っております。その為第一目的を「学生を越えての親和」という点に置きバレー部員に同時に「本校のリードオフマン」であることをモットーとして来しました。しかしバレー部を自己批判してみるに、やはり練習不足、その他の反省すべき点が沢山思い出されます。昨年のあやまちを二度とくり返さぬ様。今年こそは、バレー部一同、新入部員も含めて新しい態勢で無理の無い計画のもとに、しっかりやろうと、頑張っているしだいであります。

尚、練習日は火、木、土の週三回、部員は二十名です。

バレーボール部（女子）

一 現在活動部員二十名。練習日は、火・木・土。

二 秋季新人戦を目指してファイトのあふれた普段の練習や、山中湖での夏季合宿を行ったけれども、三勝四敗という結果に終わった。これも指導者である二年が少なかった原因とも言える。しかし、多人数の一年生が途中でくじける事なくファイトと積極性を持っていて、チームワークも取れ、為になる試合であった。

諸兄弟のエネルギーと我々の力によってさらに良い舞踊部を築き上げようではないか。

顧問の邦高登志先生を始め、内田先生も我々も諸兄弟の入部をおおいに期待している。

ラグビー部

ラグビーと言うとすぐあはれは乱暴で危険なものだ、などというのがよく聞かれますが、これはとんだ間違いです。ラグビーというスポーツは、やってみないとこの面白さはわかりません。それにいろいろの厳しいルールにより、守られているので心配ありません。又これはイギリスにおいては、紳士の条件であります。このようにとても紳士的なスポーツです。

そして我々の部もこの精神にのっとり、勝敗は別とし学校間の親和を目的にしています。これからは松原高校発展のためにも、どうか入部して下さい。詳細は部員の方にお聞き下さい。

剣道部

現在部員十五名、練習日、月・水・金曜日、練習時間、放課後三時より五時まで。練習日にはかならず参加者が十名以上いる。放課後三時より、準備体操、基本練習、切返し、かかりげいこと行い、終るのが四時三十分前後、それより「わざ」の研究をし、黙とう、礼をして道場掃除、それでけいこ終了である。有段者は五名をかぞえる。目的は身体の強固、独立の精神を養う。

フォーク・ダンス同好会

そもそも発足したのが一月である。会員三十名で、練習には随時広く参加出来るようになっていた。しかしなにがとも無からある程度の所へこぎつけるということは大変なものである。この会でそれをいやというほど私は味わされたと言ふのは、せつかく練習の機会を作っても参加者が三、四人というのが何回かあった。さすがの私もけっこうとなつて、上級生や先生に半分泣きつくような気持ちで御意見をうかがったこの時ほど人のありがたさを知ったことはなかった。

なんと言つてもこの会にはあまり例のない、男女が一緒になつて練習したり、懇談したりするといふものであるから、本来の運動部系に二つも入つてはいけないことになっていくらしいが、適当に時間をさいて気楽な気持ちで、多くの方が来て下さることを望んでやまない。この会には本当にこれからといふ所なのである。

編集後記

ここに、第九号「る・くーる」も、ようやく編集を終えました。私達は、より良い文芸雑誌を作るために、全力を尽くしました。編集を終えて、大変残念に思う事があります。それは、内容の良し悪しはともかく、応募原稿の数が非常に少なかった事。委員でありながら、全然無関心で、それを当然のように思っている人がいた事です。これは、私達自身の雑誌である事を忘れないで下さい。最後に、編集に御協力下さった諸先生方、生徒の皆さんに、心か

ら感謝の意を表します。(F・記)

る・くーる委員

一年 水間、久慈、伏原、谷口、佐治、渡辺、新村
二年 船水、金指、柴原、中台、中島、平沼

「る・くーる」

第 9 号

昭和三十六年三月十日印刷
昭和三十六年三月十二日発行

発行所 東京都世田谷区上北沢町一丁目

都立松原高等学校生徒会

印刷所 渋谷区幡ヶ谷二ノ三二

静和堂 竹内印刷株式会社

TEL(初)七一八二三番

